
ネームレス

T・F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネイムレス

【Nコード】

N3165Z

【作者名】

T・F

【あらすじ】

記憶を求める少年の物語。

彼を支えるのは常識だけ。

しかしそれさえも、彼の目の前に訪れた現実は奪い去っていく。

荒唐無稽で途方途轍もない世界の裏側に身を投じた少年は、記憶と世界の未来を巡って走り出す。

「プロローグ」(前書き)

T・Fと申します。

当サイトへの投稿は初となります。

一生懸命書きました。

せっかく無料ですので、思う存分お読み頂ければ幸いです。
ます。

忌憚のないご意見ご感想をお待ちしております。

「ブローグ」

二〇一二年 某日。

通常、軍事基地に置かれるレーダーには、電磁波が用いられる。

レーダーから発された電磁波が対象物にぶつかり、跳ね返ってきた反射波を計測することにより、対象物との相対距離や正確な位置・方向を算出するのである。

しかし昨今、そういった通常のレーダー・システムでは感知されにくい兵器が、先進国を中心に次々と開発されるようになった。

ステルス
隠密性を備えた兵器だ。

それは主に戦闘機や戦艦に施される装備で、レーダー波を大きく屈折させて反射波を正方向へ返さないようにしたり、機体の装甲にレーダー波を吸収させる性質を備えた素材を用いたりするのである。ただ、レーダーも馬鹿ではないので、いくらステルス兵装されていても、距離が縮めば縮むほど発見しやすくなる。また目視されれば、ステルスはナンセンスな道具に成り下がる。

最近ではレーダーを送信機と受信機に分けて設置し、曲げられたレーダー波をキャッチするような高度な物なども考案・開発・応用され、進歩が続けている。

しかし、太平洋を越えて浦賀水道に差しかかったとある未確認飛行物体は、現代技術の粋を極めても太刀打ちできないほどの、完全と呼ぶに相応しい隠密性を獲得していた。

透過して目視できず、レーダー波を吸収し、かつゆるく屈折・歪曲させるので感知されず、自身の熱量を外気と同調させて熱量測定器や暗視装置による発見を回避している。サーモグラフィ ナイトビジョン

さらにその未確認飛行物体は、ほぼ無音で悠々と飛行していたのだった。

まさにUFOにも匹敵すると思われる、恐るべき性能を有した飛

行物体だ。

日本の海自及び米軍の、二つの横須賀基地の眼前を難なくクリアしたそれは、東京湾上空を突き進み、深夜の都心へと向かっていた。

* * *

「っていうかぁー、今回の作戦^{コレ}、完全に拉致ですよねー」

未確認飛行物体：もとい、ある組織の所有するハイテク輸送機

DEM 3 2 の中で、女が仰向けに寝転がりながら訊いた。彼女は機内右側の縦座席^{ロングシート}を全て占拠して、他三名の乗組員を向かいの席に追いやっている。

今年で二十一歳になる女のだらしない格好と物言いに、丸坊主の巨漢は溜め息をついた。

「何度も言わせるな、エリ。あくまで保護だ、保護……」

エリというポニーテールのよく似合う美女は、それでも食ってかかるように言った。

「いやいや、コレ絶対拉致ですよ。だって寝込み襲うんでしょ？」

しかも対象ってまだ十七歳の子供」

「言つな。気が重いのはお前だけではない。しかし、上からの命令だ。従うほかあるまい」

「命令って……。またあのバグって人からのタレコミですよ。信用できるんですか？」

「できると上が判断したんだろう。お前の勘繰りも分からんでもないが、だからこそ我々が差し向けられている。いかなる状況にも対応できる、我々がな」

「へっ。敵の偽情報^{フェイク}の可能性が消えねえんじゃ、体のいい当て馬扱

いじゃねえかよ。いくら俺達でも、こんな人口密集地でドンパチだなんて面倒は御免だぜ」

エリではなく、若い男が口を挟んできた。

銀髪のウルフカットの下で、鋭い三白眼を光らせている。彼は巨漢に続けて言った。

「まあ、それ抜きにしてもだ…。もしも対象がノーマルだったら、責任取れんだろうな？」

「それは…、その時だ」

苦い顔をする巨漢に、銀髪男は立ち上がって声を荒げた。

「一人の人生懸かってんだぞ、こんなことで犠牲者出してたら組織の名折れだろが!!」

「…名無しの我々に折れるものがあるか。少し頭を冷やせ、ケン」

銀髪男 ケンは、舌打ちして機内の壁を蹴った。

その様子[（]にエリは、「ワンちゃん怒られてやんの。カッコわるう

」

「ちっ…! 黙れよ、プレデター女」

「ああん!? 今なんつった!」

「やめんかっ!!」

巨漢の雷声が、わずかに機体を揺らした。

「貴様らはどうしてこう、いつもいつも…!!」

『酒^{しゅ}顛^{てん}隊長さん、アンタの声はデカ過ぎる。気を付けてくれないと

墜ちちまうぞ』

「ぬっ…！」

この輸送機を操縦する機長からの、機内アナウンスだった。エリがそれを聞いてほくそ笑んでいる。そんな彼女の性悪な様子にケンが悪態をついて、また騒がしくなった。

機長は苦労の絶えない巨漢　酒顛に同情しつつ、「三十秒で到着する。準備は良いか」

『良いと言えば良いし、悪いと言えば…』

酒顛はタッチパネルに軽く触れた後、横にある液晶ディスプレイに向かつて喋った。彼の指紋を認識し、操縦室のディスプレイ上に彼の名前と映像が表示される仕組みだ。

酒顛の困り顔に、機長達は微笑を浮かべていた。しかし次の瞬間、そのつるりとした頭に青筋が立ったので息を呑んだ。

『うるさいぞっ…！』

割れた声が、ビリビリとヘッドフォンを震わせる。

機長は咄嗟にそれを外していたのだが、どうやら間に合わなかったようだ。耳を押さえ、呻くように、「ユ、ユー・ハブ・コントロール」「アイ・ハブ・コントロール」副機長は苦笑いを浮かべて、操縦桿を譲り受けた。

『残り二十秒です。ハッチ、開きます』

副機長の礼儀の通った声が響いて、機内後部にあるパイロットランプが緑から赤へと変わり、点滅した。

『風速、高度、共によろし。降下ルート上に障害物見当たらず。オ
ールクリアー』

それを確認するよりも早く、戦闘服にゴーグルをかけた酒顛達
四人の隊員は、ランプ下の大きな後部ハッチに並んで待機してい
た。

「そもそもアンタ、めんどくさいのよ!」

エリとケンの口喧嘩は、ますますヒートアップしていた。ハッチ
が開いて滑り込んだ突風に機内がかき回されても、彼らは互いを指
差して文句を言い合っているのだった。

「何で一々、アンタに体臭断らないといけないわけ!？」

「仕方ねえだろうがっ、俺だって好きでこんな鼻持つて産まれたわ
けじゃねえんだ!」

「そんなの分かってるわよっ! レディーに対してのマナーとかエ
チケツトとかの問題を言ってるのよ! アンタはインモラルで陰ケ
ンなの、アンダースタンツ!？」

「んだとコラっ!？ テメーだって、ちょっと体温高かったら、目
が痛いからどっか行けとか言うだろうが! テメーはエゴイストで
人類のエリ屑なんだよ!」

エリはブンとむくれて、「ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァー
カ!! ヴァーカ!!」

東京の夜空に、知性の欠片も無い子供の暴言が木霊した。

もう一度明記しておく。エリは今年で二十一歳になる。

しかしケンにはそれが効果靚面のように、必死になって耳を塞い
でいる。

「るっせえっ、このアマ！！ 耳がキンキンすんだろっがっ！！」

耳を聳するほどの風音で、酒顛にはあまり聞こえていない。

けれどもケンには、エリの声がハッキリと聞き取れる。

彼はネコ並みか、それ以上に鋭敏な耳を持っているのである。

「いいから早く行け！！」

業を煮やした酒顛が、彼らをハッチから突き飛ばした。「ぎゃあっ！」と汚い悲鳴を上げて高度四千メートル付近から落ちていく彼らに、酒顛はまた一つ大きな溜め息をついた。

残るもう一人の隊員が、慰めるようにして彼の肩に手を置く。

「リーダー……」

「ウヌバ。俺、胃潰瘍になりそうだ……」

「すまないリーダー。イカイヨーとは何ダ？」

「……………」

ウヌバは、アフリカ少数民族出身の屈強な、酒顛よりもデカいナリをした男で、日本語は只今激しく勉強中の身である。

酒顛は何も言わず飛び降りた。その目はわずかに潤んでいた。

その理由が分からないまま、ウヌバも後に続いた。

* * *

目的地は、東京都内のある総合病院だ。

風速がゆるいお蔭で、落下の軌道が大幅にズラされることはない。たとえ小さな敷地が着地ポイントで、どんな天候でもそこへピンポイントで降りる術があるとしても、これは面倒がなくて好都合だ。

った。

彼らにとって最大の不都合とは、ただ単に思いも寄らぬ場所に降り立ってしまうことではない。そこで人目についてしまうことなのである。

およそ時速二百キロ前後で落下する中、まだエリはケンに向かって何かを叫んでいる。

彼はそれをうつとうしいので無視することに決めた。

代わりに、ミーティングで話された任務概要を思い出した。

円卓がある部屋の中心に、ホログラム映像が浮かび上がる。四人を模したキャラクターが、輸送機からスカイダイビングしているシミュレーション映像だ。

『目標ポイントは、都内の病院だ。輸送機で上空まで接近し、ダイブする』

ケンはゴーグルのテンブルに触れて、電子マップを起動させた。ひっそりとした深夜の街並みに、道路や建物の名称が表示される。もう一度触れると、真下から少し北へズレた位置に、小さく赤いエリアを確認できた。

目標ポイントの、病院の屋上である。

ハンドシグナル
手信号で隊員達に何やら伝えたケンは、空中でくると仰向けになった。さらに両腰に隠れていたレバーを引き出して、先端のボタンを押す。すると、本来パラシュートが収まっているはずのバッグから、地上方向へ大量の空気が吹き出された。

『あとはマップで位置確認しつつ、フロート・バック浮遊機械で屋上に降りる』

フロート・バック
浮遊機械とは、彼らが独自に開発した、個人浮遊を可能にする機

器のことだ。

小型の特製エンジンが内蔵された箱ボックスから、圧縮した空気を噴出させることで、空中での上下及び前進運動を実現させた代物である。

左右の動きは腰を捻るなどしなくてはならないが、上手く使えば奇トリッキー抜な動きをいくつも可能にする。

それを使いこなす彼らは、反動でひっくり返りそうな胃を抱えながら、屋上へと着地した。

『病院の屋上に降りたら三手に分かれる。俺とウヌバは、窓側を伝って対象がいる個室付近で待機。エリは屋上から院内の間を監視。ケンはペントハウスから侵入し、組織が先に送り込んでいる諜報員と合流しろ』

ケンを筆頭に、それぞれ打ち合わせ通りに行動する。ケンは諜報員に開けられたと思われるペントハウスの扉から院内へ忍び込み、急いで合流地点へ向かった。

『諜報員？』

『フリッツ君だ』

『ちっ、またアイツかよ』

『フリッツ君、私達の行くところ行くところ絶対いるよね』

エリは楽しそうに笑っていた。

『彼はよくやっている。ハードスケジュールにも拘らず、任務は確実にこなしてくれる』

酒顔もそんな風にフリッツを褒めていたが、ケンは面倒臭そうに口を歪めていた。

「制限時間は最大十分だ。通常よりもイレギュラーが多いことが予測される。慎重に、かつ確実に遂行するぞ。キーマンはお前だ、雪町^{まち}ケン副隊長。頼んだぞ」
『

イレギュラー 一般人との遭遇や、戦時介入。

街中での任務は久々だ。気を抜いた途端に後ろからズドンということは、この国ではないだろうが、隠密に動くに越したことはない。自分達を敵と認識し得るのは、何も一般人だけではないのだから。

「つつても、アイツは…」

回想から頭を起こしたケンの目に、院内の常夜灯に照らされた人影が映った。

その人影は、こちらに気付いた途端に、「おーいつ、ケーンちゃん！」

子供でも知っている院内の禁則事項を、深夜二時過ぎに破り捨てるこの男こそ、組織所属の諜報員 フリッツである。彼は無邪気に両手を振ってケンを呼んでいた。

「ケーンーちゃん、こっちこつぽっ!？」

ケンは飛び蹴りを決めて、彼の暴走を阻止した。

（大声出してんじゃねえよっ、イタリア人!!）

必死に声を殺して怒鳴りつけるも、フリッツは気にも留めず、「いきなり蹴り技とはゴアイサツだなあ、ケンちゃん。ついでに修正しておく、僕は生粋のドイツ人だよ」

真面目で厳格な、ドイツ人の鑑だよ。

フリッツは相変わらずニコニコした顔でそう言った。

色白で、見るからにひ弱な男だ。こんな奴が世界各地を飛び回って、実行部隊であるケン達のバックアップを成し得ているのだから、人間見た目だけで判断できるものではない。

（嘘言うな、テメー絶対イタリア人だろっ）

「…失礼だな、彼らと一緒にしないでくれよ。僕は彼らが嫌いなんだ…」

急に鋭利な顔つきになった彼に虚を突かれ、「そ、そうなのか…」とケンは少し辟易した。

「ふう。ところでエリーは？ あの天保山のように慎ましい胸^{バスト}を拝みたかったんだけど」

「そういうところがイタリア人っぽいっつうんだよ！」

「まあーまあー、怒鳴らない怒鳴らない。病院では静かにね」

（テメーが言うかつ、テメーがよーっ！？）

気圧された自分が情けない。

今が任務中でなければ八つ裂きにしてやるところだったが、彼はどいうわけか任務中にしか現れないので、ケンのストレスは溜まる一方だった。

「ハハハ、それより時間は大丈夫かい？」

しまった。

ケンはすぐに経過時間を見ようとゴーグルを操作した。が、『ちよつとケン、早く進みなさいよ！ 作戦時間、分かってんの！？』

エリからの通信の方が早かった。

フリッツのせいで、予定を大幅に狂わされている。

エリの役目は、屋上からケンをサポートすることだ。

ケンの能力を考えれば、この程度の任務を一人でこなすことなど造作もないのだが、リスクを無に等しく軽減する為には必要な措置だった。

彼女は屋上で目を閉じて、あるものを見ている。

彼女は目蓋の裏、もとい研ぎ澄まされた意識の中で、事細かな生体反応を把握している。建物の内部で蠢く動物や、稼動する機械から発される熱　赤外線を精確に知覚キヤッチしているのだ。それは彼女の能力　《サーマル・センサー》によるものである。

彼女は熱量測定器などの機械に頼らず、体一つでそれを可能にしている。

そして他の三人も同様に、それぞれ別の、一般人には成し得ない能力を持っている。

野生動物以上に発達した聴覚と嗅覚を持つケンは、ゴーグルに付属するヘッドフォンの音量を最小にしてから、「案内しろ」とフリッツを歩かせた。

最終目的地は、この下の階にある個室だ。二人は足音一つ鳴らさないように歩いていた。その途中、フリッツは数枚の資料をケンに手渡した。

「対象のカルテのコピーだ。帰ったら清芽先生きよめにでも見せてあげてよ」

急に後ろにあった気配がピタリと止んだので振り返ると、「…おい、フリッツ。こいつはどういう見だ？」と言って佇む、酷い剣幕のケンがいた。

フリッツにとっては予想通りの反応だった。先に用意しておいたセリフを言おうとした時、エリから通信が入った。

『階段から誰か上がってくる!』

二人はすぐに近くのトイレへ隠れた。

ケンは嫌な臭いに高い鼻を曲げながらも、接近するのが当院の若いナースだと判別した。微かに香水の香りがして、聞こえる足取りが軽かった。

「早速僕の出番のようだね。任務の方は任せたよ」

そう言っ、フリッツは堂々とした面持ちでトイレから出て行った。

ナースはフリッツを見つけると、声を潜ませて彼を窘めた。

（あつ、フリッツさん！ 夜間の散歩はくれぐれも控えてくださいって言ってるでしょっ）

（OH）、スミマセーン。ですがラッキーでース。お蔭でこんなにキュートな妖精ちゃんに出逢いマーシタ。D a n k e j e s u s^ス フェアリー ありがとう ジーザ

（まあ、ホントに口の軽いドイツ人ねっ）

（男が女スキ。ソレ、万国共通、人類の必然でース！）

フリッツの軽口に、ナースはウフフと頬を染めて笑っている。

患者衣を着ていれば溶け込めるのだろうか。というかそもそも、フリッツは何の病気で入院していることになっているのだろうか。てかやっぱり奴は、イタリア人っぽいのだが…。

フリッツがナースを別の場所へ誘導するのを見計らって、ケンは無数の疑問を浮かべつつトイレを後にした。

『フリッツ君、相変わらずね。それより、さっき何か言おうとしてたけど…』

エリの通信で思い出した。力が入って、眉間にも手に持ったカル

テにもシワが寄る。

「リーダー、聞こえてるな？」

湧き上がる感情を打ち殺したような声色に、『…何だ』と酒顛は神妙に応答した。

「今回の目標が十代のガキだつてのは聞いてる。ヘレティックの可能性があるので保護するつても、組織としての筋が通っていると思えば納得する余地がある。だけど…」

ケンはズカズカと廊下を歩いて、一つの扉の前に立った。静かに開けて、唇を震わせた。

「だけどなあつ、記憶喪失のガキをパクれとは一言も聞いてねえぞ…っ！」

『記憶…喪失……！？』

メンバーの顔色が変わった。

彼らにとつて、ヘレティックという言葉は特別で、それに属する者達は残らず保護の対象となる。

標的が病院の個室に入院していると聞き、彼らは間違いなく重症患者だと予感していた。

敵に襲われた可能性も考えていた。

子供だというのを知って、保護するのに気が引けてもいた。

しかし、存在意義を失っている者を相手にしろとは寝耳に水だった。

「おい、こんなガキ連れ帰ってどうする気だ！？ 記憶が無いのを良いことに、マインドコントロールでもやろうつてのか！！」

ケンは病室の窓に向かって怒鳴り散らした。

閉じられた窓の外には、酒顛とウヌバの姿がある。彼らは安全帯ハーネスから伸びるロープで、屋上からぶら下がっている。

窓越しの酒顛の口が動き、『任務は絶対だ』とヘッドフォンから響いた。

『我々が背負っているのは、特定された一国家の命運ではない。世界の、全ての未来だ』

それは痛いほど知っている。産まれた時からずっと、身に沁みて味わってきた。

自分に流れる血は、その全てを教えてくれていた。

『我々は、それを背負えるだけの力を持っている。その力を正しく行使して、世界の確実で豊かなる進歩の礎となる。小さな任務でもその為の歯車の一つだ。どんなに過酷でも、ミスをするわけにはいかない…』

「この呑気に眠ってるガキを持ち帰ることが、世界の為になるのか…！？」

室内に一つだけあるベッドに、十七歳の少年が眠っている。

彼に複雑な顔を向けるケンの様子は、部屋の隅に設置された監視カメラにも見られている。

しかしそれは、フリッツによって事前に画像処理されているので、実際の映像として録画されることはない。

『少なくとも、彼の為にはなる。彼がもし本当に、我々と同じヘレティックであるならば、敵対する何者かに狙われることになる。万一、その力が悪用された時、彼を殺すのは我々だ。俺は、そちらの

方が耐えられん…』

大いに有り得るケースだ。

彼らの世界では、ヘレティックの奪い合いは日常茶飯事だ。殺し合いもあれば、家畜のように高値で売買されることだってある。

そうなる前に保護するのが、彼らの仕事の一つだ。

ケン は納得したのか、はたまた己を殺したのか、しびしぶ窓を開けて、酒顛とウヌバを部屋に入れた。

巨体を揺り動かす彼らの背中を月明かりが照らし、薄暗い病室で眠る少年の上に大きな影を落とした。

「ケン、お前は間違っていない。だが俺達のいる世界では正しい判断ではない。これは、力を持った者の宿命だ」

ギツと齒軋りを立てるケンをよそに、酒顛は廊下に目をやった。

「フリッツ君。良ければキミも、彼の為に祈りを捧げてくれ」

バレたかといった具合に、フリッツが現れた。

先程のナースを、ナースステーションで眠らせてきたらしい。仕事に差し支えない程度に、短時間だけ眠らせる麻酔薬を使ったのだ。

「そついうの苦手だけど、酒顛さんに言われたら断れないねえ」

酒顛達は少年に向かい、またエリは屋上から深く祈った。

「彼の未来に、不滅の光があらんことを…」

*

*

*

酒顛達は少年を麻酔で、さらに深い眠りへと誘なった。

酒顛は彼を軽々と担ぐと、窓から屋上へ引き返した。心地良さそうに眠る彼の寝息が、彼らの良心を酷く揺さぶった。

一同が部屋から出て行くと、フリッツはその窓を閉めてから病室を後にした。

低空飛行の輸送機が無音で近付き、屋上のヘリポートの真上で空中待機する。ハッチから縄梯子が垂らされてきて、酒顛達はそれによじ登っていった。

侵入時にスカイダイビングしたのは、輸送機が特定のポイントで二度も止まらないようにする為だった。

彼らが少年を連れて峙へ帰っていった後、フリッツは院外の公衆電話から連絡した。

「予定通り、任務成功しました。ええ…ええ……え、今からですか？ いえ、問題ありません。セーフハウス放棄後、すぐに向かいます」

また仕事だ。

また、嫌な仕事が入った。

今度も、胸糞が悪くなる仕事だ。

「……クソつたれ共がつ!!」

フリッツは柔和だった顔を豹変させて、受話器を投げつけた。弓形の月が浮かぶ、春の暮れのことだった。

「プロローグ」（後書き）

どうもT・Fです。

後書きはフランクにいきましょうか。

今回はとりあえず「プロローグ」を投稿しました。

今後、「一」～「五」～「エピローグ」という流れで【第一章】を連載していきます。

正直なところ、書き貯めができていないので、投稿スピードは遅いかと思います。

かてて加えて遅筆というスペシャルな特性。

参ったね、こりゃw

書き貯めができていない理由としては、小説賞への投稿に力を入れすぎたせいですね。

だから次々新しい物を書いて、書き貯めができなかったというわけです。

言い訳ですね。

まあ、それはさて置き、前書きでも述べましたが、せっかくなので可愛がつてください。

何分お堅い作風ですが、形にはなっているかと思います。

細かいところは皆さんにお任せします。

もう自分では分かりませんw

おっと、肝心の「プロローグ」に触れてなかった！

すみません。

作品名の「ネームレスって何？」とか、「で、主人公どいつよ？」と思われることでしょう。

それは次回投稿します「一」にて明らかになります。

本当にすみません。

「プロローグ」では、謎の特殊部隊が、記憶喪失の少年を拉致する

という、いかにもありがちな流れになっています。

その目的は？ 少年は何者？ 流れに乗れねえ！

みたいな感じですが、そこはやっぱり「プロローグ」のご愛嬌ってことで。

あまり長くなってもしょうがないですね。

お疲れ様です、ここまでご覧頂きましてありがとうございます。
それでは次回の投稿まで、さようなら。

P・S・最近寒いので、お身体にはお気をつけください。

「二」(前書き)

一話目です。

長い作品です。

気長に付き合ってください。

首を長くしてお待ち頂けるような作品を目指してゆきます。

どうぞ、よろしく。

〔一〕

暗闇が広がっている。

茫漠とした黒が、視界を埋め尽くしている。

少年はそれを呆然と眺めていたが、そうしていることが急に恐くなつて、人を呼んだ。

誰かいらないのか、どこなんだここは。

しかし返事はない。

木霊するばかりの自分の声に絶望し、自分はどこにいらっしゃるかと頭を抱えた。

そうじゃない。

少年は顔を擡げて思い至った。

分からないのはこの場所のことでも、置かれた状況のことでもない。本当に分からずにいて、本当に知らなくて、本当に知りたがるべきは 自分自身のことだ。

少年は混乱した。錯乱と言ってもいい。

自分は誰だ、何者だと叫び、喚き、喘いだ。

答えてくれる人がどこにもいなくて、少年はその場で頼れるほかなかった。

怖い。誰か助けて。

ボクを、教えて…。

信じた憶えのない未知の存在に乞うた時、目の前に小さな光が射し込んだ。

その中に見覚えのある誰かの後ろ姿を見て、少年はその人の名を呼んだ。

そうした途端、忘れていたことを全て思い出した。

自分が何者で、どうして忘れてしまっていて、何が突然襲いかかってきたのかも 今まで記憶してきた全ての情報を思い出した。

少年は駆け出して、叫んだ。光の中にいる、彼女の名を叫び続け

た。

彼女は艶やかな髪を靡かせて、こちらへ振り向いた。逆光で顔が見えない。

その顔を見せてほしい。いつも不安だった自分に、癒やしと安らぎを与えてくれたキミの笑顔を、もう一度見せてほしい。

縮まらない距離にもどかしさを覚えながら、少年は懸命に手を伸ばして 叫んだ。

「 つ! 」

* * *

白い世界を掴むように、汗ばんだ手があった。天井に伸ばされた、少年の細い手だ。

不純物の一切を取り除いたかのような白い天井から、電灯が強い光を放っている。

悪夢から覚めた少年は、伸ばしていた手をゆっくりと目の前に置いて遮光した。

ここはどこ…、いや、だから、そうじゃなくて

「目が覚めたようだね」

「……う…?」

仰向けのまま首を左へ捻ると、白衣を着た眼鏡の男が椅子に腰掛けていた。

若くて、優しそうな人だ。

「ずいぶんと魔されていたけれど…大丈夫かい?」

「…誰、ですか?」

寝起きの少年は頭が回らなくて、質問に質問で応えてしまった。
しかし男は不満な顔一つせず、少し笑って、「僕はこの施設の医療主任だよ。そしてここは僕の部屋……」と背凭れに身体を預けて室内を見渡した。

少年はそれに釣られて首を回らせた。そうして初めて、ベッドで寝ていたことに気付いた。

「と言っても、見てのとおり医務室なんだけどね。ここが一番落ち着くんのだ」

「……医務室。病院じゃないんですか？」

意識はハッキリしている。冷静に話を聞けるし、言葉のニュアンスの違いも判別できる。

医師は少年が意外と落ち着いていることに驚くと、「カルテは読んだよ。少し、診察しようか」おもむろに聴診器を耳に掛けた。

視診。聴診。触診。そして打診まで、体一つでできる身体所見を全て終えると、医師はもう一度カルテに目を通した。本来あるべき場所から無断でコピーされた、彼のカルテを。

「うん、問題無いね。えーと、名前は……」

「早河……さがわ まこと誠、という名前らしいです」

らしい、か。

医師は沈痛な想いを隠し、「憶えていないのかい？」

「……色んな人に訊かれましたけど、何も、思い出せません」

名前も憶えているが、これは憶えているとは言えない。知らされて、知っているだけだ。

医師は少し眉をひそめると、「そう……」とカルテを裏向きにして

机の上に置いた。

「間違えていますか…？」

「いいや。キミは正真正銘、早河誠君本人だよ」

「よかった…」

心底から安堵した顔は目も当てられない。見た目のひ弱さ以上に、臆病なメンタルの持ち主である医師は、耐え切れずにカルテをファイルに挟んで、棚に直した。

「先生は、知らない先生ですね」

意表を突かれた医師は、机に向かったまま固まってしまった。

落ち着け。嘘は慣れていないがシラを切り通すんだ。ほんの少しだけ効力がある嘘をつけば、それで済むんだ。

「キミは…その、病院を移ったんだよ。もっと高度なりハビリができる、ここにね」

「寝ている間にですか」

「そうだね。事前に通知できていればよかったんだけど…。驚かせて悪いね」

「いえ、そんなことは…」

誠は少し顔を俯けて、「…先生。これからボクは、どうすればいいんでしょうか」と幼い子供が自信無くこぼすように言った。

「それは 記憶を取り戻すには、ということかな？」

「よく…分かりません。きっとそうした方がいいんでしょうけど、意欲が湧かないんです」

失った記憶の価値さえも解らないのだから、それも仕方ないか。
ならばと、医師は思った。

人の記憶には、一体どれだけの値打ちがあるのだろうか。彼が失った記憶は、どこに落ちて、誰に拾われているのだろうか。

空想が空想を呼んで、医師は場違いに自嘲した。

医師という名の、一端の科学者のくせに何を言っているんだ。記憶は、彼の中にしかない。早河誠は、その仕舞い場所を忘れていくだけに違いないのだ。

しかしと反論するもう一人の自分がいる。直感が、どうしてもそれを譲らない。

そうして一人難しい顔を浮かべて思案する医師を見て、誠が首をかしげている。

結局、医師は益体もない疑念について深く考えるのをやめた。

誠は少し情緒不安定なきらいがある。もつと錯乱している方が普通な気さえする。他人事のように笑っている男の首を絞めてもおかしくない。

しかしそうじゃないなら、やりやすい。

「運動しようか」

「運動？」

「そう、身体を動かすんだ。幸い掠り傷程度の軽症だし、安静にしておくと気が滅入るのなら、元気が出ることをした方がいい」

医師は有無も言わず、「さあ、行こう!」と誠の手を引いて、医務室を出た。

「あ、あの…。先生、お名前は…?」

「清芽^{きよめ}ミノル。みんなは清芽先生と呼んでくれるよ」

*

*

*

別室。

いくつもあるモニターに、誠と清芽の顔がアップになって映っている。彼らの今のやりとりを、監視カメラがリアルタイムで撮影した映像だ。

それらを眺める丸坊主の巨漢　酒顛しゅてんドウジは、腕を組んでうなずいた。

「さすがは清芽先生。上手く誘導してくれたな」
「オッサン、ボスは何て言ってるやがった」

銀髪で三白眼の男　雪町ゆきまちケンが訊いた。
酒顛は肩をすくめると、聞いたままを口にした。

？御苦労、次の指示があるまで待機。次の任務も最善を尽くせ？

組織の長　ボスと呼ばれる初老の男は、広々とした室内の一番奥にある執務机に座って、そう言った。ロマンスグレーのオールバックヘアに、背後の壁一面に据えられた強化ガラスから射し込む光が反射して、いっそう厳めしく見えた。

「もはや名言化してますね。いつもそればっか」

細身でポニーテールの女　エリ・シーグル・アタミが苦笑する。
ボスは、感情を表に出さない男だ。彼女に至ってはここ数年、先のセリフ以外聞いた覚えが無いし、ニコリともしないあの鉄仮面にはゾツとするのだった。

それでも、彼の掲げる思想や理念にだけは共感できた。

この組織がいつから続くものかは定かではないが、世界の為に見返りを求めずに、粉骨碎身の覚悟で戦うという度を越した献身さに

は、感動さえ覚えたのだ。

エリは、こんな自分にもできることがあるのだと、組織の存在に感謝していた。

「しかし、今回はコレを渡された」

酒顛は一枚の有機Eレデータファイルを見せた。そのA4紙のようにペラペラとした半透明のフィルムは、触れるだけでパソコンのディスプレイのように多くの情報を映し出す。この一枚に、週刊誌一冊分の情報を記録できるというから驚きだ。

エリはそれをタッチパネルの要領で触って、画面をスクロールし、
「何ですか、コレ？」

「早河誠の、大まかな来歴だ。例のバーグという人物が得た情報らしい」

「…あの人、一体何者ですか？ 大体ボスだって、変声器越しの声としか喋ってないんですよ。性別さえ分からない相手の情報をまともに信用し続けて、大丈夫なんですか？」

「俺に言われても困る。そもそも、ボスも疑っている。ああ見えてあの部屋の中では、凄まじい心理戦が繰り広げられているという話だ」

「マユツバって感じいゝ」

バーグという人物は、近年突如として現れたやり手の情報屋だ。

どこで嗅ぎつけてきたのか、いきなり組織の回線に割り込んで情報提供してきたのだ。見返りはいららないと言うところがまた、彼らの不信感を煽っていた。

それが何度か続き、その情報のどれもが組織が知り得ないものばかりであった為に、組織の誰もが彼を危険視しているのだった。

「バーグのことはいい。それよりもエリ、今回の提案はボスも認めてくださっているが、その上でこのデータを渡された。信じざる必要は無いが、頭には入れておけ。彼という一人の人間を見極めて、正しいものだけを取捨選択するんだ」

「するんだーって言われても、すぐにはできませんよ、そんなの」

「時間は気にするな。彼の記憶が戻るまで続けなければならんだからな。それにこれは俺達全員で行なう。彼に直接関わることになるであろう我々と、清芽先生達でな」

「それ考えたら今回の作戦、かなり信用性欠いちゃう気がするんですけど…」

「今更何言ってやがんだ。ここに連れてきた時点で、信用なんて欠片もねえだろうがよ」

舌打ちの後に、ケンはそう言った。鋭い目が、酒顛に向けられる。

「ケン。言っておくが、俺だって今回の任務の真意は一切聞かされていなかった」

「俺はな、こんな任務まで引き受けちまうことはねえって言ってるんだ」

あの小さかったケンが、道徳的な話をするまでに成長したのは、酒顛にとっても大変喜ばしいことだった。

しかしこの頑なな正義感は、これからさらに彼を追い詰めてしまう予感がした。

だから思わず、「追い過ぎるな、あの人の影を。誰もあの人のようになれはしないんだ」

かつて英雄と呼ばれた男の姿を、思い浮かべてしまった。

「バカヤロウ、そっいうんじゃねえよ」

エリは、そう言つて部屋を出ようとする彼の腕を掴んで、「待つて、ケン！」

「んだよ…っ」

「作戦はもう、次のステップに移行してる」

「…分かつてる。テーマのくだらない段取りに付き合えばいいんだろ」

「っ、付き合う…の…？ 私達…」

古い少女マンガのヒロインのような顔をして固まった。目が必要以上に黒光りしている。

「気色悪い勘違いしてんじゃねえよ！ 述語だけ拾うなタコ！」

長い通路をそそくさと歩いていく彼の背中に、「気色悪いって何よ、犯罪者面！」

むくれた顔で部屋に戻る彼女に、酒顛は再度確認した。

「エリ、任せていいんだな？」

フグのようだった頬を萎ませて、エリはウィンクを返した。

「もっちろん、二人は適当に見ててください」

無口なウヌバは、アフリカ民族展の蠟人形のように、室内の隅で静かに佇んでいた。

*

*

*

広い室内で、ウィーンとベルトコンベアが無機質な音を鳴らし続

ける。その音に乗って、苦しそうな息遣いが聞こえる。

「きつ、きよつ、め、せんせ……いつ！」

『何だい、マコト君？』

「あのつ、ボク、病み上がった、病みつばなしなんですけどっ！」

『そうだね。と言ってもキミは、記憶を少しばかり失っているだけで、理想的な健康体だ』

「それが何だっけって言うんですか！」

誠は声を荒げた。

彼は、長い長いランニングマシンの上を延々と走らされながら、天井にあるスピーカーに向かって、清芽に抗議しているのだった。

その様子を、清芽は楽しそうに眺めている。彼はすぐ隣の部屋から、窓越しに話しかけている。誠からはただの白い壁に見えるが、清芽のいる部屋 ラボラトリー 研究室からは、マジックミラーで筒抜けになっているのだ。

ラボ側では十数名の研究員が、パソコン PCのモニターと誠の様子を忙しなく交互に見比べている。端的に言えば、彼らは誠の身体機能を徹底的に分析している最中なのである。

「メギイド博士、いかがですか？」

清芽はすぐ隣で作業する、一際年配の研究者に問うた。

すると、西洋の古典文学に出てきそうな古めかしい顔立ちの白頭翁 ノーマル メギイドは、モニターと向き合いながら、「一般人だ。いたって普通。普通過ぎるくらいに普通。覚醒の予兆も無い」そうして伸びをすると、酒顛達の骨折り損だったなという顔を、清芽に向けた。

「経歴はそうでもないんですけどね」

清芽は、ついさつき酒顛から渡された有機EL資料を、メギイドにも見せた。早河誠の素性が、簡潔に記されている。中でも彼自身ではなく、彼の家系は奇妙だった。

そこでメギイドは目を細くして、「サガワという姓は、日本では珍しいのか？」

「この字の並びでサガワと読ませるのは少ないでしょうね。ハヤカワと読ませるのが普通です。まあ 私が言うのも何ですけど」

「ふむ。それにしても、短命な血筋だな。テロメアが短いというわけでもあるまい」

「ええ……。ほとんどが若くして大病か、不慮の事故です。事実どうであるかは不明ですが、彼には親族がいないという事実だけは、こちらの捜査で証明されています」

「まさに、天涯孤独か。よくある話ではないか」

「そうでしょうけど」

「貧困や戦争から孤児が生まれることは、普遍的な社会問題の一つとして世間では認知されているではないか。今では少年兵がピックアップされるケースが多々あるが、それは我々が生まれる遙か昔から起きていた、ごくごく普通の出来事だ。それに比べれば、我々の誕生こそが、彼らにとっては由々しき事態であるはずだぞ」

「ですが、孤児というものは」

フンと清芽の言葉の先を折り、老人は窘めるように言った。

「優しいな、お前は。しかしキヨメよ。親がいる人間が、いない人間に対して行なう同情は、虐待よりも酷い体罰だということを忘れてはならんぞ」

「……………」

「一つの種から離れた我々は、持つ者と持たざる者の価値観の相違

点を知らなくてはならない。シュテンがよく言うだろう、？力を正しく行使しろ？と」

「しかし身寄りも無く、過去の記憶も無いというのは、あまりに残酷です…」

「無力であつたならな。しかし、我々と同じならば、その不幸さえも超えられる」

「博士は、我々の可能性を信じていらつしやるのですね」

「人の遺伝子が、我々にこう在れと願い、形にしたのだ。進化とはそういうものである。人間が猿から、いや、深く遡れば海に芽生えた共通祖先が、本能から形を変えようと願ったのだ。そうでも思わなければ、我々が生まれた意味が無い。存在意義も、何もかもナセンスになる。存在を否定されることこそが、この世の最大の不幸だ」

「この世の 不幸…」

息を切らしながらコンベアの上を走り続ける少年が、よりいっそう不憫に見えた。

「組織が…」

「うん？」

「組織がこうして、いとも容易く彼を拉致できたのは、彼に身寄りが無かったからでしょう。ですが、分かりません。どうして、覚醒前に発見できたのか…」

メギドは睨みを利かせ、「つまらん穿鑿はよせ、キヨメ。為にならんぞ」

清芽は黙って、誠を見た。

もしも宿命を知らせる術があるなら、あの少年だけでなく、どれだけの人を救うことができるだろうか。それができない自分が情けない。

清芽は堪らず、誠に話しかけた。

『マコト君。もう少し、頑張れるかい？』

非情なことを呑気に告げる清芽に、「ええっ、いつまで…！？」と誠は半泣きで叫んだ。

その瞬間、巨大な爆発音と震動が彼らを襲った。施設一帯に、白煙が広がっていく。

「な、何が…？」

ベルトコンベアが急停止して、誠はその場で蹴躓いた。緊急事態を示す赤いランプが明滅し、ブザーがけたたましく鳴り響く。そこへ通用口を使って清芽が駆け寄ってきた。

「マコト君っ、逃げるんだ！」

「せっ、先生！？ 何がつ、えっ！？」

清芽は切迫した様子で、混乱する少年の両肩を掴み、「落ち着いて聞いてくれ！ テロリストがここを襲ってきたんだ！」

「テロリスト！？」と誠は目を白黒させた。

何を言っているんだ。それはテレビの中だけの話じゃないのか。

しかしこの白い煙は、そのテレビでも見たことがある。慌しい様子も。

自分のことは思い出せないのに、何故かこういつつまらない知識だけは、しっかりと憶えていた。

「そ、そうなんだ！ 狙いは分からないが、一般人のキミを死なせるわけにはいかない！」

「で、でも」

パンツ!! タタタンツ!!

弾ける音が連続し、それが銃声だと理解したのも束の間、「うつ
!」目の前の清芽が、呻きながら誠に覆いかぶさってきた。

「先生!？」

「ぐううつ」

口から血を吐いている。白衣が胸元から血に染まっている。

誠は目を剥いて震えた。

清芽先生が、銃で撃たれた。

「行け…、逃げるんだ…!」

清芽は苦しみながら立ち上がると、誠をラボの外へと追い出した。

「行けえっ!!」

誠はどうすることもできず、ただただ煙に包まれた通路を走って
いった。

しかし、清芽を置き去りにしてしまった罪悪感が脳裏を掠めた。
踵を返そうとしたが、そこへまた銃声が轟いた。

「までWait!

までWait!!」

煙の向こう ラボの方をよく見ると、真後ろからガスマスクを
被った戦闘服姿の連中が駆けてきていた。

英語だ、外国人のテロリストだ…!

降伏して助かる見込みが想像できず、誠はとにかく逃げた。

逃げる方向にも煙が充満していた。行き先が見えなくて闇雲に走った。左肩が壁にぶつかって、そのままそれを伝った。まだ遠くで叫び声と銃声が連続している。時折、床が揺れて、天井も軋んでホコリが落ちてくる。

誠の神経は衰弱しきっていた。今回のことだけでなく、最初の病院で目覚めてからずっとだ。医者を名乗る中年の男や、少し疲れた顔のナース、警察を名乗る人まで現れて、色々と矢継ぎ早に、のべつ幕なしに質問された。

分かりません。何も分からないんです。ごめんなさい…。

たった三日で、それが口癖になってしまった。

本当に分からないからしょうがないと思う反面、何故分からないんだと苛立ちを隠せなかった。自分は知らないのに、他人は自分のことを知っているという奇妙さが怖くて、病院からあてがわれた個室から自ら出る気にはならなかった。面会謝絶にしろって、知り合いを名乗る男女が部屋の外で諦めて帰るのを何度も聞いた。

そんな中、一人だけしつこい人がいた。一時間に一回のペースで、自分を尋ねてきた。

声で、女の子だと解った。どういうわけか、聞き覚えのある声だった。

誠は悩んだ末、明日その子に会ってみようと思って眠りについた。そうしたら、ここにいた。

そうしたら、こうして逃げている。

どうしたら、こんなことになってしまったんだ。

彼女に会おうとしたのが良くなかったのか。いや、そんなことは関係無いはずだ。

どうなろうと、変わるわけがない。

今更、変わるわけがない。

「誰か 助けてよ…っ！」

無性に、彼女に会いたくなつた。

自分を知るといふ、声しか知らない彼女に会いたくなつた。

この混乱した状況から救い出してくれそうな、声しか知らない彼女の手を求めた。

「キミっ、コツチよ！」

煙の中から手が伸びてきて、誠を右へと引つ張つた。壁にぶつかつて顔を上げると、ポニーテールにインテリ眼鏡を掛けた綺麗な女性、彼の手首を掴んでいた。

「ア、アナタは!？」

「私はここの研究員です。とにかくここから離れましょう」

清芽とは別仕様の白衣を着た女性だ。彼女は、?と表記されたボタンを押してニコリと笑つた。

誠が無理矢理に引き込まれた場所は、エレベーターだった。扉が閉まり、エレベーターは最下階を目指した。

「な、何でテロリストが来るんですか!？」

「分からないわ」

「ここ、どこなんですか!？ ボク、病院にいたはずなんですよ!でも、清芽先生は医務室だつて言つて…、その清芽先生も、目の前で……!」

「人が死ぬところを見るの、初めて？」

「そりやそうですよ! …いや、分かりません。思い出せません!…!」

誠は悔しそうに歯を噛み、頭を抱えて座り込んでしまった。
何も思い出せないことと、清芽がテロリストに殺されたことが

ゴチャ混ぜになっているのだ。

女は彼を気遣い、「安心して。このまま下まで降りたら、ちゃんと逃げられるから」

「ホントですか…？」

「ええ、必ず」

誠は、思わず見惚れてしまうほどの微笑を信じることにした。

幸い、エレベーターは途中で止められることなく一階まで辿り着いた。扉が開く時はさすがに緊張したが、薄暗い空間に人の気配は無かった。

それでも誠は、女の背中にピタリとくっつき、そろそろコンテナの影に身を隠した。

「ここって…」

「ポートエリアよ。と言っても、水上艦じゃなくて、潜水艦の港」

誠は耳を疑った。潜水艦だって…？

「テロリストはきっと最上階から来たから、潜水艦で逃げれば助かるわ」

女から距離を置いた誠は、訝る目を向けた。

「…どうしたの？」

「せ、潜水艦なんて、どうして持ってるんですか…？」

「さあ、どうしてだろうね」

「答えてくださいよ！ どうして潜水艦なんて持って　っ！？」

ダンッ！

再び大きな音が耳を打った。頬に、何か跳ねた。途端に、目の前の情景がガラリと色を変える。ドロリとした原色に近い赤色が、広がっていく…。

「マコト・サガワだな？」

女の真後ろに立つ男は、彼女の肩越しにそう言って、鋭い眼光を突きつけてきた。

「え…あ……」

女はゆっくりと膝をつき、地べたに寝そべって起きなくなった。頬に跳ねた何かも、一緒に地面に流れて落ちた。赤い…コレも

「血……？」

何だ、次から次へと…。何なんだ。死んだのか、死んでしまったのか、この人は…！？

動転する誠に、三白眼の銀髪男は言った。北欧系の顔から発された言葉は日本語だった。

「テメーを見極める。死にたくなかったら、知恵を絞ってみろ」

言つや、銀髪男は彼の足元を撃った。

「ひうつ！」

「足をすくませてる場合じゃねえぞ」

誠はまた逃げ出した。

どうしてこんなことになってる。

夢か。夢じゃないのか。夢なら早く醒めろ。

ボクは何も悪いことなんてしてないんだから…！

無数に立ち並ぶコンテナの一つを選んで隠れて、そんなことを心の奥で訴えた。

だが、どうにも自信が無かった。
記憶が無いからだ。

「ボ、ボクは何者なんだ…。もしかして、犯罪者なんじゃないのか……？」

そう思うと急に頭痛がして、頭を押さえた。電流か、虫のような何かが、好き勝手に脳内でのた打ち回っているような激痛が走る。

夜道。

三叉。

女。

口。

巨大物質。

クラッシュ。

誰……手？

断片的な映像がスライドショーのように浮かんでは消える。

何だこの光景は。ボクの、「何だ……？」

ふと前を向くと、緑色のコンテナの脇に一本の鉄パイプが立てかけられていた。誠はそれを拾うと、ブンと一振りした。手頃なサイズで、重さも丁度いい。

誠の精神状態はすっかり疲弊し、病んでいる。そんな彼は、思い至る。

どこをどう行っても逃げられないなら、あの男を倒すしかない。

「……ふう……」

誠は深呼吸の後、コンテナの側面に張り付いた梯子を登って身を屈めた。

ズカズカと道を行くあの男を発見し、先に拾っていた鉄片を彼の視界に投げた。

物音に男は銃を構えると、一転してそろりそろりと足を忍ばせて音源へと近付いていく。

誠はまんまと引つかかってくれる男の死角を奪い、タイミングを見計らって飛びかかった。銀髪を縦に割る勢いで鉄パイプを振るった。

やらなければという正義感で、恐怖はどこかへ消し飛んでいた。

「^{バンビー}一般人ならこんなもんか」

男は失笑すると、誠の奇襲をさらりと躲した。あえなく鉄パイプがコンクリートの地面にぶつかって甲高い音を鳴らす。

誠がマズいと思ったのも束の間、男は鉄パイプを踏みつけると、彼を軽く突き飛ばした。

手から離れたパイプが遠くへ転がる。

「あうっ！」

「死にたくなかったら知恵を絞れつつたろ。次ミスったら容赦しねえぞ」

「何なんですか…！」

理不尽にも程がある。

誠は男に殴りかかった。

「何なんですかアナタは！ 何が目的なんですかつ…！」

しかし軽く受け止められ、またもや突き返された。

「極限だな」

「ひ、他人事みたいになっ」

「そりやそうだろ。テメーの人生だからな、俺が介入することじゃない。だが俺にも俺の人生とポリシーがある。それを邪魔するなら、排除するだけだ」

「排除って、横暴じゃないですか！」

「世界は理不尽だ。テメーが突然記憶を失ったように、状況は唐突に変わって、俺達を強引に呑み込んでいく」

「アナタにボクの何が解るんですか！」

「解りやあしねえよ。だが現状で一つ解んのは、その横暴や理不尽を押し退けるには、テメー自身が行動を起こさねえといけねーってことだ。違うか？」

抗うんだよ。

そう言つて男は、おもむろに戦闘服の胸ポケットから何かのスイッチを取り出した。躊躇なくそのボタンを押すと、爆音が頭上から降り注いだ。凄まじい震動が立て続き、遠くで白い靄が吹きこぼれる。

間違いない。上の階で、爆発が起きた。

「あゝあ。テメーがさっさと捕まらねえから、また大勢死んじまつたなあ」

「ボク…が？」

「そうだ。全員、テメーを守る為に抵抗していやがった。テロリストのリーダーである俺は、上で捕らえた奴らに約束していた。？もしもマコト・サガワが大人しく捕まれば、テメーらの命は助けてやる？ってな」

「そ、そんな…」

「あゝあ。テメーのせいだ」

誠は膝をついて頂垂れた。

「そんなの、ズルいじゃないですか……。さつきはわざと見逃したく
せに……」

「知恵を絞れと言っただけだぜ？ テメーが勝手に逃げて、反抗し
たんだろ」

「…どうして、ボクの為に……？」

「俺には解らねえ話だが、一般的には、大人が子供を守るのに理由
なんてねえんだろ」

解らなかった。急に解らなくなった。知っている大人の顔を、十
人も思い出せない。その中に、子供を守る大人 親と呼べる人の
顔は無かった。

「…そのまま抵抗するなよ。そのまま、死んだ連中の想いを蔑ろに
しろ」

病院にいた先生やナースは、とにかく自分を心配してくれた。だ
けど、欲しい温かさではなかった。事務的に職務をこなしているだ
けに思えた。

清芽先生や研究員の女の人は、何を考えているのか解らなかった。
この謎の施設で働いているということが不信感を煽るのだらうけれ
ど、何かを隠されているようで、どうしても信用しきれなかった。

「しかし、ただのゲームのつもりだったんだが、イマイチ面白くな
い結末だったな」

ぼんやりした頭に、不快な単語が響く。
ゲームって、どういう意味だ。

「そう言えば、あの医者はやたら五月蠅かったな。腹撃たれたくせ

にいつまでもテメーのこと気遣って。庇ったところで何にもなりやあしねえのに……。うぜえったらなかったぜ」

グウンッ！！

何かが勢いよく膨らんだような音が鳴り 弾けた。

同時に、男の腹に巨大な鉄の塊のようなものが飛び込んできた。凄まじいスピードで突進してきたその正体を確かめたのは、コンテナの壁に背中を打ちつけてからだった。

「テ、テメー……！？」

一体何が起こったのだろうか。
誠が、一瞬消えたように見えた。気付いたら、タックルされていた。

衝撃で凹んだコンテナの壁に身体を支えて立ち上がる。口から溢れそうになった胃液を意地で押し戻すと、男は少し離れて倒れる誠を睨んだ。

「何しやがった……！」

「……ボクは」

男は両腕を身体の前に置き、腰を落として身構えた。その手に銃は無く、ボクサーのように空の拳を握った。体勢を維持したまま、膝について肩で息をする誠へにじり寄る。

「来いよ。俺もこんな面倒な仕事はさっさと終わらせてーんだ」

「ボクは……」

「力、見せやがれえっ……！」

ボクは 死にたくない。

顔を上げた誠の目は血走っていた。

その様子に気圧された男　雪町ケンの、それ以降の記憶は曖昧だ。

また何かが弾けたような音の後に、誠が視界から消えた。寸秒の後、耳に何か息遣いのような声が聞こえた。振り返ると誠の姿があった。鉄パイプを振り上げて飛来する、誠の姿だ。

「コイツは……っ!!」

「ケンっ!!」

ケンの常人離れた知覚さえも凌駕するスピードだったのは、全てを目撃していた研究員の女　エリ・シーグル・アタミの目にも明らかだった。

ケンは突然真後ろから現れた少年に鉄パイプで殴られていた。

少年はあの一瞬で、遠く離れていた鉄パイプを拾って、それをしていたのだ。

反射的に防御しようとするケンの左手は間に合わなかった。後頭部に走った激痛に、目玉が飛び出そうになっていた。彼はそのまま受身も取れずに地面に額を打ちつけて、脳震盪を起こして気絶した。そこで張り詰めていた糸が切れたのか、誠も自分の驚異的な加速度を忘れて、空中で気を失った。地面を転がっていき、壁にぶち当たっても悶えることはなかった。

エリは立ち上がると、口元からダラリと垂れる血糊を拭いた。果然と湛える目は、誠から離れなかった。

「リーダー、今のは何ですか……?」

コンテナの影に身を隠す、二つの大きな人型の熱源に対して彼女は言ったつもりだ。しかし返事が無い。焦れた彼女は、彼らの下へ足早に近寄った。

「そこにいるのは分かってるですよ、リーダー…あっ!？」

エリは声を失くした。

隠れていたのは紛れもなくエリやケンが在籍する、組織の作戦部第一実行部隊を率いるチームリーダー 酒顛ドウジだが、その厳しい顔の固そうな頬を、大粒の涙が伝っているのである。

彼に付き添うウヌバも、息を吞んで困惑している。

「ど、どうしたんですか…？ 鬼の酒顛リーダーが、そんな…」

「死んでいなかった…」

「はい？」

眉をひそめるエリを無視して、酒顛は天井を仰いだ。

「？あの人？の気高い志は、死んでいなかった…!」

彼らの声に聞き耳を立てていた清芽も、背筋を粟立てていた。酒顛が言う？あの人？が誰なのか、早河誠のエキセントリックな行動を見れば一目瞭然だった。

だが、何故だ。

何故彼は、覚醒前の彼は、組織に目を付けられたのだろうか。いや違う。バークは何故知っていたのだろうか。

彼が、ヘレティックとして覚醒することを…。

答えの出ない自問に、清芽は腕を扼した。

* * *

『マコト…』

下足ホールで、少女が呼び止める。

振り向いた拍子に、履きかけていた靴の踵を潰してしまった。せっかく大事に使っていたのに、酷く気分が悪くなってしまった。

『何だよ、下の名前で呼ぶなって言ってるだろ。もう園児じゃないんだから』

『帰るの?』

聞いてないし。

少年は不満を浮かべながら、『…見れば分かるだろ』

『じゃあ私も一緒に帰ろうって』

そう言っただけ彼女は、下足箱から運動靴を取り出して、替わりに脱いだ上履きを仕舞った。

鼻歌交じりの彼女に、『一緒について何だよ』と不機嫌に問い質した。

『いいじゃん、別に。どうせスーパーに寄るんでしょ? 私もちょうど用事あるし』

『勝手に決めんなよ』

『でも、凶星でしょ?』

グツと詰まった顔をした少年は、『…お前、どっちのスーパー行くんだ。へさきスーパーか、クドームイカドーか』

へさきスーパーは、西の木之村屋と双壁を成すと言われている高級スーパーだ。対してクドームイカドーと言えば、リーズナブルな価格設定で愛されている総合スーパーである。

どちらも少年らの通うこの学校と自宅までの帰り道にあり、若くして一人暮らしをする少年は、毎日必ずどちらかを利用しているの

だった。

それをよく知っている少女は、朝刊に入っていたチラシを広げて、
『へさき〜』

『じゃあオレ、クドー行くわ。じゃあな』

そそくさと帰ろうとする少年の鞆の肩ヒモを掴んで、『ちょっと待ちなさいよ、私もクドー行く!』と駄々をこねた。

『何でだよ!』

『さんに買い物テク教えてもらったから、マコトにもって思ってたのに…』

『余計なお世話だ。オレにはオレの買い物の仕方ってのがあんだよ』

少女は悲しそうに口を閉ざした。

マズったか。泣くのか、今ので泣かせてしまったのか…?

『最近のマコト、付き合いが悪くなったって、みんな言ってるよ』

『……』

『マコトは、独りじゃないよ』

『……』

『勝手に孤立していかないでよ』

彼女はこつも言った。

『ちゃんと私達は、マコトのこと、解ってるから…』

少年が何も言えずに立ち尽くす様子を、早河誠はぼんやり眺めていた。

少女の顔の鼻から上が、何故か霞んで見えなかった。

彼女の名前が思い出せない。

おそらく、きっと大切なはずの、彼女の名前を

* * *

「オイ、この野郎。起きろ」

それは、少年 早河誠ならずとも最悪の寝覚めだったろう。ベッドで熟睡していた彼は、掛け布団を引っぺがされて胸倉を取られたのだ。

「よお、マコト・サガワ。昨日はよくもやってくれやがったな」

それも最悪の相手 テロリストのリーダーに。

「あ、アナタは!!」

目の前に見覚えのある銀髪と三白眼があつて、誠はすぐさま彼の腕を振り払ってベッドから逃げようとした。

しかし、「何処行くんだよ」と腕を後ろに捻られ、うつ伏せに倒されてしまった。

「何するんですか！ 放してくださいよ、人殺し!!」

「記憶喪失のくせに、妄想力だけは一人前かよ」

「人を殺したじゃないですか！ 清芽先生や、あの研究員の女の人をつ!!」

清芽も女性も、胸や腹を撃ち抜かれて殺された。この男が率いるという、テロリスト集団に。そして自らも、この男に酷い目に遭った。殺されそうになった。そんな男が、人殺しではなくて何だと言

うのだ。

そうして無理に腕を捻り返して、自由を得ようともかく少年を見かねて、「ケン、離してやれ」と誰かが命令した。

「肩を痛めてしまう」

「しょうがねえな」

ケンは手を離すと、医務室の扉付近まで下がった。よく見ると、彼の頭には包帯が巻かれている。昨日の彼には無かった物だ。

誰かが代わりに戦ってくれたのだろうか。

誠は未だに冴えない頭で、そんな的外れなことを考えていた。

「怪我は無さそうだな、少年」

ぬつと誠の視界を、丸坊主が埋め尽くした。「うあつ!？」と彼は思わず腰を抜かして、ベッドから転がり落ちた。

すると、「だ、大丈夫かい!？」すぐに介抱してくれた男は、誠が知る人物だった。

「清芽先生!？ 死んだんじゃないっ」

もう何が何だか分からなかった。幽霊かと思ったが、彼は日本の足でしっかりと地べたに立っている。それに、微笑にも生気が宿っていた。

「安心していいよ、マコト君。アレは狂言だったんだよ。ホラ、エリくんも生きている」

清芽の手を借りて起き上がると、確かにあの女性研究員と同じ顔がそこに並んでいた。昨日の白衣とはまるで似ても似つかない格好

迷彩服姿で、眼鏡も掛けていないが、昨日の美女と同一人物に
違いなかった。

「アロオ、マコトくん。エリだよお、よろぺこ」

手を振ってウインクするエリに、「うっぜ」とケンは何打ちした。
それに腹が立ったのか、エリはどこから取り出したブゼラ
南アフリカの伝統的な楽器　を吹き鳴らした。その独特のけた
たましい旋律が、狭い室内を駆け巡った。

「やつ、止めろ！　るっせえっ！！」

ケンは耳を押さえて、涙目になりながら怒鳴った。

丸坊主の巨漢も渋面をたたえて、「俺からもお願いだ、勘弁して
くれ」

「ぶう」

エリは巨漢に言われると、渋々ブゼラを手放した。しかしその
頃には、すでにブゼラの姿は無い。今の一瞬でどこに仕舞ったの
か謎だった。

呆然としている誠に、巨漢は分厚い掌を差し出した。

誠は律儀にも、条件反射的にその手を握り返していた。丸坊主に
電灯の光が反射して眩しい。

「初めまして、早河誠君。俺はコイツらのリーダー、酒顛ドウジと
言う」

「リーダー…？　テロリストの！？　でも、アレ…、その人もリ
ーダーって言うて……」

「だから違えんだよ。ありゃあ全部嘘だ。ったく、呑み込みの悪い

ガキだな」

ケンはガラ悪く口を挟むと、また面倒臭そうに舌打ちした。困惑して目を回す少年をよそに、酒顛は後ろで無言のままの黒人に言った。

「ウヌバ、お前も自己紹介を済ませておけ。Self-introductionだ」

酒顛を巨漢と形容するなら、ウヌバは巨人と言えるかもしれない。二メートルを軽く越える高さから注がれる鋭い視線に、誠はゴクリと生唾を飲み下した。

「……………」

「……………何、ですか？」

「……………ウヌバだ」

いや、それは分かってるんだけど。酒顛って人が言ってたし…。誠が挨拶に困っていると、酒顛がフォローしてきた。

「見てのとおり、コイツはアフリカの少数民族の出身でな、日本語が堪能ではないんだ。理解してやってくれ」

「はぁ……………」

確かに見た目はアフリカ系部族と言えるかもしれない。

酒顛のように坊主頭でありながら、何故か両のモミアゲと襟足の一部、そして短いポニーテールだけを伸ばして結っているという、一風どころか凄まじく変わったヘアスタイルをしているのだ。

今は無表情だが、怒らせると槍を持って襲ってきそうだと誠は思った。

それはさて置き、誠はとりあえず理解した体を装っておいた。今は少しでも早く事態を把握したい。説明を求めて、見るからに？年長者の顔？をしている自称リーダーに顔を向けた。

「老け顔とか思っちゃダメだよ？」

「お、思ってませんっ！」

「エリ、傷付くぞ」

酒顛は溜め息の後、本題に入った。

「さて、何から話そうか…。そうだ、キミから質問してくれ。できる限り答えよう」

「じゃ、じゃあ、アナタ達は何者なんですか？」

医者だと言ったり、研究員だと言ったり、果てはテロリストだ何だと…。彼らの正体は、結局のところ何なんだ。

「何者かと問われるのは当然だが、生憎と一言で語ることはできないのだ。少しこちらの事情に付き合ってもらっぞ」

誠はここまで来たらままよという思いで、素直にうなずいた。

良い子だと内心思いつつ、酒顛は親切にもなるべく噛み砕いて話し始めた。

「世界には表と裏がある。しかし我々の意味するところのそれを、多くの人間は知らない」

表と裏。

それは一体であるが故に、互いの視線は交わらない、対極と呼べる存在。

「我々の言う？表の世界？とは、常任理事国が実質的に世界を統治している世界のことだ。いたって普通の世界　七十億人あまりが生活している世界。キミが生活していた世界だ」

戸籍で管理された世界。

戸籍の無い人間も、しがらみによって国内で管理された世界。

国という巨大な単位で、血脈そのものを束縛された世界。

「対して、？裏の世界？とは、マフィアやテロリスト、政府や社会の暗部を意味するものではない。我々の言う裏とは、表に決して現れない、本来なら実在し得ない存在のことだ」

「実在、し得ない……？」

「我々はその、裏世界の人間だ。我々は表世界の現実を守る為に、自らの存在を表世界から抹消した。当然ことだが、生きる次元そのものは同じだ。しかし我々は、表世界の人々の目に触れないよう、努めて日々を過ごしている。我々は、彼らにとって、この世にはいないのだ」

戸籍が無いのは当然ながら、国というしがらみから解放され、裏という全く別の単位へ身を移した者達　それが彼ら、裏世界の住人達だ。

「表世界において、我々がこちらの都合で存在を知らせているのは、たったの数名。その中には政治の場において有力な権限を持つ人物が二人だけいる。アメリカ合衆国大統領と、国際連合事務総長だ」

それ以外は、我々に資金提供してくれる物好きな資産家達などだ。酒顛は肩をすくめる。狂っているだろと言いたげな顔をしている。

「彼らには我々を？ネームレス？と呼ばせた。？知られざる存在？
ではなく、？匿名を告げる者？とな」

「バランスを保つって言つて、どうして知らせたんですか？」

「そうすることで、表世界の彼らは、裏世界の存在を知る。人は、未知に対して畏れを抱くものだ。そして人は、自分達を生物界の上位に立つ身だと考え違いをしている。だから我々は、彼らに告げるんだ。人では到底覆しえない力が、彼らの見えない場所で息衝いていることを。今ある世界を守りたいならば、自らの力で世界のバランスを保てと」

脅迫したと言つてもいい。

ネームレスに属する巨漢は、不敵に笑った。

「表と裏が、互いにバランスを保つ努力をするってことですか…？」

「そうだ。努力を忘れた生物に待つのは 死、だけだ」

誠は怯えた目で、「も、目的は？それが、目的ですか？」と訊いた。

酒顛はわずかに眉根を寄せて、真剣な目で答えた。

「世界の、ゆるやかな変化と、豊かな進歩」

「ゆるやか…豊かな…」

「我々が裏の世界で生きているのには理由がある。我々は、一般人とは異なる力を持っているのだ」

曖昧模煳なフレーズに、「力…？」と誠は首をかしげた。

「そうだ。我々は、世間一般で言うところの、超能力者だ」

「……それ、本気ですか？」

いい歳した大人が大真面目な顔で言うので、誠は失礼だと思いな
がらも冷笑した。

しかしそれで酒顛と、彼の取り巻き達が怒ることはなかった。む
しろ逆に、信じない誠を嘲笑っているかのようにだった。

「な、何ですか。普通に考えて、アナタの方が変じゃないですか
……!?」

「普通、か」

「そうですよ。常識的に考えれば、こんな科学の時代に超能力なん
て有り得ません」

マーベル・コミックの読み過ぎだ！
そう罵ろうとすると、酒顛は豪快に笑った。

「ハッハッハッ、それはおかしな理屈だ。むしろ我々は、逆の考え
を持っているのだから」

「逆？」

「科学を生み出し、ただ単なる動物の枠から飛び出した人間だから
こそ、さらなる進化の余地があったのだと、我々は思っただよ」

「……だからって、超能力なんて……」

「ウヌバ、見せてやれ」

ウヌバはノースリーブで剥き出しの太く逞しい右腕を、少年の目
の前にぐいと自慢するように見せた。そして開いた手に少しばかり
力を込めた。すると手首から先に、灼々とした真っ赤な炎が発生し
て、一息に腕にまわりついた。

「うわっ!？」

「物は試しだ。この炎に触れてみる」

「えっ!？」

酒顛の指示で、ウヌバは炎の手を誠に向けた。彼の表情に苦痛は見えない。

「その猜疑心を、自分で払ってみてくれ」

凄まじい熱放射だ。火の粉が散っていて、鼻先が軽く炙られているようだ。

しかし誠は何かのトリックで、タネは必ずあると信じて手を伸ばした。

が、「あつつつ、あつつうつつ！！ 熱いですよっ、本物ですよコレ！！」

調子に乗り過ぎた。焚き火の炎と同じ、触れば火傷してしまう、あの炎だ。

誠のリアクションに一同は大笑いした。

ケンだけはムスツとしているが、彼らは悪い人ではないのかも知れないと、誠は多少気を許してしまっていた。

「そりゃそうだ。これはウヌバが生み出した、本物の炎だからな」

ウヌバは事が済んだと察して炎を消すが、まるでよくできた手品のように皮膚は全く爛れていない。黒人特有の掌と甲との色味がハッキリと分かれた、綺麗な手のままだ。

清芽が用意してくれたステンレスの器に入った氷水で、手を冷やしつつ、「本当に、超能力者なんですか？」と誠は質問を重ねた。

「超能力者、突然変異体^{EESP}、様々に言われるが、我々はそういった公的な類ではない。裏世界で生きる我々は、表世界にとって異端的な存在でなくてはならない。故に我々は、我々のような者達を便宜的に、異端者と呼ぶ^{ヘレティック}」

「変人っていう奴ね」

エリは自虐的に言うが、まるで呑気な顔をたたえている。事実そうであるから否定のしようがないといった具合だ。

「じゃあ、皆さんもその、ヘレティックなんですか」

「そうだ。我々はそれぞれ固有の能力　センスを持っている」

ヘレティックの使う常識離れの力を、センスと呼ぶ。ケンの異常な嗅覚や聴覚、エリの赤外線を感知する特異な知覚、ウヌバの発火能力　どれもがセンスである。

「我々はこの力を正しく行使し、世界の急速な発展を阻止している」
「どういうことです？」

「ヘレティックには当然、頭脳が異様に発達している者もいる。彼らは時として、想像を絶する殺戮兵器を発明してしまうことがある。科学にせよ、薬学にせよ、発明や発見とは、ともすれば人類の生活に繁栄を齎す場合もあるが、失敗によるリスクは付き物だ。それが兵器ともなれば、一度の試験運用におけるリスクはあまりにも高過ぎる」

兵器は開発から無数の実験を経て、はじめて実戦投入される。成功すればその価値を認められ、そこで得たデータから毒気を抜いて応用することで、新たな技術として社会の糧になる。原子力が、その一例である。

逆もまた然りだ。

しかしその影には必ず犠牲者が生まれる。

もしも人知を超えた発明があれば、もしもその開発者がヘレティックであるなら、もしも人殺しを前提、あるいはすでに利用された可能性があるならば　酒顛達はそれを黙認するわけにはいかない。

一国がその利権を獲得した瞬間、世界はまた、大きな戦争の火蓋を切ることになるからだ。

「ヘレティックが開発した物は、どれもが常識外れ　つまり、オーバーテクノロジーというやつだ。それが強力な兵器で、万一使われでもしたら、世界のバランスは一挙に崩れて、人類の存亡自体が危うくなる。我々はそれを表世界の誰よりも早く察知して、未然に防いでいるのだ」

「そんなことを……何で……？」

「決まっている。？世界の為？　だ」

「だけど、ボクは一般人ですよ？」

「残念だが、キミは一般人ノーマルではない。キミも、異能なるセンスを持つ、異端者ヘレティックだ」

「そんな……。そんなこと、あるわけないじゃないですか……」

「俺をこんなにしたのは、テメーなんだぜ」

ケンヘレティックは頭の包帯を親指で指した。

「ちょっと待ってくださいよ、ボクは何も知りません！」

彼に怪我をさせた覚えは無い。むしろ痛めつけられていたのはこっちだ。

誠は声を荒げた。

「ボクは……、ボクは何者なんですか……！」

酒頭は書類を差し出した。そこに挟まれていた写真には、都立高校の制服を着た誠の姿が写っている。一同の目が、一斉に酒頭へ向けられる。

「この組織のボスが許可した。キミにも知る権利くらいはあるらしい」

誠は恐る恐る書類に手を伸ばした。

いくら捲つても頭に内容が入ってこない。ただの文字の羅列で、記憶に無いことばかりだった。

「キミは東京で生まれ、五歳までそこで暮らしたが、父親の仕事の関係で中学三年生まで大阪で生活していた。しかしあることが原因で、東京へ戻ることになった」

「…え？」

「御両親が、海外旅行中に行方不明になられたからだ」

「行方…！？」

彼に兄弟はいない。早河家は元々兄弟が少なく、短命な家系のようで、伯父や伯母、従兄弟すらいなかった。

「その後キミは、父方の祖母のいる東京の実家に引き取られた」

母親は両親を早くに病気で亡くし、引き取り手が現れなかった為に児童養護施設で育った。

父親は母子家庭で育ち、食費から学費まで二人で協力しながらやりくりしていた苦労人だった。

「だが、その祖母もまもなく」

「デタラメだつ！！」

書面にある祖母の名前と享年が目に入るや、誠は叫んでいた。それに苛立ったケンが、「テーマが知りたいつつたんだろうがよ！」と再び胸倉を掴みにやってきた。

「ボクはっ、ボクは…っ!？」

知らない。こんなの知らない。

でも、確かにおかしいと思った。

病院で目を覚ました日からおかしいと思っていた。

ナースが御両親に連絡をと言った時、医師は彼女を止めてひそひそと耳打ち合っていた。

そういうことか。いないから配慮されたのか。

顔も名前も思い出せない親という存在さえも、隠されていたというわけか。

これじゃあ完全に、孤独じゃないか。

「早河誠君。キミがヘレティックであると判明した以上、我々と敵対している連中は必ずキミを拉致しに来る。ターゲットはキミ一人じゃない、我々もその対象だ。奴らは無抵抗を示さない我々を殺すか、薬漬けにして廃人になるまで扱き使うか、どちらかしかない」

誠はベッドの上で、耳を塞いで身を縮めた。嗚咽が広がって、シートが濡れていく。

その様子にエリは居た堪れなくなって、「リーダー。頭ごなしに言っても、彼を追い詰めるだけですよ。しばらく彼の自由にできませんか？」

「それもそうだな。彼のことは俺に一任されているし、問題無いだろう」

「マコト君。部屋のカギは開けておく。外へ出るのはキミの自由だ。食事も適当に用意させる。もしも困ったことがあれば、コレでコールしてくれ」

清芽はベッドに備え付けられたコンソールの、緑色のスイッチを指差した。

誠は一瞥もせずに、膝に顔を埋めるばかりだった。

清芽はベッド周りのコントラクトカーテンを閉めると、酒顛達と一緒に部屋を出た。

誠は、自分が何故泣いているのかも解らなかった。
解らないことにまた、泣き続けた。

* * *

ネイムレスと呼ばれる者達が隠れ住む施設は、世界中に点在している。彼ら自身はそこを家や基地ホームベースと呼び、特に酒顛達がいるこの基地を本部HQと呼んでいる。

ここ本部はマリアナ海溝近郊にあり、海洋プレートに張り付く岩盤に擬態している。

内部は近未来的な造りになっており、中央部分では住居や研究室などが軒を連ねている。長い通路を挟んだ反対側は、ほぼ全面ガラス張りになっており、天然のアクアリウムと化している。

あくまで深海にある為、基地内部の光源は、海水から分離させた重水素をエネルギー源にした、熱核融合炉による自家発電形式となっている。海上の現在地と同じ昼夜の明かりを再現し、生活リズムを狂わせない仕組みを取っているなどの手の込みようだ。

その為かは定かではないが、このアクアリウムに紛れ込んだ深海魚は、光という未知の現象を肌で感じ、独自の進化を遂げているのだった。

まるで、この基地に住まう人々のように。

「惨いものだな」

通路で、酒顛はそうこぼした。

すぐその海から厚いガラスを越えて、いつになくどんよりとした湿り気が伝わってきていた。

「たとえ記憶があつたとしても、急にこんな話を突きつけられれば混乱してしまうのは無理もない。しかし彼には記憶が無く、過去の自分さえも知らない。交友関係も分からず、両親の顔さえも憶えていない。一般常識だけが、彼を支えている……」

「全生活史健忘と言うんだ。外傷性の、部分健忘だ」

酒顛チームと並んで歩く清芽が答えた。

それにエリが問う。

「つまり、憶えていることと憶えていないことがあるってことですか？」

「そうだね。酒顛君の言うとおり、彼は一般常識を憶えている。思い出せないのは、自分と密接に関わることだけだ。生後からの生活や近い人のことを、彼は思い出せないでいる」

「外傷性って言いますけど、アイツ、怪我なんかしてねえッスよ」

ケンは自分の頭を指して、こんな風になってたら分かるけどな、という顔をした。

「担当医のカルテによれば、確かに頭部への外傷は見られない。しかし彼の脳の一部　記憶野の付近に、小さい傷が修復された痕がいくつも残っていた」

「よく分かりますね、いつものことですけど」

「ハハハ。《体内透視》のお蔭だね。おそらく事故に遭った当時は、深い傷が残っていたんだろうが、今となっては確かめようもない」

当然のことではあるが、清芽もヘレティックだ。

彼はレントゲンやエコー検査よりも精確に、相手の体内を見通す透視能力を持っている。それに相俟って、ヘレティックならではの優れた身体能力からなる高い技術力を有するので、彼に医療ミスという言葉は無縁だった。

故に人は、彼を神と崇め、尊敬してやまない。

「傷が治っても、記憶は戻らないんですか？」

「別個の問題だね。脳内の電気回路が正常値に戻らない限りは、難しいと思うよ。今の彼の脳は、宝箱のように固く閉じられているんだ」

「……あの子、可哀想ですね」

「そうだね。僕も、そう思うよ」

「エリ。そう思うのなら、強要はするなよ。腫れ物のように、デリケートに扱ってやるんだ」

釘を刺す酒顛に、「腫れ物ですか」とエリは怪訝な顔で訊いた。

「彼の精神が潰れた時に吹き出るものは計り知れん。何せ、彼のセンスは」

ゴッ！！

反動の大きさ、彼が暴走した時の被害規模を考慮した酒顛のセリフは、鈍い音で打ち消された。後ろを振り返ると、顔を俯けたケンが壁を殴って大きなヒビを入れていた。

「アレは、《韋駄天》なんかじゃねえ……！」

そう吐き捨てる彼に、エリは首をかしげた。

「何言ってるんの。実際に目の当たりにしてきたリーダーと清芽先生が言ってるんだから、それ以外に無いでしょう？」

昨日誠は、秘められた力　センスを発動した。

個々に違った特徴を持つというそれだが、彼のものはすでに《韋駄天》という名を付けられたものだった。まさに神速と呼ぶべき、残像も残さぬスピードは、酒顛も清芽も、過去に幾度も間近で見てきたものだった。

それももう、二十余年も前になる。

「《韋駄天》は音速を超えんだろ？　だけどアイツが消えて、俺の背後を取るまでには一秒はかかってやがった。アレは　劣化品だ」

歩き去ろうとするケンの背中が、亡き人のそれと重なって見え、
またもや図らずも酒顛は口を開いていた。

「結論を出すのは早いぞ。セイギさんは《韋駄天》を扱いきる為に、
肉体を極限にまで鍛え抜いていた。マコト君も志を持ち、努力さえ
すれば、きっと　」

「今のアイツを見ただろ。自分のことで精一杯の奴が、世界の為に
何ができるんだ…！」

不愉快な感情が後頭部の傷口を疼かせる。

ケンはギリッと齒軋りを立てた。

「二」(後書き)

どうも、T・Fです。

ということ、主人公の名前は「早河誠」です。

そして彼の能力は、《韋駄天》 超高速の脚力ということでした。こういった作品は、今まで世界各地で展開されてきました。

日本では勿論、作中にもアメコミの金字塔マーベル・コミックの名を出しましたが、この「ネイムレス」は私なりの解釈で超能力というものを綴っていければと思っています。

既出のストーリー展開となってしまう虞があつて非常に怖いのですが、まあ、そこは ね、何とか適当に凌いでいきたいですよねw

さてさて、それでは来週にまた投稿させて頂きます。

本日も御一読頂きましてありがとうございます。

お疲れ様です。

T・Fでした。

〔二〕（前書き）

二話目です。

あらずじを少し。

2012年 某月。

とある出来事で記憶を失った少年 早河誠は、入院中に謎の部隊によって、彼らの秘密基地へと拉致された。

誠は、部隊の紅一点であるエリ・シーグル・アタミの計略によって、基地内で起こる偽テロ騒動に巻き込まれる。

追い詰められた誠は、テロの主犯を名乗る雪町ケンとの挑発と、精神的な逼迫の末、人知を超えた力を発現する。

格闘の末に気絶し、次に目を覚ました誠の前に現れたのは、ネイムレスと組織外の人間に呼ばせている謎の組織の構成員達だった。

部隊のリーダーを名乗る酒顛ドウジは、誠も自分達同様に異端者^{ヘレティック}と呼ばれる超能力者であると断ずる。

困惑する彼は、その事実から逃げるように、ただただ泣きじゃくるのだった。

(二)

荒唐無稽で途方途轍もない話を聞かされて、さらに一日が過ぎた。
ネイムレス 無名組織やら異端者ヘレティックやらと呼ばれる者達が住まう海底基地に連れ込まれて三日目になる。

早河誠は、昨夜は一睡もできなかった。布団に包まって、夜通し暗涙で枕を濡らしていた。

何故こうなってしまったんだ。

ヘレティックとは何だ。

センスとは、表だとか裏だとか…。

いくら考えても、最終的には自分にもいたという家族のことに行き着いてしまって、また悲しくなってしまうた。

「ボクはこれから、どうなるんだ……？」

ダンゴムシのように膝を抱えて丸まっていると、また涙がこぼれた。

そこへ、自動ドアがスライドする音が聞こえた。

誠はビクンと身体を強張らせながら、薄く開いていた目蓋を固く閉じて、アゴを心持ち引いた。

誰だ、清芽先生かと思っていると、「マコト君、外に出ない？」

エリ・シーグル・アタミという女の人の優しい声だった。

今のをノック代わりにコントラクトカーテンが開かれた。ギイと鳴ったので、椅子に座ったのが分かる。

誠の動悸が急激に速まり、多少の怯えがあって汗ばんだ。

返事がないことに焦れたのか、エリは誠の頭の位置を把握して、耳元でそつと囁いた。

「そんな風に狸寝入りされたら、お姉さん…」

彼女の目は熱源を精確に捉える。目を閉じて意識を凝らせば、壁を越えた先の一定距離まで熱量を感知できる。だから、生物がいくら隠れたところで見逃すことはない。

エリは細い指をスツと布団の中に忍ばせて、いやに扇情的な手つきで彼の足を撫でた。

誠はギョツとなつて、「うわっ、やめてくださいっ!!」掛け布団と一緒に飛び上がった。

「傷付くなあゝ。そんなに驚かなくてもいいのにー」

「だ、だって、いきなり触るから!」

「アハ、純情なんだあゝ」

挑発するような目でエリは笑った。

それにムツとした誠は、「何しにきたんですか。早く僕を、元の場所に返してください」

「それはできないよ」

「どうしてですか」

「殺されちゃうから」

誠は苦笑しながら、「ま、またそうやって脅すんですか」

どうしてここの人達は、こうも簡単に物騒な言葉を並べ立てられるのだろうか。

エリの平然とした顔が逆に恐ろしい。

「嘘じゃないよ。こういう生活をしていると、嫌でもそういう光景を目の当たりにするの」

「嘘ですよ。ボクを言いくるめたいから、ありもしないことをでっち上げてるんでしょ」

「嘘じゃないって。今も世界中で、普通じゃないという理由だけで生き死にの選択権を他人に奪われてる人がいる。嘘だと思うなら、キミをこれからあの病院に返してみようか？」

きつと昨日とは比べ物にならない苦痛が、キミに襲いかかるよ。

彼女の目に影が差す。

誠は背筋を粟立たせたが、「願ったりですよ……！」と啖呵を切つてみせた。想像以上に頭のおかしい人達に誘拐されたに違いない、彼はそう思っていた。

「私達の存在を公にするつもり？ 誰も信じないのに？」

「それでも……っ」

「無理よ。誰も信じない。信じるのは？ 一國境なき反乱者《Rebel without borders》^{ルブス} REWS？ と私達が呼称している敵対組織だけ。キミは自分で自分の価値を、声を大にして知らせるだけになるわ。自分で自分を追い詰めて、殺すことになるのよ」

「じゃあ、ボクはどうすればいいんですか！？」

誠は自分の感情を制御できなかった。尖った声で、不安な気持ちを吐き捨てた。

「こんなワケの分からない人達のいる場所に勝手に連れ込まれたボクは、一体何をさせられないといけないんですか！ 過去も未来も今の自分さえ分からないボクは、何を信じていけばいいんですか！ ！ こんなもの、あんまりだ……っ！！」

エリはそつと彼の頬に手を伸ばした。涙を拭ってやる為のそれも、人間不信の子猫のように払い除けられてしまった。

ベッドから逃げ降りた彼は、壁に背中を張りつけて、肩で息をし

ながら彼女を睨み続けた。

気を取り直して、エリは彼の目を見て告げた。

「私達は私達で、キミの命を守らないといけない。その為にはまず、キミの協力が必要な。だからキミにも、色々知ってほしいの」

「…何を」

「まずは、ヘレティックとしての自覚を持つてほしい」

「そんなのできるわけないでしょっ、ボクは火を出したりできないんですから！」

あんなの私だってできないわよ！ とエリも言い返したかったが、話がこじれそうになったので呑み込んだ。代わりに、「記憶、取り戻したくないの？」

「どうしてそういう話になるんですか。論理のすり替え…、いや、やっぱりただの脅迫じゃないですか！」

「今、目の前にある現実を受け止められないで、どうして自分の記憶を取り戻せるの？」

「順番なんて関係ありませんよ！ アナタ達はそうやって適当にボクを言いくるめて、手籠めにしようとしてるだけでしょ！？」

うっ。

エリは下唇をつき出して、不服そうな顔をした。これではいつまで経っても平行線を行くばかりだ。

「そんなカワイイ顔して、意外と頑固なんだ」

「力、カワ…！？」

顔を赤らめて動揺する誠に、エリは言った。

「とにかくさあ、歩み寄ろうよ。基本私、ケンと違って喧嘩とか嫌いだし。陰悪な雰囲気とかって耐えられないんだよね」

誠は俯いた。未だに納得できていない様子だったが、「ボクだつて、そうですよ……」

素直な子、と安堵したエリは訊いた。

「表世界の人には、自由が約束されてるんだってね。世界人権宣言の、？基本的人権の尊重？ってやつで」
「え」

「でもね、私達ヘレティックにはそれが無いの。常に何かしらの圧力で縛られてる。自由を主張しても、誰も認めてくれない。その名の通り、異端者だから」

「それは、アナタ達が勝手に、裏世界の人間になったからでしょう」
「そういう意味じゃなくてね、普通じゃない人間っていうのは、人間として認められないのよ。まるで条文に書き加えられているようにね、私達には人権が適用されないの」

エリは手の平に目を落とした。
かつての感触を懐かしむように開いては閉じ、唐突に語り始めた。

「ある人は昔、キミのように表世界で生きていたんだけど、人権が認められていなかった。その人は物心つく前に親に捨てられ、南米のカトリック教会の周辺を集団でうろついていた、ストリート・チルドレンの一人だった」

ストリート・チルドレンとは、身寄りも財産もないので路上生活を強いられている子供達のことだ。

誠もその程度の知識は漠然と憶えているが、その苛酷過ぎる生活を軽々しく想像することはできなかった。

「当時十歳だったその人は、同じ境遇を持つ子供達と一緒に、危険なことを数多くしてきた。窃盗や強盗はもちろん、無邪気な背格好を悪い大人にお金で買われて、麻薬の運び屋や違法とされている売春広告を常連客に売りつけたりして生計を立てていた。全ては生きる為。それ以外の思考は、一つも無かった」

善悪を割り切るほどの経験も無かった。それ以外のことをして生きる方法を知らなかった。

綺麗な服を着て歩く人達は、自分とは違う生物だと本気で思っていた。

「その人には特殊な力があつた。特に夜間になると有効に発揮できるその力は、仲間の助けになった。その人は仲間の中でも特に幼かったから、誰よりも可愛がられていた。でも、それは嫉妬を生んだ。さらには、偶然が重なった」

南半球の七月　冬が訪れ、寒さ厳しい日々の只中だった。

「無政府で暗躍する男達が、教会の近辺でヘレティックを探し回っていたの。彼らは世界中のありとあらゆる場所で、血眼になって対象者を探していた。時には子供に、面白いことや変なことができる人を知らないかと問いかけるの。それにある少女は、仲間の中に一人いると告白した。仲間内で他言無用・秘密厳守とされていたのに、その少女は嫉妬の為に暴露してしまった」

その地域には？一死の部隊《Death Squads》？という白色テログループが存在する。

彼らは地域の安寧を求めて、悪行を繰り返すストリート・チルドレンに、暴行や殺害で怒りを示す。？死の部隊？を雇うのは、被害

に遭った店の主人や、そこを統治する政治家。雇われるのは警察官や職にあぶれた民間人だ。

彼らは、子供達にも等しく命があるということを見捨て、ことある毎に集団殺戮^{ジェノサイド}を決行していた。補導だ何だと御題目を並べるが、結局はみすばらしい上に始末に負えない彼らが目障りなだけなのだ。そして、その矛先がついに、？十歳の少女？がいるグループにも向けられた…。

「偶然はさらに続いたわ。ある仲間が悪辣な警官達に怒りを覚えて、パトカーに石を投げたの。それが引き金になって、深夜、？死の部隊？が動いた。数十名いた子供達が車に取り囲まれて発砲された。？私？は一人、仲間に逃がされて、脇目も振らずに裏道を逃げた。そこへ彼らが現れた。部隊に紛れて、ヘレティックを探していた男達が、？私？の前に立ち塞がった」

男達の顔は暗がりで見えなかったが、服装は当時流行っていたラフな格好だった。

その時のエリは、間違いなく部隊に参加した、金に汚い大人達だと思っていた。

そんな男達は、口々に言った。

？動くなよ、お嬢ちゃん？

？熱を目視できる能力か。面白い…？

「私は腰を抜かした。起きない身体で必死に後ずさった。でも、真後ろにいた少女に突き飛ばされてしまった。リークした少女だった。彼女は、私のことが腹立たしいと言ったわ。気持ち悪い、自分達以下の糞にも劣る存在だと罵ってきた……」

？アンタは悪魔よ。アタシ達が不幸なのは、みんなみんなアンタの

せいなのよ！？

エリの額に人差し指をぐいぐい押し付けてなじった。長い爪が刺さって、血が滴った。

「別にそれには何も感じなかった。悲しかったのは、裏切られたことだった。信じていたのに、仲間を窮地から救う為に神が与えてくれた、ささやかなプレゼントだと思っていたのに、この力のせいで妬まれていた。私はこの子に売られたんだ、そう思った」

「何でみんな恐れないのよ。こんな奴、普通じゃないって分かっているはずなのに。でも、アハハ、アンタみたいな悪魔憑きの連中は、この人達の商売道具になってればいいのよ！？

「肩を落とす私を、少女は嘲笑ったわ。でもそれも次第に落ち着いて、これを機に今後は粹がらないようにと忠告すると、男達に後は勝手にしてと言いついて去って行こうとした。そこへ男が微塵の躊躇いもなく、彼女を背後から槍のように長い指で串刺しにしたわ」

「？小娘、貴様に何が分かる…！？

「？おい、勝手な真似をするな！？

「？俺達は好きでこんな身体に生まれたわけじゃない！！ 普通の貴様に何が分かるっ！！？」

怒る男もヘレティックだった。表世界での人目も憚らない生活に憧れ、現実には裏世界での息苦しい生活を強いられる異端者の一人だった。

指を鋼鉄の鉤爪のようにできるセンスだった。

「？それで一般人に八つ当たりってか？ 虫唾が走るぜ？」

？そのヒステリーな思考回路、同属の我々にも理解し難いな！？

「銀髪が目つきの悪い子と、丸坊主の老けた顔をした青年。突然現れた彼らは、私の仲間じゃなかった。けれど彼らは不思議な力を使って、あつという間に男達を倒してくれた」

あの日、冷たい目をした少年が差し伸べてくれた手の温もりを、エリは忘れられない。

「仲間のもとへ戻ると、死人が出ていた。大勢殺されていて、血の海が広がっていた。私を逃がしてくれた子も、微かな体温を残して動かなくなっていた」

灰雪が降っていた。ひらひらと降りてくるそれは、彼らを慰めるように血を覆っていた。

少年達は男達の遺体を回収すると、たどたどしい現地の言葉でエリに同意を求めてきた。

自分達と共に、ある場所で暮らしてほしいということだった。共に来ても平穩無事を約束できるわけではないが、ここに残っても同じ目に遭うだけだと言われた。

返事に迷っていると、彼らは条件を出してきた。

生き残っている子供達は、自分達の協力者が責任を持って保護すると。

それならと、エリは彼らと共に行くことを選んだ。
シンパシー

共感も抱いていた。それに自分のように特殊な人間が傍にいれば、少女の言ったとおり、様々な不幸を周りに及ぼしかねないと思った。

「不幸の上に、不幸を塗り重なるわけにはいかない。そう考えたから、私は今、ここにいます」

「どうして…そんな話を……？」

「公平^{イブン}じゃないと思ったの。キミだけ勝手に個人情報調べられて、可哀想だと思った」

「結局、あの人は人を殺したんですね。それで世界の為にやっているとか言つて、偽善だとは思わなかったんですか？」

「私は自ら志願して、この組織の兵士になった。ここで非戦闘員として安穩と過ごすこともできたけれど、私と同じ境遇の子や、ストリート・チルドレン達が今も苦しんでいるかと思うと、いても立ってもいられなかった。思い描いた未来を実現させるには、目先のことから手を出して広げていかないとダメだと思ったの」

自分も、世界を影から支える力になれる。より良い世界を生み出す力に…。

彼女の目には確かな強さがあつた。固く、清廉な意志だ。

「マコト君は今、例外的に自由を認められている。それは行使しても怒られないし、損することもない。誰にも迷惑をかけないのなら、尚更」

エリは微笑んで、誠の手を引いた。

「ちょっとだけ、デートしよっか」

* * *

無粋な輩が三人いる。

彼らは通路の脇に隠れて、歳の離れた姉弟のように手をつなぐ少年と美女の後ろ姿を尾行していた。

「ケン、何故ソワソワしてル？」

片や楽しそうに、片や恥じらいながら微笑み合う二人を、普段と違った様子で見守っている雪町ケンに、ウヌバは純粋な気持ちで訊いた。

返ってきたセリフはいつものように口悪い、「し、してねえよ。

黙ってるよコノヤロー、バカヤロー……」しかしどこか覇気が足りない。気も漫ろである。

そんな彼らを率いるチームリーダーの酒顛ドウジも、アゴに手をやりながら難しい顔をしている。

「分かるぞ、ケン。俺も少し落ち着かないんだよなあ。エリは娘みたいなもんだからな」

「一緒にすんじゃねえよ、ハゲ。俺はあのガキが妙な気を起こさねえが見張ってるだけだ」

「妙な気ってお前……チューか？ 手つなぎは良くても、チューは認めないってか……？」

「は……？ そ、そんなんじゃねえし、意味分かんねえっ……！」

グハハハと高らかに笑う酒顛に、ケンは顔を真っ赤にして怒った。酒顛はここぞとばかりにからかおうとしたが、「チューって何ダ。接吻のことか？」ウヌバは首をかしげた。

「何で難しい熟語の方で覚えてんだよ」

「聖書に載ってタ」

そう言って胸元から取り出したのは、分厚い大型の国語辞典だった。

「「そう、良かったな……」」

強面の顔の中で純朴な瞳をキラキラと輝かせている彼に、二人は

如才ない笑みを返した。

「もしかして、緊張してるのかな？」

ウブな少年の心拍が高鳴っているのを見抜きながら、エリは白々しく問いかけた。

誠は口元をモゴモゴさせると、何も言わずにまた黙った。

「んゝもおゝゝ カワイイなあ、マコっちゃんは一っ！」

「マ、マコ…！？」

「ダメ？ キミのあだ名なんだけど」

「い、いえ…、何か、嬉しい…感じですよ……」

誠は赤らんだ頬を搔いて俯いた。

「グ シって感じ？」

中指と小指を折って、免許皆伝な感じで見せつけてきた。

誠は驚きと同時にどこか冷めた気分になって、「…何かよく分かりませんが、これに関しては、そうですねって言うたらダメな気がします」

赤と白のボーダーカラーが迫ってきそうで怖かった。

「お堅いなあー」

ニコニコしている彼女に、誠は訊いてみた。

「あの、ア、アタミさん……」

すると、「そんな他人行儀な呼び方はメっ！ エリって呼んで？」と彼女は幼児を窘めるように言って、ウインクした。

「じゃあ、エリ…さん」

さすがに呼び捨てはできない。

誠がチラチラと彼女の顔を窺いながら口にとすると、「なあに、マコっちゃん？」と優しい顔で返してくれた。

やはり、良い人なのだろうか…？

「えっと、ヘレティックって、何なんですか？ ボクも、その一員なんですよ」

「そうね。有体に言えば、一般の人達に大きな＋Xが付帯された人々、かな」

「エックス？」

「＋ って和製の外来語なんだよ？ 英語では＋X、もしくはプラスサムシング」

「初耳です…」

「 ってXに似てるでしょ？ だから間違えたんだよ。あ、Xっていうのはつまり、未知数のことね」

「それは分かります。学校で習った ような気がします」

「自信が無いの？」

「はい…」

「疑い過ぎない方が良いと思うよ」とエリは言った。「マコト君は、常識だけはちゃんと覚えているんだから、知識に関しては自身を持つて良いんだよ」

「でも、確証がありませんよ」

「そんなもの、誰だってそうよ。昔のことを逐一覚えている人なん

て、そうそういないんだから。それこそ、ヘレティックでもない限りね」

「……………」

「大丈夫だよ。もしも知らないことがあっても、それは本当に知らなかったことかもしれないだし、もしも間違っってしまったても、人はみんな間違っただから」

「そういうものですか」

「そういうものよ。もしも間違っただとしても、思い悩む必要はないわ。だって、生きている内は、いつだって間違いに気付いたら、それを正すことができるんだから」

キミが知っている常識は、キミの中にちゃんとあるんだよ。

エリはそう優しく告げると、「それじゃあ、ヘレティックの話ね」と横道に逸れてしまった話を軌道修正した。

「センスっていう、特殊な才能を持つ人々をヘレティックって言うんだけど、そのヘレティックについては、まだ分からないことが多いの」

「センス…って、昨日のアフリカ人の方がやったような…?」

「ウヌバね。名前、ちゃんと覚えてあげてね」

ウヌバは右手から炎は出していた。油まみれの手にライターで着火させたわけでもなく、ただ少し力を入れるだけという、確固たる自分の意思で炎を生んでいた。

「彼は中でもさらに特殊かな。私は目とかがね、普通じゃないらしいの。私、赤外線を目視できたり、目の届かない遠くの熱量を把握したりできるの。だから私にとって赤外線って、可視光線なんだよね」

しかし開眼時は？目を凝らす？、閉眼時は？意識を集中する？という付帯条件が伴う。

「昨日もリーダーが話に出していたけど、ヘレティックの中にはすつごく賢い人がいるんだけど、その人達にも私達の出生の謎が解明できていないらしいのよね」

「そうなんですか」

「この基地にいるメギイドっていう博士が、ヘレティック研究の第一人者なんだけど、その人でも私達の誕生の全容は解らないみたい。賢いって言っても、その人に見合った分野でなければ存分に力を発揮できないみたいだし」

「ん？ヘレティックの研究は、その人の専門じゃないんですか？」
「専門は専門だよ。でも、どっちがより得意かって言えば、技術開発なんじゃないかな」

「よく分からないですけど、ノーベル賞クラスの人が世界には大勢いるってことですか？」

「そうだね。でも、そのほとんどの科学者が、世間から認められずに生きてきたの。話が突飛し過ぎちゃってね、本当の変人扱いされてきたって聞くよ。不遇よね」

「…何だが、可哀想ですね。正しいことを、言っているはずなのに」
「正しさの証明は、難しいんだよ。特に、少数派にとってそれは至難の業」

「少数派…」

「うん。ヘレティックとして覚醒した人類は、およそ一万人とわられているわ。その内の三割が私達ネイムレスという組織の一員よ。単純計算で七十万分の一だから、間違いなく少数派よね」

「難しいんですね」

「じゃあ、なるべく分かりやすく、ヘレティックについて教えるね」

誠がうなずくのを確認してから、エリは続けた。

「私達は突然変異で生まれてきて、覚醒因子という特有の遺伝子を染色体の中に含んでるの。だけど、それくらいしか解らない。肝心な、どうしてそれを持っているのか、どこが起源^{ルーツ}なのかが判明していないの」

突然変異でも、同様の事例が多数ある為に、何らかの特定の要因があるのではないかという研究が、今も尚続けられているという。

「覚醒因子？」

「私やケンなんかは、生まれつきそれが機能している先天発現型って言われてるタイプなんだけど、それとは別に、これまで一般人だった人が突然ヘレティックになってしまう後天発現型というタイプがあるの。キミは、それ。キミを保護した時には存在しなかった覚醒因子が、今ではちゃんと染色体の中に確認されている」

組織の医師　清芽ミノルは、先日のケンとの戦闘時に誠が負った傷から、血液を採取していた。それをメギイド博士と共に解析し、覚醒因子の遺伝子発現を認めた。

「実はね、キミをここに連れてきた初日、眠ってる間に、ある薬を注射させてもらったの」

「…今、とんでもないこと言いませんでした？」

誠は啞然となった。

薬漬けがどーのこーのと言っていたのはどこの誰だったか…。

「アハハ　だから、ゴメンね。その薬ってのは、覚醒助長薬って言うんだけど、覚醒を強制的に早める薬なの」
「ど、どうしてそんなことを」

「キミにセンスがあるのかを知りたかったから。覚醒因子は、体内で分泌されるアドレナリンと一緒に活発になる性質を持つてるから、ランニングマシーンで走ってもらったり、テロに見せかけて緊迫感や生き死にの境を体感してもらったの。助長薬は人体には無害だから、もしもアドレナリンの上昇に連鎖反応を示さなくても、別に問題は無かった」

「大有りですよ！」

いきなり怒鳴る彼を疎ましく思いながら、「無いわよ」とエリは断言し、「キミはちよつとした白昼夢を見ただけ。東京の病院には夢遊病が過ぎて外出してたつてことで済ますつもりだったから」と悪びれもせずに、ずいぶんと肝の据わった態度を見せた。

「それで誰が納得するんですか!？」

「納得せざるを得ないわよ。だって、キミが無事なら良かったって落着するんだから」

「メチャクチャだ……」

「一昨日は、キミも私達の存在を全く知らなかったわけだしね。キミがいくら騒いだとしても、記憶喪失による軽度の錯乱状態つてことでハイ終了。粹な計らいとして、入院費や今後の治療費なんかを全額肩代わりするつてのも考えてたんだよ」

「やっぱり、メチャクチャじゃないですか……」

「そうかもね。でも、そうまでしても、私達は私達の道理で、事を成すしかないの」

誠は彼女から手を離すと、ハの字を寄せて、「?世界の為?ですか?」

「そつよ」

エリの即答に、誠は愚痴るようにつぶやいた。

「分かりません。僕一人くらい、放っておけばいいのに……」

「そんなのダメよ!」

「え……」

「昨日リーダーが言ってたわよね。私達以外のヘレティック集団 REWBSは、キミを道具にしかないって。私達はそれを黙って見過ごせるほど、薄情じゃないの!」

どこか同属愛のようなものを感じはするが、誠は納得できなかった。

「そのREWBSっていうの、本当にいるんですか? イマイチ、ピンと来ないんですが」

「敵はいるわよ。私達だけじゃなくて、表世界にとっても脅威になりかねない連中が。奴らはね、兵器を開発すると必ずどこかの国に売りつけようとするの。単品の場合もあるし、表世界上の最新型兵器に混ぜたりしてね。もしくは自分達で使おうとする場合もある」

まず彼らは、最終的に売り込みたい国を選ぶ。

次にその国にとって信頼できる筋。つまり武器商人に売りつける。ブラックマーケットを通じた暗号文書で彼らに知らせ、顔も合わずに品と金とを交換する。互いの兵力を知っているので、彼らは余計な欲をかくことはない。

近年深刻なのは、ヘレティックが売りに出されるケースだ。

エリ達は、売られた彼らの残酷な結末を幾度も目にしてきた。

それ故に、誠を見殺しにはできなかった。

「それを阻止してるんですか、アナタ達は」

「開発中に襲撃するのが鉄則。実験段階や完成だと分かれば、全兵

力の半数以上が投入されることもある」

あとはヘレティックの保護とか、要人の警護とか、情報操作とか、色々……らしい。

言葉だけでは現実味が乏しくて、やはり誠は素直に信じられなかった。幽霊の存在を受け入れるくらいの話だった。

そんな非科学的な存在と同類にされているとは露知らず、「だからね、今回のキミの保護は特殊だったの。キミは、覚醒してなかったから」エリは言うてから改めて、バーグという情報屋の奇妙さに寒気を覚えるのだった。

すると、「え……アレ……？」と誠は首をかしげて、何か引っかけたような顔をした。

「どつたの？」

「おかしいですよ、それ」

「うん？」

「だって、それだったらどうしてエリさん達は、ボクを保護なんかしたんですか。覚醒因子は、覚醒しないと現れないんですよね？」

「！ え、あいや、それは……」

急に目を泳がせる彼女に、誠は追撃をかける。

「そうだ。それだと覚醒助長薬もおかしいじゃないですか。覚醒するかも分からない相手の為に、作る必要なんてないじゃないですか」
「それは違うわ。助長薬は本来、不完全な覚醒状態　いわゆる半覚醒状態のヘレティックの、センスの上限を確認する為に開発されたの。キミのように発現前に使ったのは初めてだっただけ」

自然な覚醒には、人体に不具合を生じさせる場合がある。喩えれば、蛇やセミなどが、脱皮を上手くできなかったような具合だ。そ

れは後遺症にもなりかねないので、この組織では発見されたヘレティックには助長薬が必ず投与される運びとなっている。

一度使うと体内で抗体が作られるので、麻薬的な常習性は伴わない。無害と言われる所以の一つである。

「だとしても、ボクはその半覚醒状態でもなかったんですよ？」
「う…そうだけど……」

正鵠を射た指摘に、彼女は得意の笑顔で誤魔化することもできなかった。

どうなんですかと壁際に追い立てられているところに、救いの手もとい、悪魔的に荒々しい言葉が背中を打った。

「ガキ、調子に乗るのもその辺にしとけっ」

ズカズカと足早に近寄るケンの鋭い目に、誠は一息に気圧された。そのガリリと変わった空気を和ませるように、「ケンったら、気になってつけてたんだあ」とエリは茶化した。

「ちげえよ」

ケンは誠を見下ろして言った。

「ガキ。今の疑問は聞かなかったことにしておいてやる。だからテーマも、即刻忘れる」

「ボ、ボクはガキじゃありません…。早河、誠です…！」

唇を震わせて、少年は主張した。

一瞬だけ感心したような顔をしたケンだったが、「だから、何だよ」と正面から受けて立った。

立てば雷、座れば火山、歩く姿は暴風雨。何者にも遮られず、誰であろうと売られた喧嘩は大人買いして、求められたようにただ拳を振るうだけ。

それが常軌を逸した負けず嫌いの困り者　雪町ケンなのである。

「ちょっとケン！　やめなさいよ、大人気ない！」

「女に庇われたままでいいのか、ガキ？」

喚くエリを無視して、誠から目を離さなかった。

誠は唇を噛んで、子供の顔をしていた。

「いつまでも不貞腐れやがって。そんなに元の世界に帰りたいなら、方法を教えてやるよ」

「え……？」

虚を突かれ、張り詰めていた顔から緊張が失せた。

しかし、「テメーのその両足を、切り落とせばいい」

「な……っ！」「ケン！？」

束の間だけ閃いた希望は、悪魔の魅せた絶望への入り口だった。

「そうすればテメーは、二度とセンスを使えない。誰からも狙われずに、表世界でヘラヘラと笑って生きていける。記憶だって、すぐに戻るかもしれねえぞ？」

いつもの仏頂面で、とんでもなく残酷なことを言い放つ男に、エリはついに怒りを露わにした。

「アンタ頭おかしいんじゃないの！？　そんなことして、彼の人生

「どうする気よ！」

「うるせえよ」

「この際だから言わせてもらっわ！ アンタ、この子に対してだけおかしいわよ！ どうしてそんなに酷いことを、平気な顔して言えるのよ！？」

仲間に裏切られ、仲間が無差別に殺されたあの日、彼が差し出してくれた手は温かった。とても心地良い色をしていた。

それが今は、氷のように非情な色をしている。

「そうですよ……。そっちの都合で連れてきたくせに、勝手にも程がありますよ！」

「命があるだけマシだったつてんだよ」

ケンには狼のように険しい形相を作った。

「ヘレティックに居場所はねえ。俺らは一般人にとって？ 恐怖？ そのものだ。尋常じゃねえから、同じ世界で生きることができねえ。奴らが抱いた劣等感で、一体今まで、どれだけの同属が殺されてきたと思う！？」

「彼を責めてどうするのよ！」

「だが、最後に俺達に銃口を向けるのは、その同属だ。俺達は奴らに売り買いされて、兵器として扱われる。拳銃は自分のセンスを他人に売って、用心棒紛いのやり方で生きる奴もいる始末だ。テメーはもう、そういうくだらねえ世界の一部になつてんだよ……！」

「じゃ、じゃあ、どうしろつて言っんですか……！？」

「……今から俺ともう一度、^{サシ}一対一で勝負しろ」

耳を疑ったが、彼の目は揺るがなかった。

「ルールは簡単だ。どちらかが降参するか、気絶するか、死ぬまで戦うだけだ。ハンデとして俺は素手しか使わない。テメーはどんな武器を使っても構わない。ただし、敗者が生きていた場合は、勝者の言うことを必ず一つ聞かなければならない」

ケンの意地だった。本当に誠のセンスが《韋駄天》と言われるそれかを、見極めたかった。

「俺はテメーをタダでこの世界から追い出すつもりはねえ。もしもこの勝負を拒否するなら、さっき言ったとおり、両足を切り落として元の場所に帰してやる。要するに、テメーがテメーの望む自由を手にするには、俺に勝たねえといけねーってわけだ」

「そんなの、一方的じゃないですか!」

「俺は、本気だ」

ケンは汚名を返上するかのごとく気迫で、改めて誠に挑んだ。

「こんな場所から自分の足で出て行きたいなら、俺と戦って 勝て」

* * *

マリアナ海溝の複雑に隆起した岩盤に擬態する、通称ネイムレスの本部基地。

その内部施設の一つに、欧州の円形闘技場アンフィテアトルムのような形の、巨大な訓練場がある。

そこはウヌバ達のように、他への影響があまりにも強過ぎるセンスを持つ者達が、その力を存分に発揮できるように造られた場所だ。だが今回のように、自由の所有権を巡る争いごと 決闘に用いられるのは久しかった。

その為、組織内でも有名な　あの雪町ケンが、最近表世界で保護した少年とガチンコでやり合うと聞きつければ、ここぞとばかりにこの機会を見世物にしようと思案に考える者が出てくるのも仕方ないことだった。

レートは、先日の偽装テロの件が相打ちに終わったこともあり、ケンが五、誠が四、相打ちが一だ。

大穴狙いで、はたまたケンへの当てつけで誠に賭けた連中は、小さな背中中に恐喝色の声援を飛ばすのだった。

「テメーっ、ガキンちょ！！　負けやがったらタダじゃあ済まさねえからなっ！！」

「オレの全財産、お前に賭けたんだ！　絶対何とかしやがれよ！！」
「遠慮はいらねえっ、その生意気な銀髪野郎に全力で屁喰らわしてやれ、屁えっ！！」

ガハハハハと酷い笑いが巻き起こって、ケンは舌打ちした。

およそ十五メートルの高さから浴びせられるヤジのほとんどが英語だ。

誠は余計に恐縮して身を縮ませた。

連中はそこを囲む通路にある、開放厳禁の強化ガラスを勝手に開けると、身を乗り出して好き放題に騒いでいる。まるでフリーガンだ。

その様子にまた誠は、とんでもなくガラの悪い場所に連れて来られてしまったと嘆息を漏らすのだった。

『貴様ら静粛にしろ。作戦部戦闘大隊総隊長、及び第一実行部隊隊長、酒頭ドウジだ』

唐突にスピーカーから発された英語による自己紹介で、今まで五月蝿かった連中が一斉に口を噤んだ。

『これは貴様らが考えるような、下種な格闘賭博ではない。一人の少年が己の人生を懸けた、文字どおり真剣勝負である。貴様らがこの環境を窮屈に思い、この際に日頃のストレスを発散したいと思う気持ちは分からんでもない。だが、今一度原点に帰れ。我々はこの身体に生まれたことを呪いつつも、世界の為に何かができると信じて、今日まで生きてきたはずだ。恥じることは何一つ無いほどに…』

特殊な合金で造られた高い壁の上が、まるで水を打ったように静まり返った。

誠は、円形の通路をつなぐ訓練場の監督室の窓を見上げた。そこには真剣な顔でマイクに向かう酒顛と、こちらに気付いてにこやかに手を振るエリの姿があった。

『しかし今、貴様らは、自らの顔に糞を塗りたくった。理想を守る為に空しく散って逝った者達に顔向けできんほどの、酷い面をしている…!!』

苦い顔をする組織の隊員達は、口々に五月蠅い黙れとつぶやいた。不愉快な言葉がケンの耳に届き、さらに深く眉根が寄った。しかしそれも、次の一言で全て消え去った。

『愚か者は訊いた、何故戦うのだと。英雄は答えた、ただ愛するが故にと…!!』

これを聴いた隊員達は思い出したように、まるで別人の顔つきになつて背筋を正した。

誠は何事だと驚いた。一同の視線が彼に降り注いで、二度驚いた。

「ボクを、見ている…?」

隊員達は右腕を肩まで上げて、握り拳の人差し指と親指の付け根に、軽く唇を当てた。それは彼らが組織の一員であることを示す唯一の証となる、最敬礼である。

今のは誰の言葉だったかとエリが考えていると、「……セイギ・ユキマチの遺言^{いげん}だな」監督室に同席するヘレティック研究の権威メギイド博士が言った。

そうだった。ずいぶん前にリーダーが教えてくれたセリフだった。ケンの父　雪町セイギの遺したこの言葉が、今の組織の行動原理になっているのだった。

『二人共、自らのエゴに信義はあるな？』

今度は誠にも分かるよう日本語だった。

誠は急な問いかけにおどおどし、目の前にいるケンをちらりと見た。

彼は酒顔を見上げ、静かに敬礼した。

その様子に動揺しつつ、誠も同意するほかなかった。

誠の首肯を確認すると、酒顔はまるでスポーツの実況員や解説員のようにマイクを正面に置き、メギイドの隣に座った。

いよいよ緊張から、喉の渇きが激しくなってきた。誠は、再びケンに目を向けた。

ケンは彼から距離を取ると、誠の周囲に散乱した様々な武器を指差した。

「素人でも手軽に使える物を選んでやった。自滅しねえように、よく選んで使えよ」

小口径の拳銃からライフルやショットガン、マシンガン。どうやって使えばいいのか分からないような、ロケットランチャーのよう

な物まであるかと思えば、日本刀や西洋のサーベル、鞭やモーニングスターといった漫画でしか見たことがない物もある。

「つ、使えって言われても……」

「遠慮することはねえ。俺達が今着てる服は、次世代の防弾兵装だ。あと百年もすれば、表世界でも類似品が氾濫するはずの代物だ。並の銃弾なら、衝撃を全て無効化しちまう。まあ、ココに当たりさえしなけりゃあ、命の保障はできるってわけだ」

言いながら、ケンは親指で自分の額を指した。

誠はここに連れて来られる前に、更衣室でこの服に着替えさせられた。

首から両手足の指先まである黒い全身タイツを履かされて、その上に何の変哲もないような迷彩服を着せられた。両手にはロングググローブ、足にはロングブーツ、胸元は厚いボディアーマーを装着。これでヘルメットでも被れば、いかにもな軍用戦闘服である。

特にボディアーマーは曲者らしい。これは装着時に当人の指紋やら静脈やらを記憶させて、他人による強制解除を拒む設定が施されているようだ。

それもさることながら、こんな薄っぺらい全身タイツが何の役に立つのかというのが、甚だ疑問でならなかった。軍服を上に着ているとは言え、恥ずかしいことこの上ない。

少し股間がモゾモゾして気持ち悪いのである。

心なしかモジモジしているように見える誠を目の端に捉えつつ、「すみません、リーダー。私がついていながら……」とエリは改めて酒顛に頭を下げた。

「いや、ケンらしい実にシンプルな方法だ。ボスも止めなかったしな」

「うう、止めてほしかったんですけどぉ」

自分達を統率するボスという男が、一体全体本当に何を考えているのか、エリには量子ほども分からなかった。

「そもそも、分が悪過ぎますよ。素人相手と言っても、素手でどうにかできますか？」

誠はただの十七歳の少年。とは言え、引き金を引けないわけでも、剣を振れないわけでも、ましてや拳を握れないわけでもない。防護服も火力の如何によつては耐久性を失うこともあるし、ケンの言うとおり頭に当たればそれで終わりだ。

銃弾が彼の額を貫く。

それを考えただけで、エリはゾツとしてしまった。

そんな彼女を慮つて、酒顛は言った。

「お前も知っているだろう。ケンはな、？天才的サラブレッド？なんだよ」

そうかもしれないが、それは血統だけの話だとエリがモノローグを過らせていると、「どうなつても知りませんよっ！」意を決した誠の声がゴングとなり、戦いが始まつてしまった。

誠は、親切にも安全装置^{セーフティ}を外されているとも知らずに、自動式拳銃の引き金を引いた。もちろん軌道はメチャクチャだ。もはや数撃ちやの世界だったが、誠のデタラメな銃口が偶然にもケンを捉えた瞬間、彼は素早く右へ跳ねた。

「えっ！？」

骨格や筋肉の補助をしてくれる全身タイツのお蔭で、誠はいくら銃を撃つても肩を外さなかった。しかし訓練一つしていない彼では、

いくらやっても相手に傷一つ負わせられない。

その上ケンハ、肝心な時 誠がいけると思ってた引き金を引く瞬間に限って、回避行動を取るのだった。

この光景は、エリも今まで何度も目にしてきたものだ。

酒頭は彼女に言った。

「アイツの取り柄は、耳や鼻だけではない。放たれた弾丸を見切る動体視力。獣のようにしなやかな肉体。素早い脚力。相手の身体を穿つ筋力……。全てがノーマルの非ではない」

ヘレティックと一口に言っても、センス以外の能力は常人と然して変わらない場合がほとんどだ。覚醒と同時に基礎体力が上昇するという報告もあるが、それは劇的な変化とは言えない。覚醒因子の発現に伴って、身体能力の平均値が小さく向上しただけである。

実際、エリも《サーマル・センサー》というセンスを持っているが、運動能力などは日々のトレーニングで鍛えなければ、そこらのOLと変わらない。

しかし雪町ケンは、ずば抜けているのが聴覚と嗅覚というだけで、基礎的な身体能力も含めて人間離れしているのだった。

「奴こそが、本物のヘレティック 新たなる人類の先駆者だ」

「人の遺伝子は、強い肉体を求めた。人類は今後、人口増加による新たな苦境に立たされる。人が人そのものを疎む時代が来るのだ。もしも遺伝子にすら先見の明があるならば、彼のような者が現れても不思議ではない。強い者がだけが生き残る、それがこの世の理だ」

しかし、彼は不死身ではない。死は、一瞬で訪れる。もしも誠がケンを殺してしまったら、自分は誠を許せるのだろうか…。

エリは胸の前で、祈るように両手を組み合わせた。

彼女の肩に、ウヌバが手を置いてうなずいた。心配するな、信じ

る。彼の目はそう告げているようだった。

エリは再びケン達に目を向けた。

そんな彼が、いよいよ打って出た。

弾切れに慌てた誠が、すぐ足元に転がっていた別の銃を拾って構える。だがケンに手ごと掴まれ、捻られた。易々と銃を奪われ、捨てられる。

結局、先日のように軽く突き飛ばされてしまった。

「うぐっ！」

「オラ、もう降参か？」

誠は荒野をイメージして作られた地面を這い回り、すぐに別の銃を手にとって乱射した。

しかし、全て回避されてしまう。

「な、何で……！？」

当たらない。

銃を手持てば至近と言える距離なのに、どうして一発も当たらないんだ。

ケンも呆れていた。銃弾を人に当てるのは至難の業であっても、いくら回避していると言っても、一発くらいは掠り傷をもらうだろうと想定していたのに。

とんだ見込み違いだ。

「センスねえなあ、テメー。ホントにヘレティックだよ」

「だから、そんなの知りませんってば……！」

「思い出せよ、あの時のテメーを……」

ケンの望みは、銃撃戦による結末ではない。銃口から撃ち出され

た弾速を遙かに凌ぐはずのセンスを発揮した、誠の脚力を相手にしたいのだ。

彼の意図するところを理解している酒顛達は、事の成り行きを見守るしかなかった。

メギド博士達　研究チームは、常に誠の身体データをチエックして、センスの発動の瞬間を見逃さないように目を凝らしていた。二人の緊迫感がこちらにも伝わってきて、エリはゴクリと生唾を飲んだ。

その、直後だった。

「面白いことをやっているじゃないかい」

「「「!?!?!」」」

縁の広い黒のソフト帽を目深に被り、同じく黒いトレンチコートに身を包んだ、いかにも怪しい男が、酒顛の背後に立っていた。いつの間……。エリやウバが目を剥いていると、「絶、何しにきた」酒顛は身動きもせずに黒づくめの男　累差絶るさに問うた。

絶は長く癖のある黒髪の間髪から見え隠れする、赤く薄い唇を引き上げた。

「お前達が変わり種を持ち帰ってきたと小耳に挟んでねえ。アレが、そうかい？」

絶は、雪町ケンと向き合う少年を眼下に見た。

「…そうだ」

「使えそうかい？」

「お前の考えるようにはならんさ。彼は、普通の子供なんだよ」

「そうかい、それは残念だ。だが、雪町」」が自ら出張るとは、どうという風の吹き回しだろうねえい」

「……………」

酒顛にとって絶は、誠のセンスを最も見せたくない相手だった。近頃の彼の考えることは、付き合いの長い酒顛にも計り知れないものがある。

しかしここで彼を邪険にするわけにはいかない。組織内での火種は、少ないに限る。

酒顛がポーカーフェイスで警戒しているのを知ってか知らずか、絶はうそ寒い笑みをたたえていた。

そこへまた一人、男が入ってきた。ガタイの良い、短髪で四角い顔の男だ。

「螺葵^{ラキ}、お前もよく見ておけ。何かが起きるらしい」

「はっ」

「そうなんだろう、？大江山の暴れ鬼？よ」

「……………」

酒顛は答えない。

李螺葵^リという中国系の男は、絶の隣に並んで二人を観戦した。

その背中にエリとウヌバが睨みを飛ばすが、彼らは眼中に置かなかった。彼らが漂わせる雰囲気は異様で、奇妙で、吐き気がするものだった。微かに血の臭いがするのは気のせいだろうか。

エリ達が勘繰っていると、「そうだ、打ち込んできやがれ！」とケンの声が轟いた。

誠は銃を諦め、先日のように鉄パイプを手に使っていた。

「どんなに才能のねえ奴でも、棒振って当てられねえ馬鹿はいねえんだからよお！」

「うあああああっ！」

誠は乱暴に鉄パイプを振り抜き、ケンはそれを軽く躲しては突き飛ばした。

「煽ってるの…?」

エリの問いに酒顛が黙っていると、また一人、監督室に男が滑り込んできた。

「何をしているんだ、キミ達は!」

組織の医師　清芽ミノルだった。

酒顛はきつと反対されるだろうと考え、彼には今回の件を伝えていなかった。

「絶まで…どうしている?」

「奇遇、かな?」

相変わらず意味深な物言いをする彼はさて置き、清芽は酒顛に迫った。

「聞いてないよ、酒顛君。ここまでさせて、どうなるものでもないだろ!」

「…彼の為です」

「何…!?!」

「彼はこれから、様々なことを自分で選択して生きていかなければなりません。記憶を失い、無気力になっている彼を奮い立たせるには、荒療治が必要であると思うのです」

「だからと言って、主治医である僕を差し置いて勝手に決めていいことじゃない!　メギイド博士も、何をやっていらっしゃるのか!」

さも当然のように計器に向かう白頭翁は、椅子をギツと鳴らして顔だけを向けた。

「キヨメ、少し落ち着きたまえ。ヘレティックがこの世界で生きていくことの厳しさを、あのケン・ユキマチ自らが教えているのだ。水を差すような真似を、誰ができようか」

「しかし、セイギさんが生きていたら、こんなやり方は絶対に認められせんよ!!」

清芽は尚も怒鳴り散らした。近年稀に見る激高ぶりである。

「清芽先生、それは違います。生きていますよ、セイギさんは……」

顔をしかめる彼に、酒顛は言った。

「生きています、セイギさんは、彼の中に……」

そのセリフに、絶が反応した。彼をここへ呼びつけたメールには、雪町セイギという名は一切出ていなかった。

「……酒顛、それはどういう意」

「ん、来るかつ!？」

酒顛は腰を浮かせて言い放った。言葉尻を打ち消された絶は刮目した。

砂埃が舞う訓練場の中央で、すり剥いた膝を地面につける誠の姿がある。彼は荒い鼻息の後、ケンを凄まじい剣幕で睨みつけた。

この空気だ。この空気に、俺は気圧された。

ケンは後頭部の傷が疼くのを感じて歯軋りを立てた。対して、頬から首筋へ、冷や汗が滴り落ちる。

「そうだ、見せてみるや！ 《韋駄天》！！」

「う…あ、ああ、ああ

唸り声の直後 刹那 ケンの視界から誠は姿を消した それは0コンマ以下の世界だった もしもケンに優れた聴覚がなければ 誠が絶叫していなければ この一撃で勝負は決まっていたのかもしれない 右からの一撃を予期したケンは懸命に腰を捻って防御の型をとった 当てずっぽうのそれが功を奏したのか大事には至らなかった 正確には誠自身のスピードとパイプの振りとが噛み合わなかったお蔭だ ケンは誠の不様な体当たりを全身で食い止め 吹き飛んだ

ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

爆音の中、監督室も、通路から眺めていた組織の構成員も、全員が度肝を抜かれて唖然となっていた。

見たことがある。聞いたことがある。間違いない。

最速にして最強のヘレティックと恐れられた男のセンス 《韋駄天》だ。

「リ、リーダー…、アレがあ…？ 昨日よりも、ダンチに速いわよ！」

エリが確かめると、酒顔は深くうなずいた。

「そうだ。ケンの父親 雪町セイギさんの《韋駄天》だ…！！」
「あの一瞬で後ろを取ったのか！？」

メギイドも愕然としていた。素人目で見れば、《韋駄天》の前覚醒者 雪町セイギのように、見事なセンスの発動だった。

動揺を隠し切れない一同の中で、絶だけは残忍な笑みを満面に浮かべていた。

最高のプレゼントじゃないか。

口中でそうつぶやきかけると、清芽が身を乗り出して叫んだ。

「セイギさんはこんなものじゃないつ、まだ来ますよ！」

誠の体当たりにより、二人は二手へ弾き飛ばされていた。

ケンは一瞬危険を感じ、素早く受け身をとって立ち上がり、直ちに身構えた。

腕が痛くてだるい。まるで重機で殴られたようだ。折れてはいないが、ヒビくらいは入れられてしまったかもしれない。

一帯に立ち込める塵芥のカーテンで、視界がほとんど失われている。さらにはそのせいで嗅覚も役に立ちそうにない。やはりここは、聴覚頼りだ。

「テメー……、やりやあでできるじゃねえかよ」

誠はいよいよもって自らのセンスを自覚した。

足の筋肉が突然大きく膨らみ、ぐつぐつと沸騰したかと思うと、途轍もない激しさで弾けたのである。すると足がほとんど勝手に、ぜんまい仕掛けのロボットのように回転し、一瞬で相手との間合いを詰めた。

身体は固くなったような感覚を覚え、動体視力も通常より数百から数千倍と思える速さで機能した。自分以外の時間が止まったような世界を目にした。内臓では肺や心臓が奇妙な動きをした気がする。少し吐き気がするはそのせいかもしれない。

「コレが……センス……コレが……」

勝てるかもしれないと、誠は素直に思った。

「仕返してやる」

途端、地べたを激しく蹴りつける音が鳴った。

後ろ いや 左だ 粒子を跳ねのけて鉄パイプの先端を突

り抜いた

ええええええつ！！」

と誠が地面に崩れ落ちると、また一つ大きなホコリが舞った。

清芽が酒顔を責めようと顔を向けると、
「ケンっ、やり過ぎよ！」

「殺すつもりなの!?」 エリが先にマイクに向かって叫んでいた。

ケンが最も嫌いな音　女のヒステリックな金切り声がスピーカーから響く。彼は左頬から滴る血を拭くと、血みどろの右手でもむろに遠くを指差した。

「コレっ、勝手にいじるな！」

エリはメギイドが叱るのを無視して、コントロールパネル上のボタンを押し、砂煙を排気口から強制的に除去させた。訓練場の端にだけ煙が充満して、ケンの示す方向が露わになっていく。

誠が立っていた。

血塗れの身体を、曲がった鉄パイプで支えながら、辛うじて立っていた。

しかし出血量に対して、傷がそれほど深くないように見える。

「《韋駄天》の最大の特徴の一つは、瞬間移動を思わせる亜光速の脚力。そしてもう一つは、センス発動中の肉体の強度が、鋼のように硬くなることだ」

「それに加えて、劇的なスピードの再生能力もある。あれからもう一度、セイギさんのデータを読み返したよ。あの人にもその能力があったが、それは《韋駄天》発動時だけだった。活性化した覚醒因子によって機能するんだ。つまり疾走状態でなければ、急速な回復は無い」

「えっ、えっ？　ってことは何？　本当にマズかったのは…！？」

酒顛と清芽の解説を聞いて、エリは辟易した。

あんな子供を相手に、ケンが本気になっている。

彼が傷をもらうのを見るのも久しぶりだったのに、これじゃあ「そうだ。ああでもしなければ、ケンがやられていた」と酒顛も苦笑いだった。

絶は細く切れ長な双眸を目一杯開いて、癖のある長髪の隙間から

のぞかせていた。

「面白くないが……次で、決まるねえ」

彼の一言で緊張が極限まで高まった。

それに答えるように、ケンはその場で地表スレスレまで股を割り、身を低くして上体を右に捻った。

「ちょっと待ってよっ、
ひょうふう
 颯風
 までやる気なの!？」

いくら何でもそれは誠が危険過ぎる。

エリが再びマイクに口を近付けるが、酒顛は彼女のアゴから頬を掴み上げて食い止めた。

「ひーはーっ!？」

「オオオアアアアアアアアアア——
——っ!!」

誠が叫んだ。絶叫よりも野生的な、猛獣の咆哮のようだった。

「うっせえっ!!」

ケンが咄嗟に、上半身をギョルリと左へ回した瞬間、「酒顛。中々良い見世物だったよ。大切に育てることだね」鈍い音の後、花火のように天井近くまで打ち上げられた誠を背に、絶と螺葵は監督室を後にした。

カポエイラのような円運動からの素早い逆さ蹴り上げ。

ケンの放ったそれは、超高速度の誠を確実に捉えていた。本来の連続的な動きを一撃に込め、**颯風** という技は終わった。

落下した誠は不発弾のように粉塵を生むだけだった。衝撃は硬質

化した肉体が耐え忍んで、彼の身体を無残な有様に変えることはなかった。

「い、生きてるわよね!？」

すぐに訓練場へ救護班が駆けつけ、誠の脈拍を確認した。
両腕で大きな丸を作る彼らに、エリは深く胸を撫で下ろした。

「まあコレで一件落着ですけど、さっきの人達って…」

あつさりとして切り替えの早いところが、彼女の美点である。
いつもの調子に清芽は苦笑しながら、先程の黒ずくめの男について話した。

「彼の名は累左絶。？更地のルイーサ？の異名を持つ、組織の掃除屋だよ」

「ああー。私達実行部隊の事後処理してくれてる作戦処理部隊ですリセッターか。どーりで気色悪い感じがすると思っただあー」

「まあね。名目上は事後処理と言っても、実際は実行部隊の不始末を一手に請け負う汚れ役だ。荒んだ仕事だよ」

「敵基地施設や死体などの、裏世界に関する痕跡という痕跡を抹消。他は敵残存兵力の回収、尋問…。絶の奴は、アレを好きでやってい
ると言うから驚きだ」

酒顛は肩をすくめた。

組織は、ここマリアナ基地を中枢として、世界各地に支部を置いている。各支部の活動の流れも、本部のそれとほぼ同じだ。諜報部隊が情報を得て、それを精査した司令部が作戦部の実行部隊を使って何らかの作戦を遂行させる。

しかし実行部隊だけでは、一般人の目にその姿を晒しかねない。

だから、事前に現地で活動している諜報部隊と作戦処理部隊が彼らのバックアップをし、隠密行動におけるリスクを軽減するのである。また、実行部隊の活動中は、周囲への警戒に余念がない彼らでも、その性質は全く異なっている。実行部隊の作戦遂行が確認されると、処理部隊は警戒態勢を解除し、作戦現場のあらゆる痕跡を消し去っていく。諜報部隊は処理部隊が引き上げるまで情報を操作し、表世界の住民に紛れ込んで姿を隠していく。全てを作戦前の見慣れた風景へと変えるか、事故や自然現象に見せかけて更地に変えるかして、作戦は完遂となる。

だが、全ての実行部隊を統率する立場にある酒顛でさえも、尋問後の捕虜の行方は不明だ。

組織の暗部が、どこか知らない場所に監獄を用意し、そこに彼らを永久に収容しているという噂さえ耳にするが、真実は定かではない。

そういう活動に絶は絡んでいるのだろうか。

酒顛は物悲しくなった。

「セイギさんが生きていた頃は、俺と絶と、先生も一緒にチームを組んでいたんだがな…」

「えっ、先生も前線に出てたんですか!？」

「…ハハハ。実はね、そういう時もあつたんだよ。怖くなって離れたんだけどね」

「ああっ、だから私の剣術指導もして頂いていたんですね!」

「隠していて悪かったね。ああだけど、僕の家系が特有の流派を守っているのは本当だよ。キミに教えた技術は嘘じゃない」

「そんなことは分かってますよ、だから私はこうして、トップチームにいるんですから。先生の教えの賜物です。それでも、へえー、知らないことつてあるもんですねー!」

エリは甚く驚いた。

彼女の知っている清芽ミノルとは、いつもニコニコ、徹頭徹尾優しさでできている本部医療班のリーダーだ。怒ったところはもちろん、今日まで声を荒げる場面にも立ち会わなかった。医術の腕前は確かで、センスの《体内透視》を使つての切開や縫合は、誰にも真似できない、精確かつスピーディーなものである。

エリは剣術の達人として、組織では有名だ。その彼女に剣を教えたのは清芽だが、元実行部隊所属だったとは一言も聞かされていなかった。

しかも、雪町セイギと酒顛ドウジが揃っていたチームと言えば、米ソ冷戦終結間際の、裏世界にとつても慌しい時代に、組織の一番槍として活躍した歴代でもトップ・オブ・トップのチームだ。酒顛からはセイギの偉功ばかりを聞かされていたので、清芽や絶の話を耳にしたことが無かった。

「セイギさんは、俺達をつなぐ大切な糸だった。その糸が切れてしまい、今では物の見事にバラバラだ。特に絶と話したのは、何年ぶりだろうか」

ある任務の中、雪町セイギは殉死した。

それにより、第一実行部隊 通称・日本人部隊は事実上の解散を余儀なくされた。

酒顛はセイギの信念を受け継ぐべく前線に残り、絶は処理部隊に志願、清芽はショックの余り落胆していたが、本部の専属医療班のリーダーとして復帰し、多くの仲間を救ってきた。

そうして刻が移ろい、再び《韋駄天》を持つ少年が現れた。それに引き寄せられるように、また彼らは一堂に会することになった。

エリは何か嫌な予感がして、自分の腕を扼した。ふと訓練場を見下ろすと、ケンが何やら叫んでいた。電子スクリーンをクロースアップして音声を受信すると、『おい、データは取

れたんだろうな！』とケンの割れた声が響いた。
メギイドは慌てて応答した。

「あ、ああ、ありがとうユキマチ、礼を言う。間違いなくマコト・サガワのセンスは、《韋駄天》であると判断された。彼が精進すれば、お前の父さえも超えていくだろう！」

『…けんな』

「ん…？」

ケンは鋭い糸切り歯を剥き出しにして憤慨していた。

『ふざけんなよ、テメー。何浮かれてやがんだ。心が痛まねえのか』

…！？』

「な…」

狼狽するメギイドに代わり、酒顛がマイクを握った。

「ケン、撤回しろ！ 博士は研究者としての意見を述べたまでだ。この方がいなければ、今日の俺達は無かった。お前のセンスを陰で支えてきたのは博士なんだぞ…！」

『学者だろうが何だろうが、知ったこっちゃねえんだよ。メギイドアンタには前々から言っておきたかったことがあるんだ。それを今ここで言っというてやる』

ケンの姿がセイギの面影と重なって、メギイドはゾツと身の毛をよだたせた。

ケンはさらに追い込むつもりで宣言した。

『今度俺達へレティックをモルモットみてーにしゃがったら、殺す…！…！』

「ケンっ!!」

「い、いやっ。いや、良いんだ…っ」

年老いた科学者は酒顛の肩に手を置いた。「しかしっ!」と彼は反論しかけるが、マイクに向かって青年に伝えた。

「ユキマチ。今の言葉、しかと胸に刻んでおく。すまなかった…」

彼は深く頭を下げ、謝意を示した。

ケンは不満顔のまま訓練場を後にした。

「博士、アナタが謝ることではありませんっ」

「いや、彼は正しい。今回は私の口が過ぎたのだ。私自身がヘレテイックであるというのに、研究に没頭するあまり大切なことを忘れていた。キミ達に申し訳が立たん…」

「頭をお上げください。最近のケンの口悪さは目に余ります。ハツキリと言って」

おもむろに顔を上げたメギイドは、「酒顛。今の場面では、セイギ・ユキマチでも同じことを言っていたはずだ」

酒顛はグツと詰まった顔になり、語次を呑み込んだ。

「その時キミは、今と同じ言葉で諫めることができるか。人権を軽んじた私が言うべきことではないが、個人や立場の違いで、正しい物言いへの受け取り方を変えるべきではない」

項垂れる大男に、清芽も擁護するつもりで言った。

「酒顛君、キミも間違っではないよ。ただ、彼の怒りはいつだって正当なだけなんだよ。そして彼はいつだって、言葉だけでなく、

行動で示してきた」

そこへ、「持ち上げ過ぎな感じもありますけどねー」と女が口を挟んできた。

「エ、エリくん…」

「だって、私やウヌバみたいに、ケンのお父さんのことを知らなかったら、やっぱり今の言い方は間違ってるように聞こえますもんね、ウヌバ？」

急に話を振られたウヌバは、「…分からん」と首を横に振った。酒顛とメギイド、どちらの意見が正しいのかが分からないのか、そもそも日本語が分からないのか、どちらだろうか。

「ウヌバ。どんなに分からなくても、女子の言うことにはとりあえず相槌を打つとけばいいんだからね」

「こう力？」

ウヌバは？相槌を打つ？というイディオムの意味を思い出し、ぎこちない首肯を試みせた。

「そう、それぞれ。じゃないと彼女できてもすぐにフラれるよ」

今度は？彼女？という言葉がピンと来ない。ガールフレンドという英語に直してみても、あまり具体的には理解できなかった。

「でもね、適当にやってばっかいると、話聞いてないじゃんってなるから気を付けてね」

「…？」

「相槌はね、適当にやるの。小さじ少々くらいの感じ」

「コち…?」

?小さじ?は知っている。しかし、?少々?とは何だ。どのくらいだ。

「もしくは小指の爪の甘皮くらい」

「コユ…アマ……?」

ウヌバ、パンク状態である。自分の小指を眺め、何故かいきなり舐めはじめた。

「甘くない、甘くナ、アマカ…コツメ……!」

「分からない? じゃあねえー、ダウンジャケットからフェザーがびよこんと飛び出してるくらいの」

「やめてやれ。遊び過ぎだ」

ウヌバは聖書 大型国語辞典を抱え、煙を上げてオーバーヒートしてしまっていた。

* * *

訓練場区画から出た絶と螺葵は、エレベーターに乗って移動していた。

「絶さん。今の少年のセンスは…」

「ユリオン と共に散った男が、最強の名を欲しいままにした史上最高のセンス 《韋駄天》さ」

「そのスピードたるや、音速を越え、亜光速に匹敵するとまで言われる、あの…?」

「そうさ。あの情報屋風情に感謝する必要があるだろうなえい」

絶はエレベーターの壁に背中を預けると、片手で自分の顔を覆って言った。

「アレは私から見ても異常なセンスだよ。敵の研究所に侵入したわずか十秒後には、その中枢部で爆発が起きるんだ。私達の仕事なんて何も無かった。任務開始と同時に終了なんてのはザラだった……」
「……とんでもない人がいたものですね」
「アレを経験して以来、私の感覚は麻痺しっ放しさ」

感傷に浸っていた彼だったが、唐突に顔を擡げると、螺葵を睨んだ。

「ところで、そのバグについて分かったことはあるのかい？」
「はっ。目下のところ……!?」

絶は自身の黒いソフト帽で螺葵の顔を押さえつけると、拳銃を彼の口に捻じ込んだ。

冷たい銃口が舌に当たり、螺葵は呼吸さえまならなかった。

「か……かはっ……!!」

「さっさと野郎の首持ってきやがれよ。野郎の存在は、いずれ私達の弊害になる……!」

「……そ、早急に、やらせます……っ」

「テメーもやるんだよ。ミンチにされなくなかったらねえいつ」

「ゴウン……、ゴウン……」。

エレベーターで無機質な音が、しばらく静寂をかき回した。

〔二〕（後書き）

T・Fです。

昔、『8マン（エイトマン）』というアニメがあっただんですが、その主人公は仮面ライダーのように改造されて、超高速で走ったりする能力を持っていました。

それが早河誠の《韋駄天》の着想を得るきっかけになったかは分かりませんが、多少は影響を受けているかと思います。

あとは、私が生涯最も大好きだと言える漫画『烈火の炎』の敵キャラが見につけていた魔導具「韋駄天」の影響もあるでしょうね。

また、「高速の足」というのは、小さい頃からの憧れでもあります。私は運動部にずっと所属していたにも拘らず、中学生まで鈍足で、高校生になってやっと人より速く走れるという実感をえました。

それでもやっぱり、足が速い人には憧れました。

速ければ、あんなことやこんなことが……それが超能力であれば、もっと……

そんな妄想の結果が、コレですw

色んな戦闘シーンが浮かんでは消えていきます。忘れないようにメモを取って、何度も頭に思い描いています。

最後まで書き切れたらいいなあ。

まだまだ始まったばかりです。

今後をお楽しみに。

それでは今日もこの辺で失礼しますね。

では、T・Fでした！

良いお年をーっ！

〔三〕（前書き）

あらずじを少し。

人間ではない異端的な存在　ヘレティックへと覚醒した早河誠は、その現実を受け入れられず、さらには失った記憶とあるべき居場所に思いを馳せ、苦悩する。

そこへネイムレスの隊員である雪町ケンが、組織からの無傷での脱退と自由を懸けて決闘することを申し出た。

受けて立つ誠は、超能力　センスの中でも最強と謳われる《韋駄天》を発動し、その力の強大さを自覚するも、一敗地にまみれることとなった。

再び失神してしまった誠は、約束どおりケンの命令に従うこととなったのだった。

(三)

中学生にもなると、古い木造アパートでの三人暮らしが次第に辛くなってきた。

洗濯物を干すにも出窓だけじゃスペースが足りないし、外出時間が重なる朝は、狭い洗面所を取り合うのも日常茶飯事だ。

意地悪な大家が真下に住んでいて、コップを落としただけで騒音だ何だと言いがかりをつけては、下から床を突いてくる。その上、少し笑うだけで隣人に壁を叩かれる始末……。

ひどく、とても酷く、肩身が狭い。

そんな話を友達にすると、大阪人はイジワルが多いのか、ベタ過ぎと笑われて、貧乏芸人扱いされる。東京ならと考えたが、あまり関心を持たれないかもしれない。

温度差があり過ぎる。

でも、確かにベタかもしれない。

父は大手グループ傘下の中小企業に務めるサラリーマン。

母はスーパーのレジ打ちなんかをしている非正規雇用労働者^{パートタイマー}。

息子は地元の中学に通う普通の受験生。

大阪に越してきて八年ほど経つが、経歴が変わったのは息子

早河誠だけだ。

他はあまり変わらない。大阪での、厚かましい人々に囲まれた生活に慣れたくらい。

そのくらい。

その程度。

引越したての頃を思えば、大したことはない。

ところが夏の終わりに、母が商店街の福引きを当ててしまった。

それも一等　？　ヨーロッパ七日間、ペア旅行券？を、狙って当てたのである。

母は、節制節約の日々に、神様とか仏様とかそという類の何かが

くれた御褒美だと浮かれていた。これで宝くじも当たればと言ってしまうところが、過ぎた貧乏性の痛いところだ。

その夜、色々と話し合った結果、父と母がまとめて有給を消化する形で、誠一人を置いて楽しんでくることになった。

誠に異論は無かった。

当日の早朝。何の用事も無い日曜日。

誠は寝巻きのスウェット姿で彼らを見送ることになった。

『本当にゴメンね、マコト。生活費はアレで足りると思うから、大事に使ってね』

玄関先で母は、テーブルの上に置いた茶封筒と、もしもの時の為の預金通帳、そして判子を指した。茶封筒の中には、およそ十名の福澤先生が納まっている。それは誠が今まで手にしたことのない金額だ。

『変な物は買うなよ』

何を想像したのかは知らないが、父はニヤリと笑う。

『…いや、変な物ってか……』

誠はずっと我慢していたことを、思いっきり指摘した。

『何でヨーロッパ旅行なのに、？今からワイハー行くんでシクヨロ？みたいなアロハ姿！？』

二人共、色違いのアロハシャツに短パン、サンダル、頭にはサン

グラスを掛けている。

『…変かしら?』

母は父と顔を見合わせる。

父は早速欧米気取りで、大げさに肩をすくめた。

『それに、そのキャリアケースは何だ! どこで売ってた!』

これもお揃いだった。わざわざこの日の為に用意したらしいが、問題はそのカラーリングだ。小学生の女の子が描いたような、明色をふんだんに使ったド派手な一品だ。

光で照らすとチカチカして、それだけで光過敏性発作を起こしてしまいそうだ。

『良いでしょう、ヴィヴィッドって感じで』

『程があるわ! もっと人の目を憚れよ!』

そうツツこむと、父は真面目な顔をして諭すように、『誠。他人の目を気にする年頃なのは分かる。斯くいう父さんもそうだった。けどな、誰かを気にしてばかりでは、いつまで経っても成長しないぞ』

『この流れでよく説教できるな!』

『?アートは勇気?なんだ。勇気を持て、恥じらいを力に変えろつ、誠…!』

『どこの大学のキャッチコピー!? アート関係ねえし!』

コイツら浮かれ過ぎて、いつも以上にボケてきやがる。これが海外旅行の魔力か。

誠はガツクリと肩を落とした。

普段から明るい二人だが、本当に嬉しいのだろう、ボケに歯止めが利いていない。

『とにかく、アロハであの美しい景観を破壊することだけはやめてくれ。日本の恥だ』

父はまた真剣な目をたたえて、『誠。お前は知らんだろうが、アロハで飛行機に乗ると無料なんだぞ』

『それで騙せると思ってんの！？　すげえなアンタ！』

頑なな息子に、母は溜め息混じりに問う。

『そんなにアロハシャツはダメなの？』

『むしろ頑なにアロハに拘る理由が分からねえよ。いつもよりちょっと背伸びした感じの服にすればいい話だろ。シックな感じのさあ』

『じゃあ、ガ　様みたいなの？　今から着替えるとなると時間がかかるわ。どうしよう…』

『シックつつつたる！　てか衣装あんの！？　あるならちょっと見てみたいわ！』

生肉は困るが、カエルとかならお目にかかりたいと思ってしまった。

『それなら父さんは、フ　ディ・マーキュリーで行こうかなっ』

肉親が、上裸にサスペンダーという絵面。コートの中がスッポンポンという格好と同じに思えるのは誠だけではないだろう。ただの変態の所業だ。

『何でコスプレのノリになってんだよ！ もういいつ、アロハで行
けよ！ ただし息子の名前だけは口にしてくれるなよ！』

すると二人は、上手く丸め込めたぞというような顔をして親指を
立てるのだった。

『ったく。頼むから、あんまりみつともない真似しないでくれよ。

ハメ外したい気持ちは分かるけどさ』

『ホント心配性ね』

『あのなあ』

『分かった。気を付けような、母さん』

母はハイハイと肩をすくめた。さらに、不満顔ついでに愚痴を漏
らした。

『まったく、それにしても融通が利かないわね。期間限定で二人だ
けだなんて。ウチは三大家族なのよ！』

『しょうがないだろ。学校のテストは受けないといけないし、受験
だって控えてる。それに二人は新婚旅行してないんだろ』

『したわよ、北海道』

『国内じゃん。それって新婚旅行って言うの？』

『何言ってるの。日本人で初めて新婚旅行したっていう坂本龍馬も、
慎ましい国内旅行だったじゃない。それに比べたら、沖縄とか京都
とか伊豆とか、かなりの豪華プランよ』

『今じゃそんなの全部、修学旅行で行けるって。そもそも、いつの
時代と比べてんだよ』

グダグダと揚げ足をとる息子に、母はいよいよもって言っ
てしま

『お金が無かったのよ、しょうがないじゃない！』
『母さん。それ、トドメ刺してるから』

誠がアゴでしゃくる方を見ると、玄関の隅で背を向けながら膝を抱える夫の姿があつた。

『稼ぎが少なくてゴメンなさい稼ぎが少なくてゴメンなさい稼ぎが少なくてゴメン』

『わわわ！ お父さんゴメンね！ 国内旅行も楽しかったわよっ』

グスンと慰められてようやく立ち上がった彼は、『母さん、マコト』と急に改まって二人の顔を見渡した。隆とした顔付きのまま、彼は言つた。

『来年の春、父さんまた異動になつた』

『えっ！？』 『そんな…！』

『安心しろ、東京だ。給料もポストも上がるんだ』

母はそれに口を覆つて驚くと、息子の目も憚らずに、『おめでとうっ、アナタ！』と頼れる夫に抱きついた。

しかし息子はこの急展開に動揺を隠し切れず、『え、でも、高校は…？』

『前に一緒に住んでいたお婆ちゃんの家があるだろう。その近くに新しい家を建てようかと考えている。念願のマイホームだ。お前はその近辺の高校にでも通えばいい』

『マイホーム！ もうっ、お父さん大好き！』

『こ、こらっ！』

ハグの次はキス。

すっかり欧米モードへ突入している呑気な彼らに、誠は吐き捨てた。

『待てよっ、そんな勝手なこと言うなよ！』

『マコト、何怒ってるの？ アンタだって東京に帰りたいって、よくグズってたじゃない。???ちゃんと離れ離れはイヤだあって』
『それはもつと小さい頃の話でしょ!? 今じゃ、こっちの方が友達多いんだよ！』

ようやく慣れてきたのに。向こうもこちらの言葉遣いに慣れてくれていたのに。

完成間近だったパズルを物の見事にひっくり返された気分だ。

『じゃあアンタだけ、この狭いアパートに残るの!? 今日までセコセコとやりくりしてきたのは全部この時の為だって、アンタも分かってるでしょ！』

分かっている。知っている。

母は早朝から弁当と朝食を、パート帰りでどんなに疲れていても夕飯を作ってくれた。

父も営業で疲れているのに、母の愚痴をよく聞いて、マッサージなどをしていた。

誠だって、料理はできないが、掃除や洗濯は進んでしていた。

そういう風に、早河家の歯車はスムーズに回っていた。

きっと稼ぎが特別少ないわけじゃない。おそらく高校の費用とか、将来への貯蓄とか、それこそマイホームの資金の為に節約を重ねてきたのだろう。

そういう二人の意図を、誠は知らないわけじゃなかった。

でも、それとこれとは別問題だ。子供にも子供の、譲れない事情

がある。

『…マコト、お前には苦勞をかけている。それはすまないと思っている。だからちゃんと上司と話し合ってきた。次の転勤からの三年間　お前が高校を卒業するまでは異動させないでほしいと』

『そんなの口約束だろ！　そんな話をして、心象悪くしてたら世話ねえよ！』

『マコトっ、口の利き方！！』

『うるさいっ！！』

ついカツとなった母は、反抗期の息子に手を上げようとした。誠は身体を強張らせたが、父が止めてくれた。彼は誠の頭に手を置いて、優しく撫でた。

『分かった。もしもその三年の間に異動が決まったら、その時は俺一人が行く』

『単身赴任ってこと？　そんなの私が嫌よ！』

本当にグズっているのはどちらだろうか。母は口を尖らせて父を困らせた。

父も呆れるほど頑固で、『家長としてマイホームは買う。そこに家人がいなのはおかしいだろ』と理屈を並べ立てて、彼女を宥めすかそうとする。

けれど、『大黒柱がいない方がもっとおかしいわ』と彼女は引かなかった。

『俺の母さんも歳だ。あの人は強情だから、昔みたいに一緒に住むつもりはないだろうが、もしもの時には誰かがいてくれないと困る』

『そんなこと言われたら、何も言えないじゃない。ズルいわ…』

『すまん』

母と、姑に当たる父の母　いわゆる誠の祖母とは悪い仲ではない。東京で暮らしていた頃は、よく二人で買物に出かけていた。両親を知らない母にとって、祖母は肉親代わりだったのだ。だから母は、祖母の世話をするのに然程の抵抗は無いようだった。

『マコト、お前もよく考えておいてくれ。進学のこと、将来のこと、友達のこと、生活する環境のこと。お前にも色々あるだろうが、しっかりと自分で決めてくれ』

『勝手だよ、そんなの…』

『どうしても決められない時は、俺を殴ってくれていい』

そう言つて、痛みに強いとは思えない貧相な頬を向けてくる。

人差し指でそこを指して妙にアピールしてくるので、『今でもいい?』と誠は拳を構えた。

海外旅行などという、いかにも楽しそうなイベントへ逃避行される前に、思いつきり発散しておきたかった。

しかしそれを阻止したのは、やはり母だった。

『ダメ。せつかくのヨーロッパを、顔の腫れた人となんて一緒に歩きたくないわ』

母親譲りの不貞腐れ方で、『何だよ、それ…』と誠は俯いた。

しようなない子ねと呆れる母だったが、ふと左腕に巻いた腕時計を見ると、『あらイヤだ!　お父さん、飛行機乗り遅れちゃう!』

と慌てて玄関を開けて、キャリーケースを運び出した。

『ホントだ。マコト、カギ頼んだぞ』

『ホオラ、お父さん急いで!』

そそくさと出かけていく二人を、誠は呆然と眺めていた。
アパートの階段を降りて道路に差しかったところで、母が振り返って手を振った。

『マコトっ、中間試験だからって気を抜いちゃダメよ！　じゃあね！』

声が大きいきと彼女を窘める父も、にこやかに手を振る。

誠は独り取り残されてしまう不安を押し隠しながら、ぎこちない笑顔で手を振り返した。

いつてらっしゃい、気を付けて。

そのたった一言を言えなかった。

早朝でなければと悔やんだのは、それから七日後のことだった。

* * *

「御両親のことを思い出した！？　スゴいじゃない！」

基地内部を降下中のエレベーターに、驚喜した声が弾んだ。

すると、鋭敏な聴覚を持つ雪町ケンの顔が舌打ちと同時に歪むので、小心者の早河誠はまた怒鳴られるんじゃないかと気が気でならなかった。

「どんな人だったの！？」

苛立つ彼の様子を分かっているくせに、エリ・シーグル・アタミは大袈裟に問い質した。

「で、でも、声と雰囲気だけです。何を話したかとか、そういうのは思い出せません」

「それでもいいじゃない！　ね、教えて！」

「えっと、父はひょうきん者っぽいけど、優しくて強そうな人でした。母は少し頑固だけど、明るくて家族想いの人でした。逆夢じゃなかったら良いなって思います」

「逆夢なんかじゃないわよ、大丈夫よ！」

「でも、夢は夢ですから。本当にそうなのかって聞かれたら、自信がありません」

「そんな、もっとポジティブに考えようよ！　ね、リーダー？」

リーダー　酒顛ドウジは、うんうんと親戚のオジサンのような態度で微笑んだ。

「そうだぞ、マコト君。記憶が戻るのも、そう遠くないかもしれないぞ」

楽天的だと、誠は思った。

昨日のケンとの一騎打ちの後、夢で少し見ただけに過ぎない。ようやく思い出したのが自分自身のことではなく、両親の声と雰囲気だけというのは、何とも言えない心地悪さだ。

結局、空っぽなままの自分に、誠は憂鬱にならざるを得なかった。少年の様子がおかしくなったのを察したのか、酒顛は大きな手で彼の肩を叩いた。

「思い出せた。コレは大きな進歩だ。思い出せないということではなかったのだからな」

赤の他人らしいセリフだ。

誠はまた、ひねくれた。

そうこうしていると、エレベーターがどこかに到着した。階層表示を見上げると、？が点灯していた。ドアが開くと、見覚えのある

光景が広がっていた。

そうだ。

拉致された日に、ケンに追い詰められて格闘した、コンテナばかりある、確か「ポートエリア」、ですか？」

「潜水艦があるって言ったわよね。今日はそれに乗って、お・出・か・け」

「え、ああ…… え？ 本当にあるんですか！？」

冗談だと思っていた。潜水艦なんてそんな物、お目にかかれるわけがないと高を括っていたのに……。

エリと酒顛は、驚く彼に笑みを返すと、「ホラ、アレよ」と指差した。

コンテナエリアを越えた先に、波止場が広がっている。しかしそこに船はなく、代わりに丸く細長いミサイルのようなフォルムの、黒く巨大な物体が二基ほど浮かんでいる。

オーバーテクノロジー

「ヘレティック技術の粋を結集させた、夢の超次世代型潜水艦 D E M 2 1 。熱核融合炉搭載のコレさえあれば、マリアナ海溝もス〜イスイ〜」

「D……？」

「DEM っていうのはね、？ Deus ex machina

機械仕掛けの神様？の略で、目視でもレーダーでも捉えられない御都合主義なステルス・システムの名称なの」

「DEM は、この潜水艦や輸送機、そしてここ 基地そのものにも採用されている。DEM のお蔭で、我々は表世界にバレずに暮らしていただけるのだ」

機体や基地の外周を周囲と同化、及び擬態させる迷彩機能。^{カムフラ}

内部の温度を漏らさず、表面の温度を周囲と同化させる同調機能。^{シンクロ}

電磁波を吸収・屈折させる対索敵機能。
アンチ・レーダー
サイレント

他、消音機能などを含めた、複合的ステルス・システムを D E M と呼称している。

もちろん高次頭脳を持ったヘレティックが開発主任である為に、理論の構築に時間を費やされることはないが、その開発には莫大な予算が必要となる。

故に、各地の支部を含めても、潜水艦は五基ほどしか造られていない。内、最新鋭の D E M を搭載しているのは、この一隻だけだ。

「絶対に見えないんですか？」

「見えないわよー。今は待機状態だから見えてるけどね。あ、詳しい話はメギド博士とかに聞いてね。私達実行部隊は、そういう科学的な話とは無縁だから」

「それって、覚えられないだけじゃ…」

いくらか話して、誠はエリのことを大体分かってきた。

彼女、見た目ほど理知的じゃない。結構場当たりで物事に取り組むタイプだ。

だが、「実はそうじゃないんだ。組織の存在目的を思い出してみてくれ」と酒顛が彼女をフォローする。

誠は拉致二日目に知らされたトンデモ話を想起した。

「世界の…ゆるやかな変化…と、豊かな進歩　でしたっけ？」

「そうだ。現時点での我々の科学力は、表世界のおよそ百年先の技術だと言われている」

「百年でこんな物を作るんですか？」

「研究者の思考や成長が低速したり、余計な混乱が起きて止まらない限りね」

順調に科学が進めば可能　ということらしい。

でも、余計な混乱とはどういう意味だろう。

酒顛は親切な人なのか、そんな誠の疑問を先回りした上に、噛み砕いて説明してくれた。

「もしも最前線で戦う我々が、どこぞの国の軍事機関に捕らえられたとする。すると彼らは、物珍しい能力を持つ我々に自白剤を使って、情報を引き出そうとするだろう。その際にこちらの技術が漏洩すれば、それを必ず利用して独自の兵器を開発する。それを巡って、先進国の間で戦争が始まってしまうということは容易に想像できる。この世の必定だからな」

「表世界の科学者も馬鹿じゃねえ。ちょっとした発想を提供するだけで、研究スピードが飛躍的に向上するなんてのはザラにある」

潜水艦の内部には、なんと輸送機がすっぽりと納まっていた。キヤットウォークを渡って、その輸送機に乗り込んだ。

内部は電車一両のスペースよりも少し広いくらいだ。縦座席が両サイドに並び、前方の扉の向こうには操縦席がある。至極単純な作りだ。

誠はエリに促されて座席に腰掛けると、「いくら？世界の為？と言ったって、そんな危険を冒すだなんて……」

「本来、我々裏世界の人間は、表世界の支柱であると同時に、抑止力でもなければならぬ。しかし？^{REWBBS}国境なき反乱者？の中には、安易にも自分達の技術力を、表世界に売り込もうとする動きが多々見受けられる。彼らは、表だ裏だという概念が希薄な代わりに、金銭欲が旺盛だ。また何より、^{マイノリティー}少数派にありがちな精神的な抑圧を経験してきた為に、力を手にした途端に自己主張が強くなる。彼らのエゴは、世界を容易に狂わせるほどの影響力があるのだ」

「それを止めるって言うんですか」

「止めている、全力でな。その為に今も多くの犠牲が払われ続けている」

「テーマは十七年間、その犠牲に守られて、のうのうと生きてきたってわけだ」

少年には理無い話で責めつけるケンに、「そんな言い方やめなよ」とエリは叱った。

どうしてこんなに機嫌が悪いのかは不明だが、彼はフンと誠の反対座席に座った。

いつになく肩身の狭い思いをする少年は、「ボクは、どうすればいいんですか…？」誘われるままに搭乗したが、そろそろ行き先も含めて多くを知りたい。

「キミは今現在、ケンとの勝負に敗北した為に、強制されてこの場にいる。とは言え、我々はキミの人生を第一に考えたいとも思っている。だが実際、キミにはこう言っておきたい」

そう言つて酒顔は、厳つい丸坊主のてっぺんを少年に向けた。いきなり何だと腰を引かせる彼に、巨漢は力強く言った。

「？世界の為？に、キミのそのセンスを行使してほしい…！！」

彼は頭を下げた。大の大人の男が、記憶を失った弱々しい少年に希っているのである。

「ボクの、センスを…？」

「キミは極度の興奮状態であまり覚えていないだろうが、キミのその足は常人のそれを遥かに凌ぐ力を秘めている。我々はそのセンスを、《韋駄天》と呼んでいる」

「《韋駄天》…」

「足がとても速かったとされる神様の名前ね」

仏舍利 釈迦の遺骨 を盗んだ捷疾鬼と呼ばれる足の速い鬼を、それ以上の俊足で捕らえたという言い伝えが残っている、盗難除けなどの神である。

ケンの父 雪町セイギは、誠以前にこのセンスを発動していた男だ。彼は韋駄天の伝奇を髣髴させる光のごとくスピードを、たった二本の足で実現させていた。

その場に立ち合い、彼と幾度も戦場に赴いた酒頭は、誠の持つ力足が、どれほど重要かを理解しているのである。

「キミの足は武器になる。どんな豪腕をもってしても太刀打ちできない、最速にして最強の武器だ」

「そんなこと、真面目な顔して言われても…。それに、アナタ達の言う武器って、そこにある拳銃とかのことでしょ？ ボクは、そんな物にはなりたくないです…」

彼らが装備するホルスターに納められた、黒い拳銃が光る。それは人を撃つ物で、傷付ける物で、すなわち命を奪う物である。

狼狽える少年に、ケンはまた舌打ちした。

「勘違いすんじゃないよ。昔、《韋駄天》を持っていた男は、戦場で一人の死傷者も出さずに敵を無力化したこともあった。銃弾よりも速いその足があれば、ほんの数秒で任務を終えることだって不可能じゃねえ」

「人を殺すこと、否定しないんですか」

昨日のこともあって、互いに渋い顔を突き合わせる。

「俺達が殺すのは抵抗してきた奴だけだ。任務を確実に遂行する為

には、障害は潰していく必要がある」

「それでもボクは、人殺しの片棒なんて担ぎたくありませんっ」

「今更、反故にするってか？」

「だったら、ボクを殺しますか？ 殺せませんよね？ だって、ア

ナタ達はこの足が必要なんですから……！」

「何、急に強気になってやがんだ。俺ら相手にハッタリなんて、億年あっても足りねえよ」

「そうやって偉そうに言うから、ボクは……！」

「偉ぶってんのはテメーだろうがよ。このオッサンはな、ヘレティック相手なら誰だろうが頭下げんだよ。それを真に受けて増長しやがって……。アンタもアンタだ、煽って調子付かせて何やってんだよ」

とぼつちりを受けた酒顛は、「俺は、そういうつもりでは……」と力なく反論したが、「アンタがその気じゃなくても、受け取る側は勘違いして齟齬が生まれるんだよ。北米基地のカズンも、アンタのせいで思い上がってやがるじゃねえか」とケンに言い負かされてしまった。

確かに北米デヴオン島基地所属のカズンというヘレティックは、酒顛にスカウトされてから、自画自賛と傍若無人の限りを尽くしているのだった。

彼の場合、元からお坊ちゃん育ちだったのもあると思うけど……。とエリは思ったが、ここで彼の話を広げると、ケンの機嫌がますます悪くなると思い、話を戻すことにした。

「マコト君。私達は可能性を提示してるだけ」

「……………」

「その足があれば、世界を救う時間を短縮できる。敵の罠にハマられても、いち早く逃げ出すことができる。その足は、みんなの希望に……」

「世界世界って、そんなの知りませんよっ……！」

誠は立ち上がり、鬱積していた思いの丈をブチまけた。

「勝手にここへ連れて来て、痛いこと怖いことばかりされて、希望だ何だつて担ぎ上げて、おまけにボクは自分のことを何も思い出せないっ!!」

「でも、御両親のことは思い出せたんでしょ…?」

「こんなのっ、思い出せたうちに入りません!!」

ようやく記憶というパズルボードに戻ってきたのは、両親の声と雰囲気という曖昧模糊な印象を宿した二つのピースだけ。もしも夢を見なければそのピースを集められないというのなら、あと何度眠りにつかなければならぬのだろうか。

もしかすると死ぬまで思い出せないかもしれないと考えつくと、依拠する場所も無く生きることが、酷く恐ろしいものに感じられた。

「どうしてこんなことになってるんですか! どうしてボクは普通に生きてちゃダメなんですか! どうしてボクは、ボクがつ、ボクだけが…っ!!」

もう何も、抑え切れず、

衝動が手を動かしてエリの腰に伸びる

彼女は身体を強張らせただけで何もできなかつた 何も見えなかつた 少年はこの狭い機内でセンスを使い 彼女のホルスターから拳銃を奪った

誠は、血迷っていた。

彼は引き金に人差し指をかけ、銃口を自らのこめかみに押し当てた。

もう生きていたってロクなことが無い。どこにも自由が無く、何も記憶が無く、誰も支えてくれないと言うのなら、こんな世界とは

決別してしまった方がマシだ。

不思議と指が震えない。誠は目を瞑って引き金を引いた。

？マコト…！？

ハッラツとした少女の声が鼓膜の奥で弾けた。

ハッとなって目を開けると、青筋を立てたケンが肉薄していた。

彼が誠から銃を取り上げると、酒顛とウヌバが両腕を締め上げて腹這いにさせた。

エリから奪った拳銃には、安全装置がかけられていた。

「マコト君！ アナタ今、何しようとしたのか分かってるの！？」

「ボクは、自分で死ぬことすらできないんですかつ！」

ケンはエリに拳銃を押し付けると、誠の胸倉を掴んでグイと持ち上げた。

「テメーはあつ！！」

酒顛はその巨体をもって、殴りつけられて倒れ伏せる誠を支えた。ほのかに赤く滲む頬に、ケンのよくできた手加減を見た彼は、誠に強く言い聞かせた。

「マコト君。今のキミに、自分で死ぬ権利は無い」

「ボクにだって自由はあります！！」

「それは表世界の話だ。先日与えた自由は、単なる特別措置だ。檻の中の自由という意味なら、我々と変わらん。今のキミに許されているのは、ケンの命令に従うことだけだ」

唸るような嗚咽が広がる。

酒顔は居た堪れず、重く口を開いた。

「…しかし、この任務が終われば、その効力も切れる」

「え……？」

「リーダーっ、何言ってるんですか！？ 私もケンの強引なやり方には反対です！ ですが、このまま彼を野放しにするのは！」

「彼の未来は彼のものだ！！」

「っ！？」

「彼は何も罪を犯してはいないっ、迷惑を一つもかけていない！！ そんな少年が、赤の他人に自由を束縛されなければならない道理は無い！！」

少年を抱え起こした酒顔は、彼の肩を強く握って言った。

「俺も自殺を肯定する気は欠片も無い。許さんと断言する。しかしこの作戦後、キミは自由に選ばばいい。それが、キミの拉致の指揮を執った俺ができる、せめてもの償いだ」

再び頭を下げるリーダーに、ケンは深い溜め息をこぼした。

* * *

「ボス。チーム・シュテン第一実行部隊が出動致しました」

ネイムレスと呼ばれる組織をまとめるのは、ボスという初老の男だ。

その秘書を務める女　メルセデスは、彼の執務室に入るや、いつものように報告した。

しかしそれが無用だったと知る。ボスも執務機の脇に置いたモニターで、海底を滑り行く潜水艦を確認していたのである。

それは最近よく見かける光景だった。それは、そう、情報屋と自称する謎の人物　　バーグとの奇妙な関係を持ち始めてからだ。

「浮かない顔だな」とボスは言う。

彼の言葉を待っていたつもりだったが、顔に落ち着かない心情が出てしまっていたようだ。

「彼のことが気になるのか。マコト・サガワのことが」

「それはアナタも同じでは御座いませんか？」

そうでなければ、影で見送るような真似はしないだろうと思った。バーグの提供してきた情報の中で、早河誠の拉致は異例中の異例だった。

バーグはかの少年はヘレティックであると断じ、早急に保護するべきだと知らせてきた。

拉致した直後に、血液や口腔内の粘膜を調べた結果、一般人であるとは断定されていた。ヘレティックの証たる覚醒因子は、発現しなければ形を示さないからだ。

つまり、彼は覚醒していなかった。覚醒する予兆すら見えないほどに。

しかしボスは、自身の推理を論証付けるかのように、覚醒助長薬の使用を許可した。

酒顛チームのエリ隊員の提案もあり、大がかりな偽テロ騒動を実行した。それが功を奏して、少年の覚醒に至ったのは良い。

しかし、その彼のセンスが《韋駄天》だったというから穏やかではない。

あの日からボスは、バーグからの通信を待っている。

特定の場所にいないその怪人物は、海底にあるこの本部の為に設置した通信仲介システムをハッキングし、眉唾のタレコミを堂々と一方的に知らせてくる。

その瞬間を、ボスは待ち続けているのである。

彼の正体とその真の目的を、今度こそ看破する為に。

「アレを見れば、誰でもセイギ・ユキマチと重ねてしまう。それは期待や郷愁と同時に、畏怖や嫉妬、もどかしさを生じさせる」

姿はまるで似ていないのに、彼の能力が故人のそれと重なる。

ボスは、フツと鼻先で自嘲し、鉄仮面と揶揄される無表情を崩した。それはメルセデスしか知らない顔だ。

「何故彼と、直接お会いになれないのですか」

「会ってどうしろと。我々が世界の重大な事情を、半ば手車に乗せているという事実を懇切丁寧に教えてやり、万民の平和維持の為に暗躍せざるを得ないのだと納得させるのか？」

「…間違いではありませんわ」

「それでいいのなら、数多ある宗教と変わらん。平等な人権の為に恒久的な平和の為に、貧困を救う為に謳い、か弱い市民から心と金品を巻き上げる、あのあくどいやり口とな。私は、そうして集めた布施で、自らを第一に救おうという連中とは違うぞ」

宗教からの逸出こそが、人をさらなる高みへと向かわせる。それがボスの持論だ。

長年秘書を務めるメルセデスも、それはよく理解している。

「彼が自分一人で、生き方を選ぶべきだと仰りたいのですか」

「個人は選択権を持っているが、多くの人間がその使い方を誤っている。時代や状況、取り巻く境遇や、出生…。しがらみと呼ばれるものに足を奪われる。そうしてリスクから最も遠く、無難な道を選ぶと考える」

「それが人間という生き物です。人は少なからず、人生がたった一

度きりであると知っているのですから」

「では、抛り所の無い彼は、どういう選択をするのだろうな」

メルセデスは思わず息を呑んだ。

記憶があるから、しがらみがある。

しかし今の早河誠は、何も知らない。

ただ純朴に、生の為に産声を上げる無垢な赤ん坊と同じなのだ。

ただ愛するが故にと、世界の為に駆け抜けた英雄　雪町セイギが残した、数々の武勲に通じる何かを、この少年もまた、我々に見せてくれるのではないだろうか。

希望と不安を綯い交ぜにした顔をする彼女に、ボスは背を向けた。壁一面の強化ガラスの向こうで、虹のように煌びやかな深海魚が静かに泳いでいる。

「私はまだ、遠くで見ておこう。彼が、あるべき人間像を教えてくれるかもしれない……」

彼の後姿が、檻に閉じ込められたまま沈められた、荒々しい獅子のように見えた。

* * *

「今回の任務も、バーグの……?」

「いや、諜報員からの極秘情報だ。前回の任務以降、音沙汰が無いらしい」

今やバーグの存在は、組織全体の規律や信頼というインフラをかき乱すほどの、強い影響力を齎していた。その一部に、酒顛達も含まれている。

そんな彼らがどこで話しているかと言うと、中国雲南省にある山

間部　濃い密林の中である。

マリアナ海溝の海底基地から潜水艦で海面へと浮上した彼らは、その内部に搭載された輸送機でこのポイントへと飛び立った。

当然のことながら、彼らの存在や複雑な地形を考慮すると、着陸する場所はどこにもあるわけがない。そこで彼らは、いつものように浮遊機械フロート・バックを使つて、高度四千メートル付近から飛び降りるという手段を選んだ。

それを聞いた誠は、アホみたいな顔で呆然としていた。というか、アホの子の顔だった。

魂の抜け殻になつてゐる彼の身体を、エリは手馴れた手つきで自分の身体の前に固定した。

機体の後部ハッチが開き、突風に煽られてから状況に気付いた誠は、イヤだイヤだ死ぬ死ぬと喚き散らしていた。

機長からのゴーサインが出て、酒顛をはじめ、次々と落下していく。

『タンDEMジャンプって知ってる？』

『知りません知りません知りません！』

『じゃあさ、マコっちゃん。バンザイできる？』

『できませんできませんしたくありません！』

『えー、ホント強情だねえー。じゃあ、やめる？』

『はいっ、やめますやめます！！』

エリが踵を返すので、誠も自動的にハッチから背を向ける形になった。ホッとしたのも束の間、『ねえ、イナバウアーって知ってる？　ちよつと前に日本で流行語大賞獲つたやつ』と妙な質問をしてきた。

『え、古くないですか、それ。スケートの技でし…あ！？』

気付いた時には遅かった。アホの誠は鼻水を垂らして首を後ろへ捻った。

エリは小悪魔的な笑みを浮かべて、『レイバック!』ぐにやりと胸を後ろへ反らせた。そしてそのまま、『かあらあゝのおゝゝ』後ろへ床を蹴った。

『レッツ タンデェムッ』

身体が浮かんで、空の大気に投げ出された。

『レッツ、えっ、あっ、アッーーーーー』

タンデムジャンプとは、熟練者が初心者をも自分と固定し、折り重なった状態で落下するスカイダイビングのことである。

多くの説明も無く、行動だけで身体に刻み込まれたその言葉は、誠にとって大きなトラウマとなってしまった。

しかしそんなこんなで無事着陸し、今に至るわけだが、彼は着陸と同時にその場に蹲って動かなくなった。

そんな彼を酒顛は無理矢理背負って、手頃な岩陰に身を潜めた。

「マコト君、よく聞いてね。これから私達は、組織から受けた任務を遂行する為に、あの施設に乗り込むの」

エリは岩陰から見える、ここから連なった遠くの山巔を指目した。けれども緑の山腹と青空という、大自然の織り成す理想的なコントラストしか見えない。

「施設って…。何も無いじゃないですか」

「タリララッタラァー　そおーしいーきいーばぁーん、サァーマアルビジョーン」

彼女は突然、どこかで聞いたことのあるようなダミ声を発すると、「ピコつとな」ジャンプの際に彼に装備させていたゴーグルのテンブルに軽く触った。

「普通に言えや」というケンのツツコミの後に、誠は奇妙な光景を目の当たりにした。

「うわっ、何か見える！ 建物ですか！？」

「るっせえっ、はしゃぐな！」

「アンタのが五月蠅いわよ！」

赤い複数の線が、切り立った山の頂上に浮かび上がっている。ゴーグルを外すと見えないその線は、隠れ線が幾重にもなつて引かれた、建築物のCGモデルのようだった。

間違いなく何らかの研究施設と言つて差し支えない、人工的な箱物だ。

「DEMの基礎技術が用いられてるっぽいけど、所詮はお古。不自然に熱が漏れちゃってる。アレじゃあ今の米軍のセンサーでも、簡単に見つかっちゃうよ」

「じゃあ、普通にバレてるんじゃない？」

「ところがどっこい、ここは地元民も滅多に近寄らない秘境中の秘境。軍事境界線でもないから偵察機が飛んでくることもない。もしもその気配があるなら、エンジントラブルに見せかけて撃墜しているだろうしな」

アゴを撫でて説明する酒顔に、「野蛮ですね…」と誠はつぶやいた。

「品性が無いのは認めるさ。ヘレティックの代表としてな」

ニヤリと不敵に笑う彼は、少年の肩を叩いた。

「さて、マコト君。ここから先、キミはただひたすら、我々の傍を離れず追いかけることだけを考えろ。それができなければ、キミはここで死ぬことになる」

再三再四に渡って聞かされた恫喝には、もはや聞き慣れてしまった感が否めない。耳にタコができるどころか、鼓膜に麻酔を打たれて無反応といった具合だ。

しかし今度ばかりは本当だと理解できていた。

ヘレティックとしてのセンスを引き出す為に行なわれた偽テロ騒動や、一敗地に塗れることとなったケンとの一騎打ち。これら二つの最中に飛び交っていた恐怖とは全く異質な、本格的に腹の底が冷える感覚を覚えた。

そんな形而上学的な予測は外れてしまえばいいのに、一同が目指す？敵施設？と呼ばれる場所への道中には、いくつもの監視カメラが設置されていた。中には警備用全自動機関銃と呼ばれる、敵味方を瞬時に識別する機能を持った迎撃兵器まで配備されている始末だった。

「あのタイプのセンチリーガンの機能は単純よ。大体三十度後半の熱を持った、人型の移動物体に反応するだけ。でもそれだと仲間も巻き添えを喰らっちゃうから、特定域の超音波と電磁波を一定間隔で連続して発生させているビーコンを持った個体には、絶対に撃たないようにプログラムされてるの」

「このゴーグルだと、少なくとも五つはあります…。ど、どうやって先に進むんですか？」

ゴーグルの熱量探知モードを作動させた誠は、木の太い枝の付け

根や、茂みの中に、センチリーガンを見つけた。

周囲とは違った熱分布を示すそれは、全方位に対応できるスペースを備えているようだ。

「うん。下手に壊したら警報装置が作動するからヤバいし、ここは迂回する方が得策ね」

「…俺も賛成だ。近くに人の臭いがする。そいつを拘束した方が早い」

誠は、任務中とはいえ、ケンが他人に同意するという光景を初めて見た。やはり任務中は、彼も私情を捨てているのだろうか。

白い肌と同じくコーカソイドのように高い鼻を持つケンは、眉間の少し下　鼻根筋を揉むようにしてから話していた。

エリ曰く、この辺りに鼻腔の大きさを調節するシャッターと、その開閉ボタンがインプラントされているらしい。彼は犬かそれ以上の嗅覚を持っているが、機械やエリのセンスのように、オンオフを自由にできるわけではない。そこで清芽ミノルによって施術され、鼻と耳に同様の調節器が埋め込まれたのだという。

生まれながらにしてこのようなセンスを持ってしまった彼は、ナールバスにならざるを得なかった。だから普段からヒネた物言いしかできないのだとも、エリは言っていた。

誠はそれを考えると、彼の喧嘩腰の性格に同情してしまいそうになった。

「エリ」

「了解です」

素直になれずに猜疑心を抱いたままの誠を置いて、酒顔はエリに指示を出した。

彼女はうなずくと、目を固く閉じて周囲に意識を凝らした。

自分と同じように木陰に隠れる酒顛チームの面々の体温が周囲にあり、木の上の小鳥、地を這う獣や虫、草熱れが次々と脳裏に浮かんでくる。そうして拡散された彼女の意識は、あるものを捉えた。

「……確かに、近くに一つだけ大きな熱源があります。人間……男ですね」

「性別まで解るんですか。エリさんのセンスは」

半信半疑になりつつも、感心して言った。

エリは目を開けると、少し照れるように、「んゝふふうゝん。まあ、何て言うかゝ、口には出せないとこまで見えちゃうからねゝゝ」

「「「!」」」

まさかまさかの爆弾発言に、首をかしげるウヌバ以外の男達は驚愕し、すぐさま両手で下腹部を隠した。

「テ、テメー、いつもそれで見分けてたのかよ……!」

「あつ、当たり前じゃない! それくらいでしか判断できないのよ! 私だってチョットは恥ずかしいんだからね!」

「チョットかよ!」

そもそも性別の仕分けなど必要ではない。何故なら敵は敵、男だろつが女だろつが、そこに不平等を用いる必要性がないからだ。

つまり、性別まで見分けようというのは、彼女のフェチの一端なのである。しかもチョットしか恥ずかしくないと云うのだから困り者だ。

「エリ、ちなみにこの中でチャンピオンは誰なんだ」

酒顛はいやに真剣な顔で言った。

確実に悪ふざけたった。イケない男の性を全開にしたセクハラ発言だった。

軽蔑の眼差しを我らがリーダーに向けつつ、「……ウヌバ」とエリは解答した。

「さすがはアフリカ人だな」と酒顛は何の根拠も無い偏見で納得した。

「何の話ダ。身長力…?」

どうして酒顛が、豪快に笑い飛ばしながら背中を叩いてくるのか分からなかった。「まあ、ある意味長さだな！ 太さになら自信があつたんだがな、いやあ、負けた負けた！」と彼は言うが、ウヌバには皆目見当がつかなかった。

意外なことに、こういう話題が嫌いなのか、「くだらねえ。さつさと行くぞ！」とケンはそのくさと歩き出した。

そんな彼に向かってエリは、「ちよつと待ちなさいよ、ブービー賞！」

「口に出せねえんじゃねえのかよつ、ハレンチ女…!」

ウヌバが王座に君臨し、ケンが三位ということは、「俺が二位か。まあ、順当か。この図体で若い奴には負けられんなあ」独り合点する酒顛だったが、「え、リーダー最下位ですよ？」という彼女の仕返しの一言で、巨漢はその場で固まってしまった。

「なっ…!？」

「冗談ですよ。さ、早く行きましょう」

フォローしとくも、しかし石像のようになってしまった彼には届かない様子だった。

そんな羞恥心の欠片も無い大人達に囲まれたウブな少年には、気恥ずかしさだけが募るのだった。

「大人って…何か嫌だ……」

エリが示したポイントは、ここから施設とのちょうど中間の距離にある、崖を隔てた先の草むらの中だった。

草木の隠れ蓑からはみ出さないように、迂回してそちらへ近付こうとすると、『それ以上の接近は御法度だ。そんな大所帯じゃ、敵に感知されちゃうよ』

うつ伏せになって何かをしていたその熱源は、無線でこちらに連絡を寄越してきた。突然コールしてきたその声は、よく知る男のものだった。

『全くもって組織の技術には感服しちゃうよね。こんなイヤフォンみたいな物一つで、ボディアーマーと簡単に通話できて、かつ無線を傍受から録音までできる上に、音声認識で取り入れた言葉を暗号文書にして送信することまでできるなんてさ』

「何で説明口調なんだよ。ってか何でまたテメーがいやがる、フリッツ」

『ハロオ、みんな！ プロローグ以来だね。厳格なミスタードイツ人、フリッツだよ』

「聞けや！ どうしてテメーがいるんだつつうんだよ！」

組織の諜報員であるフリッツは、誰かに向かって決め顔を決めた。

『誰かって、そりゃあ？ 小説家になろう？ でこの作品を読んでくれ』

ている彼ら 愛すべき読者にだよ』と世紀のイケメン フリツツはウィンクを返すのだったあー。

勝手に世界観を壊さないで頂きたい。領海侵犯ですよ。

『えー、ちよつとしたファンサービスじゃないかー。ちえー、ま、いつか』

彼は切り立ったカルデラ地形の際にしながら、ピクニック気分でマツトの上に寝転んでいる。敵施設を視界に納めながら、悠長にサンドウィッチを頬張る余裕はどこから湧いてくるのだろうか。

「おい、フリツツ。今、誰と話してたんだ？」

『何を言っているんだい、ケンちゃん。僕も酒顛チームのメンバーのつもりんだけどなあ。ねえ、リーダーさん』

「いや、そうじゃなくてよお……」

「そうだな、キミもチームの一員だ。今度ゆつくりと、酒でも酌み交わそうじゃないか。いや、ちよつどココに持ってきているし、今から一杯やらんか？」

「おい、流していいのか？ 俺が間違ってたのか！？」

酒顛はどういうつもりか、腰に酒壺をぶら下げていた。壺には立派な字体で？大江山？と書かれている。

『い、いやだなあ、冗談でもそれはご遠慮させてくださいよあー』

「ハハハッ、誰も取って喰ったりはせんよ」

二人の言葉の意味が分からない誠は、やはり場違いな部外者だった。エリに問いかけようとしたが、今はダメという意味で、口の前に人差し指を立てられた。

「それより、状況はどうなんだ」

さすがは隊長と言えるだろう。この言葉一つで、漂っていた能天気な空気をガラリと変えた。

フリッツもおちやらかした態度を打ち止めにし、口調も神妙になった。ネイムレスの、諜報員の顔だ。

『思った以上に静かですよ。変化が無さ過ぎて、緊張の中で緊張を忘れてしまいます』

「任務内容は、ヘレティック技術に関する資料を奪取し、そこで開発中の兵器と施設を破壊せよとのことだ。ここで開発中の兵器とは何か掴めたのか？」

返事が無い。口を噤む彼に、一同は眉をひそめた。滔々と懸河の弁のごとく、流暢で軽やかな日本語を使う彼には珍しいことだった。焦れたケンが呼びかけようとしたところで、フリッツは固い声音で一言

『……完全自立学習型ハイパーコンピューター』

酒頭は耳を疑った。脳裏で息を吹き返した単語が、畏怖を成して彼の心を締めつけた。

「ま、まさかつ、ユリオン か……!？」

『そのまさかです。お気持ちは察しますが、どうか冷静に』

何ということだ。

酒頭は悔しげに頭を抱えた。

彼には というよりも組織には、ユリオン と呼ばれるコン

ピューターを巡った闘争によって、辛酸を舐めた過去がある。

この世に生を受けたばかりだったケンも、それにより大切な人達を失った。

「待てよ、フリッツ。どうして ユリオン があるんだ。アレは二十年前に破壊したはずだろ。関する資料は全て灰にしたはずだ」
『マコト・サガワ君、そこにいるね？ キミの話は聞いているよ』

唐突に名指しされた誠は、「え…？」ビクンと肩を震わせた。

『因縁だよ。《韋駄天》の再発掘と時を同じくして、あの悪名高い ユリオン が産声を上げようとしているだなんてさ。バーグって人は、一体何者なんだろうね』

「ユリ…オン？ バーグ…？？」

『キミは…いや、キミだからこそ知っておくべきだ。彼らがどうして血相を変えてしまうのかを、義務として知らな』

ヒュンッ！

フリッツの目の前を銃弾が掠めていった。サイレンサー消音器付きの銃口からそれを放ったケンは、「遊びで言っただけじゃねえよ。とにかく教える、どこの馬鹿が開発してやがるんだ」次は当てるという意味を孕んだ、鋭い声で訊いた。

『…怖いな、ケンちゃん。キミが殺意を向けるべき相手は、僕ではないはずだよ』

「そうだ、テメーなんかを殺したところで、俺達の溜飲が下がるはずもねえ。だから、その相手を教えるつってんだよ！」

ケンの肩に、大きな手が置かれた。顔を向けると、酒顔の生固い

目が同情の色を帯びていた。

草むらの向こうで銃口が下げられたのを見計らい、フリッツは答えた。

『…開発者までは不明だよ。でも、？二十年前の開発に携わったメンバーの誰か？だろうね』

「そうだな。そうでなければ、ユリオン が生まれるわけがない。しかしたとえ紛い物であっても、脅威は排除するまでだ」

物分りのいい隊長さんで助かる。

短気なケンの親代わりであり、年季の入ったストッパーでもある酒顛に内心感謝しつつ、イヤフォンとセットの多機能デバイスから彼らへデータを送信した。

誠達の着ている戦闘服のうなじの下辺りには、フリッツの物と同様のデバイスが受信機と共に搭載されている。それらに蓄積されたデータは、Googleをディスプレイ代わりにして確認することができる。

実行部隊は、フリッツのような諜報員から得た、これらの実地データを頼りに、任務を遂行するのである。

『このルートを通れば、最小限の歩哨を制圧するだけで侵入できるはずだ』

「坑道か」

ここから険しいカルデラ台地の斜面を下ると、草木に隠れた岩穴がある。その付近には敵兵の姿もあり、監視カメラやセンサーガンも他より多く点在している。岩穴からほぼ一本道の坑道を抜けると、行き止まりにリフトがある。

『そこから上部に張り出した施設へと直結しています。ですが自爆

も考えられますから、短期決戦をオススメしますよ」

「この国境なき反乱者は、過激な奴らなのか」

「最近はこの山に入った者は必ず遭難し、行方不明になるとまで言われています。いつ僕らのような部外者に見つかるか、という極度の緊張状態にあるんです。過激にならないわけがありませんよ」

「構成員の規模は、確認されているだけで六十名前後か。意外と少ないな」

あの ユリオン を開発しているにしては、だ。

「内十七名がヘレティックのようですが、二人を除いては雑魚同然」

「二人？」

「一人は防衛部隊のリーダー。もう一人は科学者です。科学者に関しては、捕縛する必要があるでしょう。急な作戦変更ですが、問題ありませんか？」

ユリオン のような常識外れのコンピューターを少人数で作るのだ、規格外の頭脳を持った開発担当がいなければ不可能に等しい。

「ノープロブレムだ。よし、キミは非戦闘員だ。このまま処理部隊と合流し、我々の合図を待って、任意に離脱してくれ」

『御武運を』

そう言い残して、草むらからフリッツの気配が消えた。

誠の胸の中で靄が渦巻いていた。偶然目の合ったエリに問いかけようとするも、「行くわよ、マコト君。私達から離れないでね」とにべもなく流された。

彼は何を言いたかったのか。知るべきこととは、一体何なのだ。

「要人警護用の陣形を維持しつつ、状況の変化に応じて適宜に判断し、任務を確実に遂行しろ。人間ではないにせよ、所詮は我らも生物だ。過信は即死に値する」

一同は理解して首肯するが、誠は所在なく目を泳がせるばかりだった。

そんな彼に、ケンは一丁の拳銃を差し出した。

「コレは護身用だ。身の危険を感じたら迷わず撃て。間違っても、俺達や自分に使うんじゃないぞ」

「ボ、ボクは足手まといになりますよ……？」

「そんな足を持つてくるくせに何言ってやがる」

「そうじゃなくて、ボクはアナタ達のように戦えません。戦いたくありません……」

「命令だ。俺達から離れるな。走れと言えば走れ。隠れると言えば隠れる」

また横暴なことを口走る彼に、誠は反抗的な目を向けた。

しかし、「死ぬなと言えば、死ぬな」

彼のその一言の重みに、声が出なくなってしまった。

彼の目が伝えようとしていることを察せない自分が、どうしようもなく不甲斐なかった。

落ちくぼんだ地形の底に広がる密林を、縦横無尽に駆ける様は、野獣のようだった。草花を颯爽と揺らし、気配をチラつかせては遠のいていく。

坑道の外で警備に当たる歩哨達は、それを原生動物だと誤認して、得体の知れない恐怖に肌を粟立たせた。

しかして、下等生物との遭遇に、一々本部へ連絡するのも馬鹿ら

しかった。

三人いる彼らは互いに連携を図って、獣を追い詰めようと考えた。日頃の鬱憤を晴らすゲームのつもりで、ハンティング狩りを始めたのだ。

賭けようと一人が言っていると、彼らはニヤリとしてすぐに離れていった。

それが愚行だったのは言うまでもない。

身を低くして走り続けていたケンが、音も無く一人を襲撃したのだ。パルクールと呼ばれるアグレッシブで常住不断な疾走は、まさに野生動物が憑依したように淀みなく鮮やかだった。

残る二人もたちまち倒された。監視カメラの死角にいたのが運の尽きだ。それぞれ酒顛とウヌバによって気絶させられ、泡を吹いている。

酒顛のゴーサインでエリ達も姿を現した。

「走って！」

本気を出せば右に出る者がいないはずの足を持っている誠だったが、肝心な時に限ってまごついていた。エリに手を引かれて酒顛らと合流すると、その足で坑道に飛び込んだ。

「次のポイントまで足を止めるな！」

酒顛の声に続いて、暗い坑道の奥で低い悲鳴が響いた。

ルートを確保する為に一足先に進んでいたケンとウヌバによって、敵兵が次々と倒されているのである。

誠が見るのは、地に伏せて痛い痛いと言悶える者達の姿だった。折れた足や潰された鼻、殴られた腹などを押さえている。誰一人として死んでいない。

「不思議って顔してる」

山頂の施設へ直結したリフト前まで到達すると、エリが微笑を浮かべて言った。

「生殺与奪は強者の特権よ。私達だって、人殺しなんて気分の悪いことをしたいわけじゃないの。本音はマコっちゃんと一緒よ」

だからと言ってどうなのだ。それはただの傲慢じゃないか。

誠の気分は萎えるばかりだった。

自分はあるべき記憶を取り戻し、穏やかな世界で生きることを望んでいるだけなのに。

やはりこの足がいけないのだろうかと考え出すと、急に疎ましく思えてきた。本当に切り落としてしまえば、こんな野蛮で痛みを伴う世界から解放されるのだろうか。

持たされた拳銃に力が入った。

「ね、ねえ、本当にコレに乗るんですか？」

「何だエリ、いつになく弱気じゃないか。ロープを切られるんじゃないかと心配なのか？」

「ち、違いますよ。私が敵だったらそうしますよって話です」

「凶星かよ」

「俺ならその手は選ばんな」

「どうしてです？」

「この坑道の広さといい、リフトの大きさといい、これは明らかに大型の資材を運搬する為の物だ。つまり上空から施設へ、直接の搬入ができない為に設けられた、彼らのライフラインでもある。それを自ら断つくらいなら、もっと確実な手を使うだろう」

「乗るしかないということですか…」

エリは溜め息をつく、誠の手を引いて洪タリフトに乗り込んだ。

酒顛が上昇ボタンを押し、鈍い音を鳴らしながらシャフトを上がっていく。汚れたシーリングライトだけが空間を照らし、一同が自身の装備を着々と整える音が広がっていた。

誰も自分の葛藤に気付いてくれない。

誠は唇を噛み締め、拳銃の引き金に指をかけた。

「何する気だ」

目ざといケンの声に誠は少し戸惑って、引き金から指を離れた。

「フリッツの言ったことは気にするな」

「…また隠すんですか」

「……………」

「アナタ達はボクに隠し事をしてばかりだ」

「……この任務が終わり、テメーが俺達から離れないと言っのなら教えてやる」

「そういう取り引きは、もうウンザリですよ!!」

ガタンと巨大なカゴが揺れる。

睨み合う両者だったが、ケンの方が先に顔を背けた。

「なら、ロクでもねえこと考えるんじゃないよ」

リフトとシャフトの隙間から差し込む光が強くなった。

酒顛は誠を気にしつつ、一同の先頭に立った。

エリは誠を背後に置いて酒顛の後ろに立ち、彼女を挟み込むようにしてケンとウヌバが身構える。

誠は、酒顛がボディアーマーを脱いで、酒壺を手に行っていることが気になった。

チャイムが鳴ると同時に緊張が走ったが、直後の奇襲ということ

はなかった。

リフトのシャッターが開くと、すぐそこは資材置き場になっていた。硬鉛やインコネルなどの合金の板材などが敷き詰められていて、閑散とした雰囲気を漂わせている。

彼らは足を忍ばせて降り、すぐに積み上げられた板材の影に身を潜めた。

「イヤだ、待ち伏せされちゃってる」

資材の裏手、通路の角、ドアの奥。拳句はリフトが降りて行き、坑道で運良く無傷だった者達が迫ってきていた。

それらの熱量を《サーマル・センサー》で凝視していたエリは、^{リーダー}酒顛に判断を委ねた。

「ユリオン　の開発区画は別棟にあるようだ。二階の渡り廊下を通りたいが、隠密行動で進める見込みも無い。ここも強行突破で行く」

一同は即決で同意した。
ただ一人を除いては。

「マコト君。キミの気持ちは分かるつもりだ。かつては俺もそうだったからな。しかし計りかねるのは、記憶喪失という重い現実だ。だから我々は、任務遂行後はキミの意向に従おうと考えている。本来ならば、同意の上で連れて来るべきだったのだ。すまなかった」
「こ、こんなところで謝られたって……」

複数名の気配が近寄ってくる。サーマルビジョンや高指向性^{レーザーサイト}マイクを通してこちらの居場所を把握した彼らは、赤外線照準器で侵入者共に狙いをつけた。

「解る。気持ちは解るつもりだ」

「だったら！」

「だが、憶えておいてくれ。力ある者には、それを正しく行使すべき義務があることを」

酒顛はおもむろに酒壺の栓を抜き、アルコール度の高そうな内容物を一気に飲み干した。

こんな時に何をやっているんだ、自棄酒か。

誠が動揺していると、酒顛の身体に異変が起きた。

綺麗な丸坊主だった彼の頭から、毛が生えたのだ。それも歌舞伎の連獅子を髯髻させる無数の赤い髪が腰まで一息に伸びたのである。髭も生え、身体は肥大して迷彩服を引き裂いていき、伸縮性の高い黒タイツだけが、身体にピタリと張り付いた。

そうして彼は、瞬く間に三メートルは優に越える巨人となった。その頭には二本の角が生え、長く鋭い牙が口から飛び出していた。

その姿はまさに 鬼。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオッ！！！」

「な、何ですか…！？ 身体が急に大きくなって、角…っ？」

「見てのとおり鬼になったのよ。日本各地で伝承されている鬼の姿は、あながち迷信じゃなかった。こうなったらリーダーには、並のライフルじゃあ傷一つ付けられないわよ」

困惑する誠の身体を支え、エリが誇らしげに言った。

銃声が鳴り響き、鬼となった酒顛にあらゆる方向から銃弾が容赦無く撃ち込まれる。

「ああつ、酒顛さん!!」

「ここはリーダーに任せるぞ」

「任せるって!」

エリ達が誠の手を引くが、彼は鬼の名を呼び続けた。

そこへさらに、一発の砲弾が飛来した。それが無防備な赤い巨体に直撃し、爆発する。

巻き起こる突風と黒煙に、敵兵士も攻撃の手をゆるめた。

愕然とした誠だったが、さらに息を呑む事態を目撃した。多少の火傷を負っただけの巨大な鬼が、ゴキゴキツと首を鳴らして立っているのだ。

鬼はまた一吼えすると、怯え叫びながら取り囲む敵兵士を次々と薙ぎ倒し、ケン達の進行ルートを確保せんと突撃していった。

それに恐れた敵兵士が、無反動砲の砲口を彼に向ける。

すると鬼は壁から張り出たコンクリートの柱を潰して塊を手にし、さっきの意趣返しと言わんばかりに、豪腕をもって投げつけた。砲弾さながらの威力を秘めたそれは、相手のすぐ横の壁に大穴を開け、彼らから戦意を根こそぎ奪うのだった。

「ゆう け え え え え え え え え え
え え え っ !!」

酒臭い轟音が全身を劈く。元々地声のでかい酒顛の声は、鬼となれば凶器そのものだった。

ケン達は酒顛の足元をすり抜け、非常階段を駆け上がった。今度は真上から銃弾が降り注ぎ、彼らの行く手を阻んだ。

「チツ、これだから狭い場所は嫌いなんだ!」

立ち止まるケンを追い抜き、ウヌバが先陣を買って出た。

剥き出しの左腕で炎の盾を創り、一気に駆け上がる。放たれる銃弾をことごとく消し炭にして、自身を巨大な火の玉のようにして、彼ら目がけて飛びかった。

「先、行ケ……!!」

「ウヌバ、機関室に引火させたらタダじゃ済まさねえぞ!」

「了解。凍らす……!」

言うやウヌバは、炎を消して、まるで代替品のように腕に巨大な氷をまとった。

彼は発火と凍結を自在に操ることができる、ヘレティックの中でもとりわけ異端的なセンスの持ち主だった。

彼はその力を使って敵兵の動きを鈍らせると、大気中の水分を瞬間に凍らせて厚い氷壁を創り、彼らを氷室に閉じ込めるのだった。火の海から氷原へと変貌を遂げたA棟の二階区画を背にして、ケン達は渡り廊下を走り抜けていった。

「エリ、まだいるか!」

「B棟の研究区画以外にはいない、一人しか……!」

「……親玉か」

冷たい風が煽り立てる渡り廊下から、B棟へ飛び込んだ。

すると、先頭を切るケンに目がけて、白濁色の液体が飛来してきた。彼は咄嗟に避け、一足遅れたエリは誠を庇うようにして後ろへ飛び退いた。

白濁色の液は壁に当たると、ジュワジュワと凄まじい勢いでそこを溶かしていった。

少しでも判断が遅れれば火傷どころでは済まなかったと思うと、さしものケンも苦笑した。

「…ヘレティックだな」

一本道の通路に、一人の男が立っている。

顔が大きく小太りな体系で、とても兵士には見えない面構えだが、二丁のハンドガンを指先で器用に回す様子は、只者では出せない独特の気配を漂わせている。

「イカしたヘアスタイルしてんじゃにええの、お兄いチャン」

「イカれたセンスしてんじゃねえか。今のは唾か？」

ケンのセリフに男はニイと笑うと、「唾じゃにえー、胃酸だ」と長い舌を見せて、ドロリとした液を滴らせた。落ちた液がたちまち床を溶かし、黒い煙を上げる。

「イカれてんのはお兄いチャン達の方だじえ。こんな場所までオメーらアレだりよお、正義の味方気取って動き回ってる、裏の警察機関じゃろう？ にゃ前はなんつつたか……」

舌を出しながら喋る男に、エリは寒気を覚えた。

誠も気味悪がって、その場から動けない。

「ニエームレシュ！ そうだ、ニエームレシュだ！」

「… ユリオン があるらしいな。あんなモンに関わってもロクなことにならねえぞ」

「投降しろっちえか？ 怖いにえ、怖いにえ。じゃが、悪いが金にならにえことはしにえー主義だ」

「金が欲しいのか」

「金は良いじえー、アレさえありやあ何じゃって思いのままじゃ」

「分かりやすい奴だな。なら、尚更投降した方が身の為だ。俺達の組織に入れば、今よりもずいぶんと安定した職にありつけるぞ」

エリは、いつかケンが話していたことを思い出した。
彼は常々、ヘレティックがどう生きるべきかを考えていた。

「へっ、嘘はイケにえーにやあ」

「何？」

「オメーらが俺らみてえなのを丸ごと抱え込めるほど寛大とは思えない」

そうだとエリは目を伏せた。

組織は、世界に悪影響を及ぼしたり、それに加担した者には一切の容赦をしない。捕虜にした連中が、組織へと編入されるという話も聞いたことがない。

REWSと目されるに足る行動を起こした時点で、彼らの末路は決まっているのだ。

だが、ケンはそれを少しでも変えようとしていた。

「……同じヘレティック同士、争ってどうなるんだ」

「火種を持ち込んでくるのはオメーらじゃろう？」と敵兵は肩をすくめ、「少なくとも俺に争う意志はにえ。なじえにやら、一にも二にも兵器売買によって発生する莫大な金が目的だから。じゃが、オメーらがそれを邪魔するってえなら、争わざるを得んじゃろうっ？」

「ヘレティックが隠れず暮らしていける場所を創ってやると言ってもか？」

誠はエリに説明を求めたが、彼女は優しく肩を抱いてくれるだけだった。

敵兵は眉を吊り上げ、ケンを睨んだ。

「……オメー、意味不明だじえ。それに大体元々そもそも…」

青筋が浮き立って、荒れた声が通路に響く。

「その同胞を何人も殺しといてよく言うじえっ!!」
ヘレティック

火蓋が切って落ちた。

ハンドガンから銃弾が放たれる。ケンは身を屈めて回避するも、重そうな胃液が降りかかってくるので、一所に長居することはできなかった。

飛び散る液に、「ゲロゲロゲロゲロ、きつたないなあっ!!」とエリが罵る。

すると男はムツとして、標的を彼女にチェンジした。ハンドガンでケンを牽制しつつ、壁際に控える彼女に液を飛ばす。

「こんなの居合いで! って、ヤバっ、刀忘れてきちゃった!？」

エリはこう見えて日本刀の使い手だ。
しかし今日に限って、本部に忘れてきてしまったらしい…。

「あんのバカヤロウ! つまんねえボケを!」

ケンが助けに行こうとするも、一足飛びで間に合う距離ではない。
万事休す。

異様な熱気を放つそれが、彼女の顔面に迫る。
背後には誠がいる。

彼女が避ければ彼が死ぬ。

エリは身構えて覚悟を決めた。
この子だけは、護らなければ。

命を賭して、護らなければ…！

しかし次の瞬間、全く反対方向にいるはずのケンの背後で、彼女は転んでいるのだった。

「え、何…？」

「ちえめーっ、女！ 瞬間移動のセンスか！？ 反則だじえっ！」

は？ 何言ってるの？

エリは首をかしげたが、まさかと思い当たった。

同じくケンの後ろに立つ少年 早河誠が、息を切らしていたのだ。

「今、使ったの…？」

「ボ、ボクは戦えませんが、こんな時にジツとしていられるほど弱虫じゃありません！」

「…フ、ハッハッハッハッハッ！」

ケンは髪をかき上げて笑った。

馬鹿にされているような気になった少年は、「笑うことないじゃないですか！」

しかし彼はまだ笑い続けた。

「無視かよっ、気に入らにえーやちゅらだじえっ…！」

少年だけでなく男も苛立って攻撃を再開する。弾が切れたハンドガン捨て、切れ味の良さそうなファイティングナイフを構えた。格闘戦に持ち込むつもりだ。

「あー、ったく、ガキがナマ言いやがって。テメーら、少し待ってろよ。すぐに終わらせてやっからよお」

ケンは肩を回すと、腰を落として構えた。

「舐めるにやあつ!!」

「テメーが言えたことかよ!!」

両手のナイフで切り裂かれそうになるが、そこは紙一重で躲し続けては、隙を見つけて反撃を加える。胃酸を飛ばされてもすぐに横に飛んで回避した。

素早いナイフ捌きと拳の応酬。

フィリピン格闘術エスクリマに通じる戦闘風景に誠が呆然としていると、「コレが、ヘレティックの戦いよ」とエリが言った。

「私達は物好きな資産家さん達に援助されて任務をこなしてる。でも、武器が潤沢してるわけじゃない。何故なら、私達の考案した技術を開発するには、莫大な金額が必要になるから。だから私達の持つ銃のほとんどは、表世界からの流用品に少し手を加えただけの物。私達に見合う物じゃない。そこで私達は、白兵戦を極める必要がある。それは相手も同じね。ヘレティックは、自分のセンスを最大の武器にするの」

ケンの鋭い聴覚は、男の腹が脈動し、胃酸が逆流してくる音を聞き逃さない。

つまり、相手の動きを予測できる。

躲された後に大きな隙を生む回し蹴りも、この優れた耳のお蔭で何のリスクも背負わない。

そうして瞬時に男の背後を奪うと、左腕を取り、肩甲骨を押さえつけ、相手の身体を壁面にブチ当てた。さらには力任せに振り回し、右の脇腹に拳を捻じ込んだ。

男は胃液をボロボロと吐き出しながら悶え苦しんだ。

「くつしよがあああっ！」

敵兵は目を血走らせ、地面を蹴った。胃液をまき散らして、ケンに飛びかかる。

「つまらねえ価値観に溺れた自分を呪え」

「死にええっ！！」

身を低くしたケンは、男と男の吐き出した胃液との間に生じた、わずかな隙間に滑り込み、右膝で彼の身体を空中に蹴り上げた。

「落月^{らくげつ}！！」

小太りの身体が宙を舞い、ケンはさらに追撃を加える。自身も飛び上がり、男の喉を押さえ込んで床に叩きつけた。

胃酸で腐敗した通路にヒビが入り、床に大穴が空いた。

穴に落ちていく男を尻目に、ケンは無事に通路へと着地した。

「お疲れ」

エリと軽くハイタッチを交わしたケンは、「マコト」と少年に呼びかけた。

これが、彼に名前を呼ばれた、初めての日だった。

「こんな俺でも、殺さない戦いくらいできるんだぜ」

穴から下を見ると、男はまだ生きていた。全身を襲う激痛に呻いているようだ。

真下は研究区画で、研究員達が悲壮な面持ちでこちらを見上げ、

腰を抜かしている。

誠は笑顔で頭を叩かれた。

それなのに無性に胸が熱くなって、彼に感じてきた嫌悪感が色を変えたのが分かった。

このもどかしさが彼を疑った罰だと知るのに、そう時間はかからなかった。

「テメーら動くなよ！ ユリオン のデータを渡しやがれ！」

「余計な真似をしたら、容赦無く撃つわよ！」

B棟の研究区画には戦闘員の姿は無かった。

白衣を着た人々ばかりで、緊急事態を知った彼らは資料を持ち出して逃げようとしていた。

しかし寸でところでケン達が入り、拳銃を手にフリーズの掛け声で制圧したのだった。

研究員達は命欲しさに誠にさえも怯え、資料の全てを差し出した。そこへ、「どうだ、見つかったか！」敵兵の無力化に成功した酒顛とウヌバが駆け寄ってきた。

「コレを」

エリが渡した紙媒体の資料を一言一句漏らさぬように目を通した酒顛は、頭を掻いて嘆息を漏らした。その頭には、角の生えた痕を示す傷以外には、髪の毛一本すら生えていなかった。

「……間違いない、あの時のデータによく似ている」

「じゃあやっぱり……」

ユリオン。

組織が史上最悪と位置付ける　ハイパーコンピューター。

二十余年前に跡形も無く排除したはずのそれが、今ここで開発されていた。

「ここの開発責任者は誰だ！　名乗り出る！」

「いませんよ」

酒顛の声に、空豆のような顔に眼鏡を掛けた研究員が答えた。全てを　人生そのものを諦めたような顔をする彼は、無気力に言った。

「この数ヶ月、こちらにいらしていません」

「何：？　では、どこにいるんだ。研究者の名は？」

「フフフフ…」

「おい、答えろ」

「あなた達、あの方にお会いになられたら、さぞや驚くでしょうね」

「やはり以前の　ユリオン　開発に携わった人間か。どこにいるんだ」

「ミスターXは、今… あっ！？」

ブシャッ！！

研究員の胸が、急に弾け飛んだ。

それに誘発されるように、各所で研究員が破裂して、死んでいく。さっきの小太りの男も同じだ。

もしかすると、ここの兵士全員に同じ現象が起きているのかもしれない。

血の雨を浴びた酒顛は、目を剥いて立ち尽くした。

「…やられた」

誠は、人が死ぬ瞬間を初めて見た。

それなのに、ふと思い出した。

いや、病院で息を引き取った祖母は、もっと厳かに死んでいったんじゃないか。

だけどコレは、別物の死に方だ。

？人間の死？の形式ではない。

立ち込める血肉の臭いと、突如押し寄せてきた記憶の波に吞まれた誠には、さっきのヘレティックのように込み上げる胃液を自在に扱う術が分からなかった。

〔三〕（後書き）

あけましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

ということでございます、〔三〕を更新しました。

さらにですね、今回から「残酷な描写」というものが増えてきます。
おそらくw

と言つてもね、今回は「内臓が〜」とか、「脳味噌が〜」とか、ではないのですが、徐々に増やしていく方向で考えています。
今回からは保険ということ。

どこから苦情が飛んでくるか分かりませんからねw

それでは皆様、次週にでも再びお会いしましょう。
ばいっちゃ！

〔四〕（前書き）

前回のあらすじを少し。

雪町ケンとの、自由を懸けた決闘に敗北した早河誠は、その代償として彼の命令に従うことになった。

第一実行部隊は彼を率い、中国の山間部に聳える何らかの研究施設への潜入を計る。その目的とは、そこで開発しているオーバーテックノロジーの破壊であった。

突然、戦場へ駆り出された誠は、組織の諜報員フリッツと出逢う。彼は一同に、施設で開発されている物は ユリオン というハイパーコンピュータであることを告げ、それは誠のセンス《韋駄天》にも深く関わることだと機密を漏らした。

不安を抱きながらも、誠は戦場で《韋駄天》を使ってエリ・シーグル・アタミを窮地から救った。

その勇気ある行動に、ケンは認識を改める。

敵ヘレティックとの戦闘の末、施設を占拠した彼らは、 ユリオンを破壊へ移行する為に、敵研究員を尋問したが、研究員達は突然胸部から破裂して全員死亡してしまう。

誠達は ユリオン が消え失せた事実を知り、立ち尽くすのだった。

〔四〕

また一夜が明けた。

世界で最も深い海の底にひっそりと佇む基地の中は、いつにも増して慌しくなっていた。

耳を澄ますと必ず ユリオン という名が聞こえてくる。

基地に在住する者達にとって、悪魔よりも不吉な響きを持つそれは、否応無しに彼らを冷静から突き放していた。

手に入れた資料は本物だが、造られていたのは本体ではなかったとか。

開発責任者が不在だったとか。

ボスがバーグに唆されてしまったから、機を逃してしまったんだとか…。

何の前知識も覚悟も無く、単に敗戦の代償として先の作戦へ強制的に参加させられた早河誠は、エトセトラの情報に揉まれた勢いからか、つい口を開いてしまった。

「ところで、 ユリオン って何なんですか？」

場所は第一実行部隊会議室。組織の一番槍にして、最高の兵力を有する戦闘部隊のミーティングルームである。

その内装というのは、まるで中高の運動部系の部室のようだ。

隊員の趣味が入り乱れていて、壺や掛け軸のような骨董品に、犬やネコやパンダ等のぬいぐるみ、デオドラント効果のあるスプレーなんかと一緒に弾丸やピストル等の小型武器が床を埋め尽くしている。

世界を縮図にするとこんな感じなのかなと、大層なことを考えてしまいそうになるほど、多文化の品々がその一室に詰め込まれていた。

その部屋の中央に据えられている円卓を囲むように、椅子や机に腰掛けていた男女は、誠のセリフにキョトンとしていた。

「え…、アレ…？」

彼が首をかしげると、部隊の紅一点 エリ・シーグル・アタミが少し驚いた顔で答えた。

「いや、意外だなと。あんな目に遭ったのに、訊くから…」

彼女の言うとおり、一同は誠の進退の行方を聞きにココへ集まっていたのだが、十中八九彼は表世界に帰る道を選ぶだろうと踏んでいたのだ。

「それは、逃げないということか？」

元来円卓には、立場の優劣を無視した働きがあるのだが、それでも上座に当たるのである。入り口から一番奥の席に、部隊長の酒顛ドウジが座している。彼が誠に意図を訊くも、「や、その、別に、聞いてから決めてもいいかな」って」と歯切れ悪い答えが返った。その様子に副隊長の雪町ケンは、「コレだから平和ボケはよーっ！」誠の頭をわしゃわしゃとガサツな手つきで掻き乱した。

「ええっ！？」

昨日の作戦の後から、ケンの誠に対しての対応は急変していた。ついこの前までは、睨むし胸倉は掴まれるし、勝負だと言って殴られるしと、散々な目に遭っていた。それが今では乱暴で不器用ながら、温もりのあるスキンシップが倍増していた。

顔は依然として怖いままで、あの戦闘の終わりに見せてくれた笑

顔は浮かべないが、それでも恐れを感じることはほとんどなくなった。

理由は分からない。けれども、どこか落ち着く雰囲気胸を暖めていたのは確かだ。

「ユリオン はこの組織でも最重要機密事項トップ・シークレットに属する情報の一つだ。それを部外者になるかもしれない相手に漏らすわけにはいい」

酒頭は、敵とした大人の顔と固い口調で言った。

誠がそれに答えようとした時、部屋の出入り口が開いて、「今、何と言ったのかしら？」

「メルセデス秘書官：」

チャイムもノックも無しに闖入してきたのは、ボスの側近を務める女だ。

ボスの不在時における副総督役でもある彼女は、いつものようにカッチリとしたスーツ姿で、片手に極薄のタブレットPCを持って、カンとハイヒールを鳴らした。

彼女の名前を聞いた誠は、「え、車：？」と反射的に口を滑らせたが、彼女が過敏に反応するよりも速く、エリの両手による口止めファインプレーで阻止することに成功した。

「ううっ！？」

「アハハハッ、何の御用ですございまするかっ、秘書官様！？」
「てか、何で聞こえてんだよ」

メルセデスは、銀髪的青年に冷たい一瞥をくれてやった。そしておもむろに右耳のコードレス・イヤフォンを外し、壁に設置された

神棚を指差した。

エリがそれを凝視すると、小さな熱源が一つあり、「あ、盗聴器……」

「趣味悪いな」

彼には徹底して口を利かず、今度は酒顛に切れ長な目を向けた。

「な、何でしょうか……？」

「今先程、四十三秒前、ドウジ・シュテンは何と仰ったのかと訊いたのです」

何で秒数まで計っているんだという疑問を脇に置きつつ、酒顛は面倒になる前に答えることにした。

が、「ユリオン は最じゅー」「違います。その後です」間髪を容れずに指摘する。彼女の子一匹逃がさないような眼光に圧せられ、「部外し……う」と言いかけるも、酒顛は彼女が問い質したいことを察して、辛うじて口を噤んだ。

言わぬが花というワケではないが、まずはボスに直接伝えるのが筋だと思っていた。

それなのに彼女は、ズケズケと口を挟んでくる。

「コレはあくまで私の推論ですが、アナタ方はマコト・サガワを逃がすおつもりで？」

誰も答えない。

酒顛は目を下に落とし、ケンはそっぽ向き、エリは毛先を調べ、ウヌバは後ろ手に組んで待機中、誠はどうしたらいいか分からずに正座で目をオロオロとさせている。

非協力的な彼らに嫌気が差し、彼女は一人の隊員に命令した。

「ウヌバ戦闘員っ、今後のマコト・サガワの処遇について報告を！」

「ホームへ、返す!!」

敬虔で、誠実な目を輝かせて、彼は正直に答えてしまったのだった。

「言っちゃうしよお、片言で…」

「一番弱いところ突くとかサイテー」

ブーブーと抗議する彼らに、メルセデスは何を言っているのやらと肩をすくめた。

「非道も道の内、我々も然りです。組織の行ないが正当化されているのは、世界保全に一役買っているからに過ぎません。アナタ方なら身をもって分かっているはずですが？」

そついう話を持ち出すとはますますズルかった。室に入りて矛盾を操る、彼女の得意とする嫌味な論法だ。一理あるのでさらに厭らしく感じる。

酒顔は洪面をたたえと、「…ボスには、自分から報告するつもりです」

「単なる外出であれば、所定の手続きを済ませて頂ければ結構ですが、一度保護したヘレティックを野に帰すなど前代未聞ですわ。逃走幫助は極刑に値します」

「しかし…」

「要するに、ボスも許可することはないということです。ましてやこの少年のセンスは、あの《韋駄天》。帰したと同時に、REWB

Sに拉致されるのが関の山ですわ」

「我々の情報操作があれば、彼がヘレティックであることは決して
」

「ですがバーグは　！　言いかけて、メルセデスの脳裏にバーグ
の聲が木霊する。彼女は下唇を少し噛んだ。

酒顛もうんざりしていた。これは誠との間で何度も交わしてきた
問答だ。しかし、それでも、彼にも選ぶ権利があるはずだった。

ケン は決闘に勝利することで彼を任務に参加させ、組織の正当性
を行動で訴えようとしていた。作戦中の彼の様子を考えれば、表世
界　日本の東京での平々凡々な日々に戻りたいという気持ちは、
何ら変わらないだろうということは想像に難くない。

心にすっぽりと穴が空いてしまっているのなら、尚更だ。

「彼、帰りがたがっているんです。記憶も無いのにこんな場所で一生
を過ごせだなんて、やっぱり酷いですよ」

「エリ・シーグル・アタミ」。アナタ、私の眼鏡をちょっと拝借す
ると言ったきり、まだ返していませんわね。そのアナタが、帰す帰
すなの論議に口を挟むなど言語道断ですわ」

「んなメチャクチャな…」

彼女らしい横暴な言い回しに、酒顛は嘆息を漏らしてツツこんだ。
エリは不貞腐れた顔を見ると、まるでゴミ箱扱いの高そうな壺の
中から、インテリ眼鏡を取り出してきた。

それは誠が拉致　もとい保護された日、研究員に変装したエリ
が掛けていた物だ。彼女はあの日、メルセデスから半ば強引にコレ
を借りてきたらしい。

無邪気に、「ゴメンね」と言っ、埃や髪の毛に塗れた眼鏡を
返すエリ。

メルセデスは引きつった顔でそれを受け取ると、コンタクトレン

ズを外して、その眼鏡を綺麗にしてから掛けた。

プライドの塊である彼女は、返却を催促するようなはしたない真似をしたくなかったようだ。

「…ともかく、アナタ方は組織の法を犯そうとしています。それを見すみす見逃すわけにはいきません」

エリはムツとなり、「そう神経質だから、小ジワが多くなってるんじゃないですか？」

「なっ…!？」

「ファンデで誤魔化したって判りますよ。清芽先生にも内緒で相談してるでしょ」

「ア、アナタは！」

「エリっ、口を慎め！」

もう勘弁してくれっ。

酒顔が心で泣きながら仲裁しようすると、「あの………」と頼りない声が割り込んできた。

「何ですっ!？」

「いつっ…!」

メルセデスのキツイ口調に、誠は萎縮してしまった。

しかし彼女も鬼ではないので、まるで小動物のようにおどする彼に、「ご、ごめんなさいねっ!？」 つい反射的に…」と慌ててフォローを入れたのだった。

こういう生々しい対応を、誠は本物だと思って見ていた。

感情的な人もいれば、逆に理知的な人もいる。

きつと裏表がある人ばかりなんだと思う反面、彼らが決して悪人

ではないという確信が胸の奥から湧き立っていた。

彼らなら 信用できるかもしれない。

「ボ、ボクは、ここに残ります…」

「え、マジ？」

確率論的には想定内だったが、現実的には予想外の一言に、一同は驚きを隠せなかった。

「人殺しの世界に関わるのには抵抗があります。それはずっと変わらないでしょうけど、皆さんがヘレティックとか、世界とかの為に必死になっているのは、分かりましたから…」

「マコト君…」

エリの微笑みはやっぱ綺麗だった。

誠は気恥ずかしくなって頬を掻いた。

その様子に何を思ったのか、メルセデスは厳しい目を変えずに訊いた。

「ずいぶんと物分りが宜しいですね」

「んなこたねえよ。コイツのせいで、俺がどれだけ生傷作ったと思っただ」

その件に関しては、執務室から中継で拝見させてもらった。

彼ららしい体当たりの提案には反対だったが、ボスが許可をすれば異論は無かった。

結果的にこうして好転しているわけだから、本来ならば喜ぶべきところなのだろう。

だが、今回は彼女にも彼女なりの考えがあり、それはボスの意見とも合致していた。

「…私がわざわざ身内を盗聴するなどという下卑た真似をし、ここに顔を出したのは、ボスから下された命令を遂行する為です」

空気が変わった。

誠は隊員らの様子からそれを察し、息を呑んだ。

「マコト・サガワ、アナタにはある嫌疑がかけられています。不躰ですが、記憶をのぞかせて頂きます。拒否権はありません、どうか静粛に」

「ちよつと待てよ、どういう意味だそりゃあ」

「そうよ、マコっちゃんは何したって言うのよ！」

「それを今から探るのです」

「メルセデス秘書官、自分も説明を求めます。彼にかけられている疑いとは、一体…」

「…バーグの搜索が、本格的に開始されました」

キーキーと喚く彼らも、バーグという人名には黙ったようだった。それは彼らも心のどこかで、同じことを考えていたということを示していた。

「ボスは、何故バーグが彼　マコト・サガワの保護を求めたのか不思議に思っておいでです。そう、アナタ方と同じように」

「つまり、彼がバーグの送り込んだスパイだと仰りたいと？」

「バーグが敵か味方かも判っていないのにですか！？」

「あの情報屋は、私共を支援してくださっている資産家とはワケが違います。本部の誰かによる情報漏洩の可能性が消えない以上、彼の行動やその意図に対して、万全の態勢で臨むべきです。その為にはまず、彼が黒か白か、明確に判じておくことが急務となります」

「そりゃそうでしょうけど！」

「彼のセンスは、あろうことかあの《韋駄天》です。この意味は、組織の全員が理解しています。もしも彼がスパイであつたら……!!」

後続く言葉は口に出すだけでも、考えることさえもおぞましい。

「もしもそうだとすれば、我々はもう、この世にいませんよ」

彼女が自重したセリフを、酒顛は声にした。

もしも誠がREWB Sの尖兵で、《韋駄天》を十二分に扱える技量の持ち主であつたなら、彼を本部に連れてきたその瞬間に、全員が抹殺されているはずである。

メルセデスは苦い顔を浮かべながら酒顛を睨み据え、「……それでも、かけられた疑いを晴らすには、身の潔癖を証明するほかに術がありません」と誠の頬に触れた。

手つきは優しいのに、冷酷な視線を向ける彼女に、誠は本能的に後ずさった。

「な、何をするんですか……!?!」

「私のセンスは《記憶窺見》メモリー・ウォッチ。他者のこれまでの記憶を、断片的にのぞくことができます」

「通称《出歯亀》ボイエリズム。根っからの痴女で御座います」とエリ。

「本当にアナタは失礼ですわね、訴えますわよ」

「どーもすみませーん」

反省の色が見えない彼女に眉を上げつつ、メルセデスは誠のアゴを掴んだ。そしておもむろに自分の左手の親指の腹を歯で切り、血の滴るそれを彼に近付けた。

エリが青ざめて、「ドSきた! ドSきた!!」と騒ぎ出す。

誠も、「いやっ、ちよっ、何か怖い何か怖いっ！！」と仰け反るが、グッとメルセデスに引き寄せられ、「我慢なさい！！」「ふぐうっ！？」あっという間に血塗れの指を口内に突っ込まれた。

「舐める！！」

「はうううっ！？」

四十路過ぎの女が、思春期真っ只中の少年に、自分の血を舐めさせるという絵面。日本のホラー映画でも中々御目にかかることのできない、R指定確定のワンシーンだった。

「良い子も悪い子も、マジで危ないから絶対に真似しないでね」とエリは誰かに伝えた。

そんなのいいから、助けてよっ！！

誠は心の中で目一杯叫んだが、彼らは同情の目をくれるだけで何もしてくれなかった。軽く失望してしまった。

メルセデスは彼の記憶を思ふようにのぞけないのか、「もっと吸うのっ、そう、あんっ」

「キモッ！！」

エリの暴言を耳の端に捉えた瞬間、彼女の脳内を異質の光が駆け巡った。目蓋の裏にシナプスの電気信号がキラキラと輝いて、光の帯が広がった。

メルセデスは 誠の過去を見た。

オギヤアと産まれた日のこと。

幼稚園の入園式で母に引かれた手の温もり。

小学生になる前に去らなければならなかった東京の風景。

両親が旅行に行ってしまった朝。

父方の祖母に引き取られて帰った故郷。

そこで再会した少女は、何かを言って

彼女はまるで、拳銃で脳天を撃ち抜かれたように、ガコンと顎を上げた。足から脱力するが、何とか踏み留まる。

「…大、丈夫なんですか？　いつもならもつとフラツとして…」

彼女のすぐ後ろには、酒顛が待機していた。いつもならば、そのまま仰向けに倒れてしまうのだが、今回は彼の気遣いも無駄に終わった。

その個人に蓄積された記憶を、自身の特殊な血を通して全て受け止める。加減して使わなければ脳に何らかの障害を来たす可能性も、医師の清芽ミノルやメギド博士によって示唆されている。あまり多用できないセンス　それがメルセデスの《記憶窺見》である。

メルセデスは酒顛の親切を手振りで断ると、とんでもない体験をしてしまつて震え泣く誠を、ぎゅつと優しく抱き締めた。「……ごめんなさいね」と耳元で囁く彼女の頬は、ほんのり桜色に染まっていた。

「早っ、ツンデレ転換早っ！！」

別人のように誠の頭を撫でる彼女は、「彼は、白ですわ」と呆気なく彼の無実を認めたのだった。

「ベタベタしてるし！　何かもっ、ただのシヨタコンじゃん！！」

「アナタっ、さっきから五月蠅いですわよ！」

金切り声での取っ組み合いが始まつてしまい、酒顛は彼女らを引き剥がした。「それで、何が見えたんです」と彼が問うと、「こんなに空っぽの頭をのぞき見たのは、ナマケモノ以来ですわ」と真顔で彼女は答えた。

「ひどいい…」

メルセデスは任務の都合上、ナマケモノの記憶を探ったことがあった。その時は不潔な野生動物の唾液で傷口が化膿してしまっただ変だった。

「ただ…、彼の記憶の中に、何か、黒い……」

誠の中に、少女の姿を見た直後のことだった。

暗闇の中に浮き立つ一筋の光のようだった彼女を、闇とは別の、さらに黒々とした何かが呑み込んだように思えたのだ。

アレは、手か…？

「いえ、何でもありませんわ」

抽象的な表現はポリシーに反する。

ただでさえ自分もヘレティックで、ジレンマを抱えて生きているのに、見て感じた物くらいは具体的な表現で説明したい。説明できないものは、説明できる段階まで箱の中に仕舞っておく。

メルセデスは、そういう性分だ。

「ともかくバーグに関する記憶は、アナタ方の話を聞きかじった程度でした。それでは私は、彼の組織への参加希望も兼ねてボスに報告してきます。御協力、感謝致しますわ」

組織特有の敬礼を済ますと、振り返ることなく会議室を後にした。祭りの渡った後のようになり、何だったんだと肩を落とす一同の中、エリは誠に訊いた。

「どんな味がした？」

「ト、トラウマの味です…」
「まあ、良い表現」

メルセデスが美人だったから良いものの、そうではなかったり、同性であつたりすれば、トラウマどころか再起不能。首を吊つてしまつてもおかしくないほどショックな出来事だったに違いない。今後は疑われないように努力しようと、密かに誓う誠だった。そんな少年に、酒顛が問う。

「マコト君、良いのか？　コレでキミは、元の世界へ引き返せなくなつたんだぞ」

彼の言葉があまりに直截的で、誠は彼と交わらせていた目をゆつくりと下げた。その短い間に、表世界への未練を思い浮かべてみたが、拉致されたばかりの時にあれだけ泣きじゃくっていたのが嘘のように、彼を縛るものが何も無いことに気付かされた。

では何故、自分は泣いたのだらうと過去を振り返った。

だが、大きな壁が行く手を遮つて、それを押し退けようとする手足を絡めとられてしまった。

記憶という糸を断たれた誠には、もはや引き返す場所など、当に無かつたのである。

「…急に、選べなくなつたんです。僕には何も無いって、解つちやつたんです」

「諦めたということか」

「違います」

「……………」

「裏世界のこと、ただただ怖くて、どうしようもなく怖くて仕方なかったんですけど、でも、皆さんは悪い人じゃないってことは、分かりましたから。だから、今のボクの居場所はここしかないんだ

から、ここを大切にしようかなって…」

訪れかけた沈黙を、ケンが破った。座り込んだままの誠の二の腕を引き上げ、「これから先、テメーは誰かを殺すことになるかもしれないぞ」

「…ボクは、誰も殺しません」

即答する彼に、「無理だ」ケンは深く寄せる眉根をゆるめなかった。

「皆さん、言いましたよね？ この足があれば、そんなことをしなくても任務をこなせるって。自信過剰かもしれないけど、ボクは皆さんにも人を殺してほしくないんです」

対する誠は狼狽えず、力強い瞳で言った。

「昨日の作戦で、酒顛さんとウヌバさんは、戦いながらすごく辛そうな顔をしていました」

酒顛達は顔を見合わせた。

彼はあの状況下で、そんな所に目を付けていたのかと。

いや、そもそも、自分は戦闘中にそんな顔をしていたのだろうか。冷血を燃料にした殺戮兵器と化していたはずなのに…。

「エリさんは、ずっとボクの手を引いてくれて、心を落ち着かせてくれました」

「まあ、昨日は刀忘れちゃったし…」

室内の隅に置かれた太刀懸けに、朱塗りの鞘に収められた日本刀

が二振り置かれている。エリの愛用する奇刀 紅炎双爪こうえんそうそうである。

この本部や輸送機の装甲にも利用されている特殊合金を、さらに兵器用に改良して鍛え上げた次世代の刀だ。

「ケンさんは、怖いことを言いながらも、敵の人に手を抜いていました」

「……………」

「皆さんはヘレティックとか世界とかの為に、必死に戦っていました。その意味を、実際にこの目で見て解ったんです。皆さんは嘘をついていなかった」

「死ぬかもしれねえぞ」

「そうならないように努力します」

「努力つてテメー、小学生の抱負じゃねえんだぞ。記憶を取り戻したいんじゃないのか。普通の生活に戻りたいんじゃないのか」

「取り戻したいです。戻りたいです。でも、表世界にボクがいたら、きっと普通の人に危害が加わってしまいます。そうでしょう、エリさん」

「日本と私の故郷とじゃあ、環境はまるで違うけど。でも、事件やテロなんてものは、どこでだって起こすことができるわ」

「起こす……」

「自然現象じゃないのよ。人が意図的に、理不尽に、無差別に起こすものなのよ。そこがどこであろうと関係無く、全ては起こす側の都合によってかき回されるの」

「ボクは、それを黙って見ていられるほど薄情じゃありません。だからここに残って、役に立てることに全力を尽くします……！」

「昨日リーダーが言ってたわよね。私達以外のヘレティック集団 REWBSは、キミを道具にしかないって。私達はそれを黙って見過ごせるほど、薄情じゃないの!？」

先日、エリが誠に対して言った言葉だ。
彼の心にしっかりと響いていたんだ。

静かに笑うエリと同じく、酒顛も震えていた。誠の肩を力任せに
掴んで目の前に寄せた。

「ヘレティックとして生まれついた者の一人として、その責務を全
うできるんだな？」

「悩んだ時は、皆さんに相談しても良いですよね？」

酒顛の血走った双眸が見開かれ、「良いんだな！？」念押しの一
言に、脳髓から指先まで痺れた。

「…はいっ」

酒顛の鼻の穴が、興奮のあまり大きく膨らんだ。

「素晴らしいっ、素晴らしいぞマコト君！！ 日本男児はこうでな
ければ！！」

口をへの字にして、おいおいと男泣きしている。

「日本男児って、そ、そんな大袈裟な…」

「よしっ、俺もケンに倣って、今日からお前のことをマコトと呼ば
う！」

拳を握って、何かを確かめるようにうんうんとうなずく。

バシンバシンと細い身体を叩かれた誠は、仕舞いには勢い余って
踏鞴を踏んだ。

「ええーっ、マコトちゃんにしましょーよー！」

よるける誠の身体を、エリが優しく包み込んだ。
満面に朱を注いで恥らう少年をどう思ったのか、「呼び方なんて
どうでもいいだろうがよ」ケンはまた不機嫌な口調に戻っていた。
エリは少し上がっていた口角を隠して、「うん？ ワンちゃんは
黙っててよ」

「誰がワンちゃんだ！」

「呼び方はどうでもいいんじゃないの？」

「てんめっ」

「じゃあネコちゃんにしようか？ にゃあ〜お〜」

「んだと、プレデター女！ ドレッドヘアーにガスマスクつけて出
直してきやがれ！」

喧々囂々。

お決まりの痴話喧嘩だったが、馴染めない誠は困惑を隠しきれな
い。

そこへアフリカ人 ウヌバが手を差し出した。

「歓迎すル」

初対面の日を思い出した。

あの時、ウヌバはこの右手から炎を発した。それは触れると熱い、
紛れもない本物だった。

「…あ、はい」

誠は鉄板の温度を確かめるかのごとく慎重さで、恐る恐る右手を
差し伸べる。

ウヌバは小さなそれを潰さぬように、指だけで軽く握ってやった。

「だが、オマエ弱い。認めルノ、マダアト」

そう言い残して彼は背を向けると、また部屋の隅で服屋のマネキンよろしくの無機質な体勢で佇立したまま固まった。動けば圧倒的な存在感を誇るのに、こうして棒立ちするだけで背景の一部になっ
てしまうのは、ある種のセンスに思えた。

作戦時の、真剣でにべもない表情からは想像できない、和やかで騒がしい現状に、誠は心底驚いていた。

まるで普通。異端者だとかは関係無い、ごく普通の人間の営みだ。誠は気負っていた自分が馬鹿らしくなり、脱力して笑みをこぼした。

「騒がしくて悪いな。コレが平時の我々だ。任務が無ければ、こうして日がな一日、愉快に過ごせるといわけた」

期待しているぞ、マコト。

酒顔はニカツと白く大きな歯を輝かせた。それを受けた誠の腹が、ぶるりと震えた。

こんな、人より欠落した自分も頼られている。全身が力んで、空回りしそうになった。

そうこうしていると、「マコト君、決めてしまったのかい!？」

と白衣の優男　清芽ミノルが駆け込んできた。

すぐにメルセデスを思い浮かべたエリは、「あの人、結構お喋りですね」

清芽は言った。

「キミはまだ子供で、重い障害を患っている身だ。考え直せないかい?」

「ありがとうございます、先生。でも、もうボクには、これくらい

しか選べませんから」

「そんなことはない。戦わなくなつて、僕やメルセデスくんの助手になることはできる。非戦闘員として組織に関わる道だつて残っている。戦うことだけがヘレティックの全てじゃない」

「それじゃあ、この足は役に立ちません」

「その足は戦いにしか使えないと思うかい？ それは、兵士の理屈だよ」

「兵士の…？」

「そうさ。裏世界だつて血で血を洗う争いで満ちている。ヘレティックのセンスと呼ばれる力が、その特異性から兵器転用されるのも当然の流れだ。だけど、僕らは兵器そのものじゃない。命があり、血の通つた一人の人間だ。それなのにキミは今、自らを力という寂しい単位の一つに規定しようとしている。それは 不幸だ…」

業を背負うには早過ぎる。

清芽は、自らに軽率な判断を下す誠に思い留まつてほしかった。人を殺してからでは遅い。

全てのヘレティックが他者の命を刈り取ることに慣れてしまつては、今後永遠に、自分達は裏世界から逃れられなくなる。国際社会から存在を認められるようにならなければ、ヘレティックはその名のとおり、世界の異端者のままだ。

「約束できますよ」

誠は落ち着いた面持ちで言った。

その真っ直ぐな目は、清芽の懸念を穿ち、心から抜き取るうとしていた。

彼は小指を立てて、「殺しません。誰も、殺したりしません」

決意が光の泡になって、彼の双眸の中で瞬いている。

一種のブラシーボ効果に違いはないのだが、分かっているも雪町セ

イギと重なってしまう。面影ではなく、彼と同じ　高潔な意志によつてだ。

「ボクは、目を背けて逃げることの方が、卑怯だと思っんです」
「！」

そんな言葉は、二十年も前に嫌というほど自覚している。
他人の死を理由にして、前線を逃げ出した時から、ずっと。
無垢な少年の、裏表の無い正しいだけのセリフが、恨めしく思えてならなかった。

しかしだ、「…そうだね。そうかもしれないね」そんなことが、彼から自由意思を剥奪していい理由にはならない。現実逃避した自分が、他人を強制するなど滑稽な話なのだ。

「辛いことがあればすぐに言うんだよ。記憶のことについても、これからも引き続きしっかりとサポートさせてもらうからね」

二人は小指を絡め、クラシカルな約束を結んだ。

戦争のせの字も知らないような少年の、夢のような抱負を丸ごと信用してしまうなんてどうかしている。無理だと分かっているのに、彼が過ちを起こすことを分かっているのに、口を拭うのもどうかしている。

しかし、清芽には、口を挟んでいい資格が一つも無かった。
メギイドは先日言った。

？人権を軽んじた私が言うべきことではないが、個人や立場の違いで、正しい物言いへの受け取り方を変えるべきではない？

違いますよ、博士。

言葉は、口にする人間によっても変わるものなのです。

私には 情けない私には、少年一人を薰陶できるほどの徳は無いのです。

清芽は、誠から視線を逸らした。

それでも誠は、「ありがとうございます」と邪気の欠片も無い顔を浮かべる。

清芽は如才ない笑みを返した後、齒を噛んで酒顛に一瞥をやった。彼は一考もせずに首を縦に振ってくれた。

安心できるはずもないが、今はこれが最善なのだろうと無理に納得せざるを得なかった。

立ち去ろうとする清芽の背中が、どこか寂しげに見えた。

誠は彼に声をかけようと思ったが、そこへ今度は数十人の大男達が、会議室に大挙して押し寄せてきたのだった。

「マコトってのはどいつだあっ！」

「歓迎するぜチェリーボーイ！」

口々に下品な言葉を並べ立てながら、兵士やら研究員やら、果ては清芽の部下に当たる看護士連中まで、早河誠を一目見ようとやってきた。

全ては見えた目とは裏腹に軽い口を持っていたらしい、メルセデス秘書官が発端だ。所構わず情報を垂れ流している彼女が、組織の情報漏洩を気にしているとは、笑うに笑えない話だ。

そうこうしていると、続々と会議室に人が雪崩れ込んできた。

「ぐあっ!?!」

「今変なところ触ったでしょ!!」

「イツテ! 誰だ今、俺の脛蹴った奴! 出てきやがれコラアッ!」

まるで都心の早朝ラッシュだ。

運良くそこから逃げ出せた清芽は、何かが弾ける音を聞いた。微

かに火薬の匂いがする。

ゾツとしたが、カラーテープがヒラヒラと舞っていたので、クラッカーだと分かった。とりあえず祝う気はあるらしいと知り、彼は一人取り残された通路で肩をすくめた。

「ハハハ、コレは参ったな…。ん、アレ、博士もいらしていたんですか」

組織も人種のサラダボウルと言っても過言ではない。

その中でも目立つ白頭翁　メギイドは難しい顔をして、会議室前の少し外れに立ち尽くしていた。室内を気にしている様子だった彼は清芽の声に気付くと、目を伏せてから口を開いた。

「彼が入隊したと聞いてな。顔を見に来たのだが…」

「そうでしたか。連れ出しましょうか？」

「…いや、いい。近いうちに逢うことになるだろう。今日のところは、私も時間が無い」

「そうですか。ですが、あまり御無理をなさらないでください。博士に倒れられたら、皆が困ります」

メギイドは目を逸らし、「…そうだろうな」とつぶやいた。

様子がおかしい。目元のシワが一層深くなっているように見え、薄っすらと隈もできている。徹夜明けだろうか。

清芽が思案していると、メギイドは立ち去っていった。

その背中が視界の真ん中に収まった時、彼のセリフが鼓膜の奥で反芻した。

「逢う………？」

* * *

昨日の歓迎パーティー（？）で室内の地層が一つ増したように思うのは気のせいだろうか。

クラッカーやカラフルなとんがり帽子、ポップコーンのアルミ製の皿だとか、ケーキを切ってそのままの包丁までもが放置されているという落花狼藉の有様だ。

テレビで見たことがある。俗に言う　ゴミ屋敷だ。

誠も整理整頓をポリシーとしているわけではないのだが、いつかこの部屋は掃除しなければならないような気がした。

今日はミーティングがあると聞かされて、誠はこの部屋へ来た。本当ならば昨日行なわれるはずだったのだが、当然その時間は無く終わった頃にはほとんどの大人が泥酔状態だった。

誠は仕方なく清芽のいる医務室で眠ることになった。

そうして現在だ。

室内壁面に備えられた高解像度の巨大モニターの前に、ハイヒールを履いた一人の女が立っている。

自然と誠達　第一実行部隊の面々は、彼女に注目を集めた。

「世界大戦の終わり頃には、すでに組織はPCを開発していたの。だけど、現在の表世界の形態とは違っていたわ。違いの理由　分かる？」

そう言ってエリは、指し棒の先端を誠に向けた。

今日の彼女は、何故だかキリッとしたスーツに袖を通した教師スタイルで、また性懲りもなくメルセデスから拝借したらしいインテリ眼鏡のブリッジを、指先でくいと上げた。

ほころんだ顔を見れば分かる、ノリノリだ。

中々綺麗な姿勢で椅子に座る誠は、「わ、分かりません…」と目のやり場に困りながら声をくぐもらせた。

「少しは考えるよ」

誠の隣には、円卓に足を乗せてだらしなく座るケンがいる。銀髪と三白眼が相俟って、その風貌は素行の悪い生徒の理想像と言えるものだ。

つまり、エリの妙な役者魂に火を点ける起爆剤となってしまったのだ。

「コラそこっ、雪町君。早河君をイジめないの！」
「イジめてねえよ！」

「私は教師の鑑 エリ八先生。あんまり聞き分けのない子には、私は体罰も辞さない覚悟を持っているわよ。モンスター・ペアレントなんて、恐るるに足らずなんだから」

「エリ八先生よお、おさげに赤ジャージの方が良かったんじゃないのか？」

「そんな恐れ多いこと、できるわけじゃない」
「は？」

「もしも私がああ格好をして似合っちゃったら、三十路にもなって頑張ってたあの女優さんの立つ瀬が無くなっちゃうじゃない！ 三十路であれだけ可愛く似合う人なんてそうそういないわよ！」

「お前がドラマ派なのはよく分かった」

「ふふん、そんなことより雪町君。あまり私に逆らわない方が身の為 いえ、耳の為よ」

そうやって彼女は、まるで核ミサイルの発射ボタンを握ったような意地悪い顔をして、子供用の防犯ブザーらしき物をケンに見せつけた。

すると彼の色白の顔が、さらに青ざめていく。

エリはくすくすと嗤って、卵型の本体から伸びるヒモの先に付いた、ステンレス製の輪っかに指をかけた。

「テ、テメー、鳴らすなよ……？ それ、百デシベルだぞ。百つつたらテメー、下手したら俺の鼓膜潰れちまうぞ……！！？」

百デシベル程度の音圧ならば、通常の人間の鼓膜は軽く耐えることができる。また百三十を越えると危険だとされている。

だが、優れた聴覚を持つケンにとっては、たったの百でも警戒域に達している。

「シャッター付いてるんだから大丈夫だって」

「弁^{バルブ}つつうんだよ！」

エリは、「球^{バルブ}根？」ととぼけて、輪っかを引っ張る。

「分かった！ もう余計な口挟まねえからっ、その輪っかから指外せ！」

今回は早目に決着がついたようだ。

ケンは必死に怖い話を回避している子供のような、情けない格好になっていた。分かれば宜しいと、エリが防犯ブザーを胸ポケットに直すと、彼は心底から胸を撫で下ろした。

誠はそんな彼が不憫でならなかった。

「では理由を　酒顛君、どうぞ」

彼女はそう言うと、酒顛に指し棒を渡して席についた。

「んおっ、飽きるの早いなお前！」

「だって私、コレ着たかったただけだもーん」

* * *

一方その頃メルセデスは、自室のクローゼットを開いたまま停止していた。

スーツが一着足りない。しかもお気に入りの、青みがかった黒い高級スーツだ。セットにして掛けていたシャツも、ハンガーごと消えている。そう言えば眼鏡ケースも、コレクションから一つ無くなっている。

あの小娘か。

年甲斐も無く、自由奔放の限りを尽くす女性隊員の顔を思い出したメルセデスだったが、返しなさいというセリフ一つ言いに行けなかった。

催促は酷くみつともない行為に思えて、プライドが許さない……。メルセデスは、項垂れた。

* * *

「正解はな、インターネットだ」

戻って、会議室。

酒顛が指し棒を握って、モニターの前に立っていた。

エリとの、このスーツ貸しましょうか？ などのやりとりがあった後だ。

「あくまで我々は裏の人間だ。極秘で人工衛星を打ち上げることなどできるはずもない。しかしネットワークの概念は、第一次大戦当時から存在していた。実際に用いるには、表世界の技術が発達する日を待つしかなかったただけだ。ヘレティックにしかできん技術というわけでもなかったからな」

今日、回線をつなげる環境下にありながら、PCにインターネットを接続しないというのは、時代錯誤極まりない行為である。

しかし戦後の裏世界では、自らの存在を隠し通す為に、あえてその愚行に及ばなければならなかった。とりわけその頃から、表世界のおよそ百年先の技術を保持し続けていたこの組織では、宝の持ち腐れ感は一入だった。

「その為、PCの機能だけが進歩を重ね、汎用性を高めていった。そんな中、ようやくワールド・ワイド・ウェブが広がりを見せ、世界をつなぎ始めた。我々も待望していたそのネットワークを活用し、世界中に支部を置いて活動の幅を広げることができた。今日、我々が高度な技術を手にできているのは、ヘレティックのセンスだけではなく、そうした高次のPCがあればこそだった」

当然ながらサイトを立ち上げているわけではない。あくまで情報活動の一環として、もしくは任務の性質上、敵側にウィルスやワームを送り込む手段としてである。

「ここで、話を ユリオン に戻そう。 ユリオン のその狂的な概念が発案されたのは、今から遡ること六十年程前 表世界で米ソが冷えきった戦争を起こしていた最中のことだそうだ。来るネット時代を間近に控え、各地の支部に送り込まれるはずだったPCの内の一台が、輸送中に行方不明となったことがきっかけだ」

「盗まれたってことですか？」

酒頭はうなずいて、「その盗まれたPCの名称が、 ユリオン 。REWB Sのマッド・サイエンティスト達はそれを使い、人工知能プログラムを作成した。 ユリオン の名は、やがてシステムその物のコードネームとなり、最終的には昨今の意味合い 完全自立学習型ハイパーコンピュータという位置付けに収まった」

ユリオン を騙ったPCやデータに翻弄されることは少なくなかった。

二十余年前、ようやく探し当て、破壊したはずのそれも、今になって再びその名を轟かせている。時が経ち、馬鹿げたコンセプトの現実味が増していく様子は、真綿で首を絞められている感覚と同じだ。

「あの……、いまいちピンと来ないんですけど、自立学習って、どういう意味ですか？」

「難しく考える必要はない。人間と同じだと考えればいいんだ」

「人間と？」

「ただ違うのは、底無しの記憶力を持ち、底無しの暗唱能力を誇り、底無しの計算力、応用力、予測力や発想力を秘めているということだけだ。ユリオン に与えられた資質、求められる理想とは、溜め込んだ知識を最大限利用して、兵器を自分で考案から開発、ひいては完成・使用まで達成する シンキング・メモリー ？ 思考する造兵廠？であることだ」

誠は目を剥いて身を乗り出した。

「工場その物が、勝手に兵器を生産するってことですか……！？」

「人間社会に介入しないようにブロックワードを組み込むことで、兵器開発のみに特化したシステムをとると言われている。だがそれは逆に、人間的、あるいは政治的判断を無視した、大量殺戮につながる兵器を必要以上に生み出すことにもなる。過剰攻撃オーバーキルというやつだ」

「どど、どうしてそんな危険な物を造るんですか？」

当然の質問に、ケンとエリが答えた。

「金になるからだろ」

「後は、科学者の知的探究心ってやつね。馬鹿みたいに安直だけど」
「そんな物の為に、ですか？」

くだらない。

つまらない。

馬鹿げてる。

誠は怒りと恐怖で、全身を粟立たせていた。

酒頭は腰を浮かせる彼の頭を押さえつけ、撫でながら座らせた。

「独裁者相手には必要とされるんだ。使用の権利を譲渡するのは、
自分達が使つよりも利口な判断だ。少数派である我々 ネイムレ
スREWBOSとその他諸々 では、リスクが高過ぎる代物だ」

ヘレティックもそれぞれに主義主張があるが、その大半が闇商売
への道を辿る。

しかし国家を持たず、組織や団体規模でしか活動できない彼らで
は、相当な準備をしない限り、兵器を自ら扱ってテロ行為に及ぶと
いうことは難しい。その上で勝利するなど不可能に近い。

「で、でも、もうこの前の作戦で、その心配は無くなったんですよ
ね？」

モニターには、年代別の ユリオン の軌跡が表示されている。
酒頭はタッチパネルでもあるそれに触れ、ウィンドウを全て閉じ
た。無地の背景が映り、その中央に妙な記号が映った。

？「

「？

鍵カッコの中に、全角スペースを四つほど置いた、不思議な羅列

だ。

「それが、な。実はそうでもなさそうなんだ…」

「え…？」

酒顛はそのカッコの中を眺めながら、言葉を濁した。

昨日、ボスから受けた報告が脳裏を掠めていく。少年を一喜一憂させて楽しむ趣味は無いが、現実には容易でないことを教えなければならなかった。

「先日突入した敵施設には、ユリオン の外部装置こそはあったが、肝心のメインシステムは発見されなかったんだ」

「それって、マズいんじゃない？」

「マズい」

「ああ、やべえーな」

「か・な・り、ヤヴァいよねえー」

「ムウ……」

「そんな呑気な！」

困惑する誠の肩に手を置いた酒顛は、モニターの端に表示されたファイルを開いた。

アフリカ大陸が映り、その西 北大西洋に浮かぶ、とある小さな島国を拡大した。

「そつだ、悠長に構えておれん。だから今回、新たな任務が発令された。二日後、我々第一実行部隊は、北大西洋マカロネシアに属する、マデイラ諸島へ飛ぶ」

すっかり正義感に目覚めてしまった誠は、そのクツキーの食べカスのようにちつぽけな島を、ジッと睥睨するのだった。

* * *

マデイラ諸島の一島とされる、小さな無人島。

そこは組織によって要監視区域に指定されているポイントの一つだった。

しかしどういうわけか、数年前からポルトガル軍が駐留していることが判明し、島内の状況確認が躊躇われていたのである。組織内では、法はともかくとして、完全に表世界の所有物なのだろうということで、監視区域から外すことも検討されていた。

それが半年前を皮切りに異変を齎した。

それまでは月に一度、フェリーでそこへ運ばれるのは、食料の詰まったコンテナが数台だけだった。核兵器の開発施設かもと疑われていたが、延々と繰り返される食料の追加で、その可能性は露と消えたのだった。

コンテナの中身が食料であるということは、諜報員がリスボン港で確認済みだ。

だが半年前から、コンテナの形状が、一般的な輸送物を載積する20ft級のドライ・コンテナから、重量物を運ぶ40ft級のオープン・トップ・コンテナへと一変したのである。

中身は、不明とされた。

さらには先日、第一実行部隊による中国山岳部基地襲撃作戦の直前に、島内へおよそ十台のオープン・トップ・コンテナが次々運び込まれていくのを確認されている。

小さな島のどこに、そんな物を必要とするエリアが存在するのか疑問が尽きなかったが、ついに昨日、大きな手がかりを入手することに成功した。

島に駐留していたのは、ポルトガル軍に偽装した別物の軍隊だったのである。

ボスに送られた調査報告書によると、組織のブラックリストに名

を連ねる者が数名確認されており、ヘレティックの武装集団であることはまず間違いなかった。

食料ばかりのコンテナから、重量物用のコンテナへの移行。
ヘレティックの武装集団。

ユリオン に関する資料…。

それらの情報を照らし合わせ、そこから浮上した推測が、本来無人島であるこの場所で、ユリオン に関連する何らかの研究が行なわれているのではないか ということだった。

システムを開発する程度ならば、エネルギー以外に大がかりな資材は必要とされない。

小さな無人島でも、地下に施設を作れば、外から発見されることはない。また、百を越える所属不明の集団が警備に当たるだけの価値がある研究があるとすれば、それは間違いなく ユリオン クラスの何かだった。

島への突入は、慎重を喫する。

情報統制や、各支部からの応援。

軍備や突入経路の確認。

作戦実行の全ての条件が整うまでに最低でも二日は必要だった。
敵が海中から脱出する虞も見越して、島周辺の海域では DEM 搭載型潜水艦が監視を続けている。

ボスは、命令を下した。

表の意表を突き、裏の中だけで肅々と終わらせる強襲作戦を、発令した。

* * *

「何かゴヨーでしょーか」

ボスは、エリの面倒臭そうな声を後頭部に受けた。自分で彼女を呼び出していながら、腰掛けている椅子を勿体ぶって正面に戻し、

彼女にいつもの鉄仮面を向けた。

執務室。殺風景な部屋だ。

バスケットボールのコートほどの広さであるにも拘らず、出入り口の大きな扉から最奥の深海を映す強化ガラスまでは、彼の使う執務机しか置かれていない。

左右の壁には背の高い本棚が林立しているが、陳列されている本はどれも辞書のように分厚く味気無い書物ばかりだ。天井の高さも不気味で、有り余った空間はそれだけで贅を極めているように思えてならなかった。

ソファ一つ、テーブル一つ置かれていないところを見ると、誰かを招待する気も、応接する気も無いのだろう。

彼は裏世界の象徴で、この名も無い組織の総督。国連事務総長や米国大統領にその存在を知らせ、世界保全の為と言いながら、不可侵条約を半ば強引に結ばせている彼は、協議にすら応じない彼は、この場で茶を交わすつもりなど微塵も無いのだろう。

もてなす相手が一人もいないというのは、それはそれで寂しいことだろうに…。

そんなことを思いながら、エリは気だるい空気に肩を落とした。すると、「背筋を伸ばすつ、口の利き方も正しなさい！」とメルセデスが彼女の腰を叩いた。

「きやうつ！ 痛いじゃないですか！」

「やはりシュテンに教育を任せたのは、間違いだったみたいですわね」

「スパルタママンに育てられるより、よっぽど良かったと思いますけど」

「それは、誰のことかしら…？」

「さあー」と口の減らない彼女に、メルセデスはもう一発見舞った。短い悲鳴が弾ける。

エリは、南米の孤児だった。

その彼女を、ヘレティックだということを理由に酒顛が保護して、ここへ連れてきたのが十一年前だ。

当時酒顛も二十代であった為、メルセデスは彼が育て親になることを懸念していた。彼女に半分、日本人の血が混じっているから共^{シン}感を抱いたという彼の動機も、不純に思えた。

だからメルセデスは、自分が面倒を見ると名乗りを上げたが、エリ本人が懐かなかった。

故になのか、メルセデスとエリの関係は未だに平行線のままで、互いに不器用なコミュニケーションしかとれない状態が続けているのだった。

「手癖の悪い子供にはお仕置きです」

メルセデスの部屋から勝手に拝借した、高級スーツと眼鏡を思い浮かべた。

しかしエリは、自分の行ないを棚に上げ、「返してほしかったら返してつて、素直に言えばいいのに」と、いけしゃあしゃあとのたまうのだった。

「私はアナタのような下等な手合いと違って、大らかな心を持っているだけです」

「何ですか、それ。しょうもな」

終始エリのペースだった。

生真面目な分、からかわれやすいという構図は、ヘレティックであつても変わることはないらしい。

メルセデスはキーッと金切り声を上げて掴みかかるうとするが、「下がりましたまえ」という鶴の一声に邪魔されてしまった。

彫りの深い双眸が、二度も言わすなよと伝える。

メルセデスは息を呑み、反射的に踵を合わせた。姿勢を正し、「は……！」まるで指令を忠実にこなすロボットのように、彼女は執務室を後にした。

ホント生真面目、尊敬しちゃう。

エリは胸中でつぶやくと、ボスと視線を交わらせた。

彼は、固い口調で言った。

「単刀直入に言う。マコト・サガワに、刀の使い方を教授しろ」

？御苦労、次の指示があるまで待機。次の任務も最善を尽くせ？

以外のセリフを聞いたのは久々で、にべもない高圧的な物言いも相変わらずだ。

やはり鉄仮面のような顔は硬直したまま動かないし、人らしい臭気も漂わせていない。本当のロボットはあの秘書官ではなく、この男の方だとは思えないほどだ。

冗談が脳裏を過ぎ去っていく中、エリは稀に見る慎重な言葉遣いで答えた。

「……お言葉を返すようで申し訳ありませんが、了承しかねます」
「理由は」

「彼は、人殺しを良しとしていません」

「ならば彼を、戦場でどう使う」

「ここで掃除でもやらせて、組織のマスコットにしちゃえばいいじゃないですか」

軽くなったのは口調だけだった。生固い目は険しくなる一方だ。
エリは思う。

早河誠は、精巧なガラス細工だ。

センスもさることながら、想いの純粹さには胸を衝かれる。一つでも欠けてしまえば価値を失ってしまう、完全な無垢だと言っても

過言ではない。

そんな少年を戦場に駆り立てなければならぬ矛盾を、この男はどう考えているのだろう。

エリは自分も含めて、この環境を創り上げる全ての事象が不愉快で仕方なかった。

「フツ」

彼女の内心を悟ったかのように、ボスは鼻先で静かに笑った。

小馬鹿にされているようで腹立たしいことこの上ない。

反抗的なシワが一つ増えたのを見て取ったように、彼は続けた。

「彼は第一実行部隊に配属する、それは決定事項だ。つまり、彼を生かすも殺すも、お前達次第ということだ」

「私は自分で刀を取り、？世界の為？にと思って振るってきました。それはこれからも変えるつもりはありません。ですが彼は、それを拒んでいます。今もケンから、護身術を必死に学んでいます。私達はそれ以上の強要をするつもりはありません」

「私の命令でもか」

ここまで来れば意地だ、「…はい」

誠を殺させるような事態は、栄誉ある第一実行部隊の名に懸けて絶対に回避してみせるし、彼が誰かを殺さなければならぬような状況には決して追い込まない。彼のセンスを上手く使えば、何だっで可能にできるはずだ。無理だと分かった作戦には、規則違反と言われようとも同行させなければいいのだから。

頑なな意志が、エリから滲み出ているのをボスは見た。その背後には酒顛や雪町セイギの忘れ形見の姿もある。

何より、早河誠が、あの記憶喪失の少年が自分で選んだ道だ。バーグが何らかの意図を持って彼の保護を求めたのは明らかだが、

あの少年はセイギの生き写しに思えてならない。

我ながら年老いた思考には自嘲してしまいが、今日まで後手に回った例の無い自分が、今更その猪突してばかりだった生き方を変えられるはずもない。

思い立ったが吉日だ。

やはり、彼らにやらせてみる方が面白い。

「そうか。しかし、決定を改めるつもりはない。それはシュテンにも言った」

ボスはそう言うと、デスクに設置されたコンソールを触った。

エリが目を瞬かせていると、再びメルセデスが姿を現した。その両手には一つの大きな、黒く横長のケースが抱えられている。

彼女はエリにそれを渡すと、ボスに一礼して退室した。

少々重いそのケースに首をかしげるエリに、「それを彼に渡せ」とボスは言った。

エリは訝る目を彼に向けつつ、ケースを床に置いて開いた。暗証番号が必要のようだったが、メルセデスによつてすでに解除されていたらしい。

内容物を見て、エリは寒気を覚えた。

コレを知ったのは、剣術を習い始めてしばらくしてからだった。

コレの持つ意味を知っても、廃品だという印象は変わらなかった。

だが扱っていた人間が誰かを知ると、自分の吐いた暴言を腹の中に戻す術を必死で探した。

ケースが一段と重く感じられ、汗ばむ手が静かに震えた。

「……あの、そういうことなら最初から言ってくださいよ」

エリの引きつった顔に、「フッ」ボスは再度、嫌な笑みを漏らした。

* * *

一方その頃。

誠は、彼にとって曰く付きの場所　円形闘技場に似た訓練場で、
こともあるうにケンから護身術を学んでいた。時の流れとは読めないものである。

学んでいると言っても、空手や合気道、徒手空拳にエスクリマ、
軍事的戦闘技術のクロス・クォーターズ・コンバット　いわゆる
CQCなどを教わっているわけではない。誠が骨の髄まで叩きこま
れようとしているのは、センス《韋駄天》を最大限に活用した、超
高速走行術である。

「次の作戦で使い物になりてえなら、この程度の障害は乗り越えて
みやがれ!!」

「は、はい!!」

訓練場の中央に、長さ五百メートルほどの狭い通路を模した、訓
練施設を特設した。その通路には人型のパネルなどの障害物が無数
に置かれ、誠はそれを一息に通過しなければならなかった。

無論、一直線のこのルートをただ通過するだけという単調な作業
をケンが許すわけもなく

「障害物に触れるとセンサーが働く!　髪の毛一本でもな!!」

「はい!!」

「センサーが感知した回数×百の筋トレメニューが待ってるからな
!!」

「はいいいいっ!!」

誠は泣きながら通路を何度も往復した。涙の粒が障害物に触れて、

地獄が百回増えた。

彼よりも先に《韋駄天》に目覚めていた男　雪町セイギは、この訓練でそのセンスを磨いたという。《韋駄天》発動中は動体視力が走行スピードに適応しているとのレポートも残されており、現に誠も、回を重ねる毎に障害物への接触回数が減ってきていた。

まさに神足と呼ぶに相応しい《韋駄天》のおかげで、練習効率も非常に高い。一時間前に始めたが、五百メートルの通路を片道三秒以内で通過するので、すでに千回を優に越えていた。

傍から見れば気味の悪い光景だったが、「若いなあっ、アイツら！」汗だくの酒顛は、首にタオルをかけ、ペットボトルの水を飲みながら郷愁的な気分^{ノスタルジック}に誘われていたのだった。

彼は同じく訓練場の隅で、ウヌバと近接格闘による激しい訓練を重ねていた。

「そうだね。セイギさんがいたら、もっと面白くなっていたかもしれないよ」

清芽も同席している。

彼の場合、あくまで誠の担当医という立場であって、前線に復帰するつもりは更々ない。

ここに漂う実戦の空気に血が騒ぐこともなければ、戦場という言葉葉に身震いすることもない。

二十三年前のあの日　雪町セイギが亡くなったのを境に、自身^{自身}が戦うことに意味を見出せなくなった。

清芽ミノルは、独り、戦争を放棄した男なのである。

しかし、酒顛達のように戦場に立たなくてはならない人間への助力は惜しまない。役目を終えたのは自分であって、他ではないからだ。

だからこうして、医師として組織に残り、誠の決意にも温かい目を向けるのである。

「《韋駄天》使いが二人もいれば、我々の仕事は何も無かったでしょうなあ！」

「…本当にね」

？セイギさんが生きていれば？

最後に戦場を後にしてから、そのセリフが脳髄で去来しない日は無い。後悔先に立たずと言うが、彼の死ばかりは、あまりに大きな過ぎる損失だった。

そうして後悔の日々を過ごしていると、早河誠が現れた。

？マコト君が、もっと早くに現れてくれていたら？

最近では、そればかりを考えてしまう。どうして、今頃なのだと。《韋駄天》に恵まれた者が二度もこの世に生まれてくれた幸運を顧みることもしせずに、そんなことばかりを。

暗い感情が頭を重くして、清芽は自分の足元に目を落とした。自分の影が疎ましく思え、タバコの火を消すように人知れず踏み躪った。

そこへ誰かの足が隣に見え、清芽は少し驚いた風に顔を起こした。

「エ、エリ君：！　ん、それは何だい？」

エリの顔はわずかに切迫しているように見えた。

失礼かもしれないが、彼女の真面目な顔はあまり見たことがない。幼い頃から笑顔の絶えない子だったが、実行部隊へ参加した今でも、その天真爛漫な性格は変わっていない。

その彼女が、やけに思いつめた顔をしている。

「マコト君、ちょっと来て！」

彼女の尋常ならざる気配は、ケン達にも伝わったようだ。

清芽は失礼を重ねつつ、《体内透視》と呼ばれるセンスを発動した。彼の瞳孔が縮瞳し、１ミリメートルにも見えないほどに小さくなった。見た目の変化はそれだけだが、清芽の双眸には、確かにエリの体内の様子がハッキリと見えている。

彼女の心拍が少し荒い。喉が渴いているらしく、しきりに生唾を飲み下している。これは、緊張か？

疑問符が浮かんだ直後、やはりそうだという確信を得たのは、どこか見覚えのある黒いケースを抱える両手を見た時だ。発汗が確認でき、交感神経が強く働いていた。

このケースが理由だろうということは、考えるまでもなかった。

「何ですか、エリさん？」

人一倍汗を掻いているように見える誠が、ゆっくりと駆け寄ってきた。

エリはしかめた顔のゆるめ方を忘れたように、依然として固い面持ちで言った。

「私は不本意極まりないんだけど、ボスがアナタにコレをつて」

エリはケースを抱えたまま、中を開いて見せた。

そこに納まった二振りの武器に、誠とウヌバ以外の面々は、驚愕の色を満面に浮かべた。

二振りの武器　一見、刀剣の一種だと思えるそれは、その本来あるべき性質とは決定的に異なる形を有していた。

刃が、無いのである。

西洋における代表的な剣　ツーハンデッドソードのように両手

で持てる把手。^{グリップ}握り拳二つ分ほどの広く、長く、平らな刀身。剣先は半円を描いて、鋭利であるべき刃は全て垂直に削り落とされている。単純に半円と長方形を組み合わせただけのシンプルな構成は、よく言えば近未来的で、悪く言えば子供のオモチャのようだった。それが、二本ある。

「エッジレス…」

酒顔が呻くように、乾いた声を絞り出した。
エリはばつの悪そうな顔をしてうなずいた。

「ボスがね、あの日からずっと、後生大事に保管していたんだって。私も組織の武器カタログで見ただけのことなかったんだけど、あの人はずっと手入れていたらしいの」

「コレを誠にやるって、あのオッサンが言ったのか？」

俺じゃなくてか？

ケンの目がそう訴えている。

しかしエリは、逡巡しながらも首を縦に振るしかなかった。

ケンは齒軋りを立て、エッジレスと呼ばれる異形の一振りを無断で掴み取った。

「ちょっと！ それはマコト君が」

「黙れっ！！」

怒鳴る青年は、困惑する少年にエッジレスを押し当てた。

「マコト。コレが何だか、テメーに分かるか？」

分からない。

剣のようで剣でなく、武器のようで武器でない。その程度しか分からない。

こんな物に、大の大人達が動揺を隠せない理由が分からない。

「コレはな、雪町セイギって男が造らせた、？矛盾の剣？だ」

「ユキ…セイ……？」

腰を引かす少年の背後から、酒顛は肩に手を回して言った。

「雪町セイギ。キミ以前に《韋駄天》を発動し、ある任務中に殉死した組織の英雄　ケンの親父さんだ」

「え、ケンさん…の？」

「《韋駄天》は確かに瞬速で、任務時間を極端に縮めることができる。特に敵施設への侵攻の際には有効的に活用された。施設の中核へものの数秒で到達し、制圧することができたから」

「しかしそれでも、血を流さなければならなかった。敵対するヘレティックが、スピードだけでは突破できない壁として存在するケースがあるからだ。その時、やはり邪魔者は排除しなければならぬ。後顧の憂いを断ち切る為に。戦場への再起を不能にさせて、新たな犠牲を生まない為に」

「……………」

「だからセイギさんは、殺傷性が低く、かつ自分を守る盾としても利用できる近接武器を考案した。それが　エッジレスだ」

「エッジレスは、かつての技術責任者に開発された特殊合金アダマンチウムでできている。この合金は、銃弾さえも軽く弾いてしまう高い硬度と靱性を持つ。開発当時は、事実上最高硬度の合金とされていた。エッジレスはその上、刃が無いから、普通に使えば刃こぼれする心配もないし、金属本来の軽さのお蔭で、普通の刀と同じ程度の重量で済んでいる。単純に振るうだけなら木刀のように扱えて殺すには足りないし、広い刀身で盾にもできるのが強味だ」

武器としては非効率極まりない、まさに矛盾の剣だね。

清芽はそう言って肩をすくめるが、一層怖気づいた誠は、胸に押し当てられたままの剣を受け取れずにいた。

ケンは言った。

「親父は二十三年前、 ユリオン を破壊して死んだ。 研究施設の自爆から、逃げ遅れてな」

「え……」

「フリッツが言っていたのは、そういう意味だ。 組織にとって、『韋駄天』と ユリオン は切っても切れねえ腐れ縁だったってことだ」

「……………」

「俺がコレを渡されなかった理由は明白だ。 俺には『韋駄天』の素養が無く、親父の意志の重さに耐え切れなかったからだ」

ケンは、人を殺した。 何人も殺してきた。

なるべく殺さずにという手加減を、常に続けていくことはできない。

先日の ユリオン 関連施設での潜入はよくでき過ぎた。

殺さない戦いはできる。 できるが、それを続けていけるほど、ケンの心は強くない。

殺さなければ殺されるかもしれない現実の連続だ。

ケンは 挫折した。

「親父の高過ぎる理想の前で足踏みするのが、精一杯だった」

「だから、ボクに持てって言うんですか……？」

「誰も殺さない。 テメーのその甘い考えが通用するかどうか、コレを使って試せばいい」

「そんな……でも……っ」

「壊そうが無くそうが構いやしねえ。異端者の中でも異端であり続けたいなら、コレぐらいしか使えるモンはねえんだ。受け取れ、マコト」

運命だとも、宿命だとも思わない。偶然が塗り重なって、今の色になっただけだ。

しかしその偶然を無駄にしない為には、人が心で感じた衝動に、素直に身を任せなければならない。

エゴはいらない。体面を気にすることもない。

時には流れに逆らわず、風に吹かれてみるのも一興だ。その先で起こった問題も、心の赴くままに乗り越えればいいのだから。

ケンの目が何かを伝えているように見えた。

他の人達もそれぞれに、安らかな顔で肯定している。

人の父親の遺品を受け取るというのはどうにも心苦しいが、彼らがその不安を取り払ってくれそうなのがした。

誠はエツジレスを、両手でしっかりと包み込んだ。

これで良いのか、これでは悪いのか。

誰も答えてくれそうにないけれど、この重さは信頼の証のようで心地良かった。

それは、いつか感じた優しい温もりに似ていた。

〔四〕（後書き）

どうも、T・Fです。

今回は、主人公の武器が登場しました。

エッジレスという鈍らです。

なにぶん英語が苦手なので、語源的に合っているのか不明ですが、この名前気に入っているので押し通りますw

今回はね、他にもメインになった事項があります。

雪町セイギという男と、ユリオン についてです。

セイギはケンの親父で、《韋駄天》に目覚めていた組織の英雄です。彼がいなければ、誠のセンスがいかに重要かということを知ることが出来ませんでした。つまり彼の存在如何によっては、物語の大部分が破綻しかねないというほどのキーマンですよ。怖い怖い。

そして ネイムレス は、ハイパーコンピューターの名称です。人工知能搭載型の造兵廠システム つまり、システムその物の思考によって、兵器を開発し、使用するというものであります。

ハッキリ言って漠然とし過ぎているのですが、いずれその内容について深く触れていきたいと思っています。

ガンダムA G Eでこれに似たシステムが出てきた時はビックリしましたw

かぶらないようにしないとね。

さてさて、今日はこの辺で失礼します。

次回の「五」についてですが、こちらは分量があまりにも多いので、前後編で分けようかと思っています。「エピソード」も一緒に投稿するつもりなので、第一章は次回で完結ということになります。

それでは皆さん、それまでお元気で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3165z/>

ネイムレス

2012年1月14日19時49分発行